許せり。然るに吾人の此の世に處するや必ずしも常に安樂を得べきの地に居る能はず、人世却りて不如意の事多く不幸の中に住む者多し。是に於いてか此の派のヘーゲーシアス（*Hypsias* 紀元前三百年頃の人）は說をなして曰はく快樂を得ずとも苦痛なき狀態に在らば吾人は已に幸福を得たりと云はさるべからず、歡樂を盡さんと求めんよりも寧ろ苦痛なき狀態に在るとに滿足せさる可からず。而して如何にしても苦痛を脫し得ざる境遇に居る者は寧ろ死するの優れるに如かさるなりと。彼れは死を勸むる人てふ綽名を得たり。斯の如くキレーネ學派の快樂說はヘゲシアスに至りて遂に消極的となり厭世論に陷れり。

組織時代

第十四章　プラトーン（Πλάτων）

其の性行及び著作

〔一〕ソークラテースが敎學の全體を悟了し、又彼れ以前に出でたる物理家の諸說をも咀嚼して哲學上新たに一大組織を立てたる者はプラトーンなり。在來の希臘哲學に於ける諸種の肝要なる思想と、ソークラテースの新見地とは、彼れに依りて陶冶融合せられて、西洋哲學史上の一大偉觀たるプラトーンが理想哲學は成り上がりたるなり。

プラトーンは雅典府の人紀元前四百二十七年門閥の家に生る。父をアリストーンといふ。プラトーン初め祖父の名を繼ぎてアリストクレースと稱しき。天資衆に秀で幼時より手厚き敎育を受け、夙くより美術を愛するの傾向ありて詩作をも爲したるとありしが、後ソークラテースの人物と敎學とに接して大に之れに服し其の門に入りて一身を哲理の研究に委ねるに至れり。是より先きヘーラクライトスの流れを汲めるクラティロス（Κρατύλος）に哲學を聽けるとあり。齡二十にし

てソークラテースに師事したる以來八年間其の師の死するに至るまで其の門下に在りき。師の歿後直にメガラに遊びメガラ學徒と交を結べり(ヘルモドーロスの記せる所に從ふ)。其の後久しからずして更に漫遊の途に上りキレーネ、エヂプト及び恐らくは其の他の地方をも遍歷したりしならん。三百九十五年頃には一旦雅典府に歸りきと考へらる。彼れ當時已に著作を始めまた恐らくは教授にも從事せしならん。其の後三百九十一年の頃南部伊太利及びシシリーに遊びて親しくピタゴラス學徒と交りまたシラクウザイの朝廷に行きディオーンと相識れりしが其處の主權者ディオニシオスの意に觸れて俘虜の如く逆待せられ遂にスパルタの使者に付されてアイギナの奴隷賣買地に送られたりしを、或人に贖はれて自由の身となされたり。此の不幸の因由に就きては史家の間に異論あれども、ディオーンと相識りてシラクウザイに於ける政事上の葛藤に關係したるに基因せりと云ふ説或は眞なるに近からん歟。三百八十七年の頃には雅典に歸りて府の郊外に在りしアカデーマイア(Ἀκαδήμεια)と云ふギムナヂオンに一の學會を設け同志を糾合して哲學の講究に從事せしが彼れが名聲の盛んなるに從ひて敎を請ふもの續々として集まり來たれり。

シラクースの老ディオニシオス死し其の女子ディオニシオス位を踐むや、プラトーンは其の友ディオーン(少ディオニシオスの叔父)の慫慂せるに從ひ其の國政を補佐せんと欲して再びシシリーに行けり。彼れのシラクウザイに行けるや我が政治上の理想を實行せんの企圖を懷けりしが事其の志と違ひて雅典に歸れり。其の後三百六十一年ディオーンとディオニシオスとの間を調訂せんが爲めまたシシリーの地を踏みしが政事上の關係よりして甚しき危險の位置に陷りたりしを當時アルキタスを首領としてタラスに覇威を振へるピタゴラス學徒の强大なる干涉によりて漸く危きを免れたりきと思はる。次いで雅典に歸りし後はまた他事を顧みず專心子弟の敎育に從事し三百四十七年八十歳の高齡を以て時人敬慕の間に逝けり。碩學として思想性行の高雅なる實に希臘哲學界の花といふべし。彼れの幽玄なる思想が後世に及ぼせる影響のいかばかり偉大なるかは西洋哲學史を講じゆくに從うて明なるべし。

プラトーンは子弟を敎ふるに當初は專ら對話を以てしたりし如く而してこれは

其の師ソークラテースの模範に倣へるものならんが、其の哲學研究に委ねたる生活の樣に至りては已に大に其の師と異なれるものあり。ソークラテースは廣く訪ひ普く交りて談話を試み研究を促すことに於いて更に人と處とを問ふことなく頗る通俗的なる趣ありしがプラトーンに至りては哲學は世事と離れて別に唯學者の從事するものとなり專ら學校に在りて同志と共に攻究するものとなれり。プラトーンは門閥の家に生れたるを以て政治界に驥足を伸ばすを得るの地位と機會とを有したれど當時雅典の政事は其の心に適はざるもの多く彼れは全くこれと關係を斷ちて一意哲理の研究を以て其の畢生の事業となせり。

〔二〕プラトーンの著作は概ね對話の躰にものしあり。其の結構或は頗る劇詩的活動を具へたるあり或は講述躰に近よれるあり、其の文雄渾莊麗を以て稱せらる。プラトーンが對話篇の少くも或者は文學上の著作として見るも實に得易からざる逸品なり。對話篇中述ぶる所特に一題目を限りて秩序的に論せるにはあらず、知識論、理躰論、倫理論等の問題は概ね相經うて一篇の中に入れり。凡そ彼れの對話篇はもと彼れが同志の輩と共に論談せし所を骨子として成れるものなるが如し。其の多くはソークラテースを立てゝ主人公となせり、蓋し概ね其の口を假りてプラトーンが自說を吐露せるなり。故に對話篇に現はれたるソークラテースを以て直に歷史上の彼れとすべからず。中には固より眞にソークラテースに關する歷史上の事實と見て可なるが如く思はるゝふしもあれど何れが眞に其の云爲せる所にして何れがプラトーンの醇化せる所なるかは容易に辨別し難し。」プラトーンの著作として傳はれるもの多きが中に彼れ自身の作ならずと思はるゝもの亦た少なからず。何れが彼れの眞正の作にして何れがしからざるかは古來プラトーンの研究する者に取りての一の肝要なる問題たり。今日まで史家の考證せる所により眞作と視るべきものを掲ぐれば『プーロタゴラス』(Πρωταγόρας)『ゴルギアス』(Γοργίας)『テアイテートス』(Θεαίτητος)『アイドロス』『シムポッオン』(Συμπόσιον)『ファイドーン』(Φαίδων)『ポリーテイア』(Πολιτεία)國家論『テマイオス』(Timaios)、『アポロギア』(Απολογία 辯護)『クリトーン』(Κρίτων)、『フィレーボス』(Φίλληβος)『ノモイ』(Νόμοι 法律)等も眞作と見て可なるべしと思はるゝものの、次ぎに多少の疑ひを挿み得るは『ソフィスト』『ポリティコス』『パルメニデース』其

の他『クラティロス』『メノーン』『オイティデーモス』『クリティアス』『小ヒッピアス』『オイティフロン』『リシス』『カルミデース』『ラケース』等なり此等は或はプラトーンの自作なりとは云ふべからざるも尙概ね彼れが思想を寫したるものと見て可なるべし、若し彼れの筆に成れりしにあらずば其の學徒の中に出でたることは疑ふべからず。此等多少の疑を挿み得る部類の中最初に掲けたる『ソフィスト』『ポリティコス』『パニメニデース』の三つは彼れが哲學思想と其の變遷發達の趣とを窺ふに頗る肝要なるものなるを以て其の眞僞に就きては學者間紛々たる議論あり。

〔三〕彼れが著作の順序も亦プラトーン研究者間に存する一要問題なり、蓋しそが年代の順序は彼れが哲學の成立を知るに大なる關係を有すればなり。或はプラトーンの著作を見て豫め計畫を立てゝ一の完備せる思想を敘せる者なりと爲すあり、シュライエルマヘルの如き是れなり。されど此の見解の根據に缺けることは敢て看るに難からず。プラトーンの思想は寧ろ時代と共に變化し而して其の著述は其の時期々々の學相を示せるものと見るは至當のとならん。然れども或史家の如く彼れの學說を以て單に時々に思ひ浮かべたる思想を連絡もなく述べ出でたるものに過ぎずとなし更に組織的關係の見るべきなしと云はんも妥當の言にあらじ。プラトーンが思想に變遷發達のありしは明らかなれど其の間おのつから連絡ありて大躰上一組織を成せることも亦强ひて否むべきにはあらざらん。

彼れが第一期の著作と見るべきは其の尙ソークラテースが敎學の範圍內に在りし時の作にして述ぶる所概ね其の師の說きし種々の德行(勇氣、友愛等)を題目としてそれらの觀念を明かにせむと試みたるものなり。此等の中或はソークラテースの尙世に在りしころ已にものせるものもあらん歟。『リシス』『ラケース』『小ヒッピアス』等は此の第一期に屬せしものならん。また『アポロギア』『クリトーン』『オイティフロン』は皆ソークラテースの爲めに辯護せるものにして要するに其の師を如實に世に傳へんとしたるものなれども其が著述の年代は後の期に屬するならん。

プラトーンが第二期の作として見るべきは當時隆盛を極めたると共に又弊害を極めしソフィスト輩の說に對して漸々自家の立ち場を明かにせるもの也。彼れ初

めはソフィストの說に對せしむるに彼れ自らの解したるソークラテースの敎義を以てし前者を抑へて後者を揚け專ら破邪を事とせしが如し。但し此等破邪を事とせる著作の中己にソークラテースの範圍を越えてプラトーン自家の立ち場を拓きつゝありしを看るべし。此の種類の對話篇中主なるものは『プロータゴラス』、『オイティデーモス』『クラティロス』『テアイテートス』『ゴルギアス』『メノーン』等なり。他を破するの方面よりして漸次自らを立するの方面に移り來たり其の自論を顯すことを主意としたるは『ファイドロス』又彼れが對話篇中最も美なりと稱せらるゝ『シムポッオン』又其の書の成立に關して議論の紛々たる『ポリタイア』等なり。

此等の著作に於いては既にプラトーンがイデア論の略ぼ其の形を成せるを見る。要するに此の期の著述は更に之れを細別するを得べけれど、其の順序は到底審にするを得ざるを以て今は姑く凡て之れを第二期に收む。

其三期に屬するは彼れのイデア論が其の形を成し而して漸々其の論理的方面より轉して目的論を形づくるに至れる時代の著作にして『ファイドン』『フィレーボス』『クリティアス』『ティマイオス』等これに屬す。此等の著述はプラトーンが第三回シリー漫遊の前後に成れるものと見て差支なかるべし。此等に於いては明かにピタゴラス學徒の影響を認むることを得。

プラトーンが老後の著作として見るべきは『ノモイ』(法律)なり、これに於いて彼れがイデア論は全然ピタゴラス學派の數論によりて改造せられたり。此の『ノモイ』を以て彼れが最後の著作と見るを得べし。

ディアレクティック

〔四〕プラトーンが哲學の出立點はソークラテースが知見を明かにし以て道德を樹てんと志したる所にあり。前に述べたるが如く不完全なるソークラテース學徒等も多少師の敎學に影響せられたる所あれども未だ能く其の本旨を十分に看取してこれを受け繼げる者とはいふべからず。プラトーンは實に之れを繼ぎて其の哲學の大眼目となせり。

ソークラテースは吾人の知識を以て事物の遍通不易の性を觀取するに在るものとなしたれども如何にして斯かる知識のあり得べきかに就きては未だ滿足なる說明を爲さず即ち未だ十分の意識を以てプロータゴラスの知識論に對し之れを

破りて自家を立するに足る程の說明を與へざりき。ソークラテースは斯かる純然たる知識上の研究に心を潛めずして寧ろ其の目的たる道德論に奔りたり。彼れは自己の堅固なる道德的確信に基きて道德を樹てんにはかくの加き知識なかるべからずと考へ、此の故を以て斯くの如き知識は眞實有り得べく、無かるべからず又吾人の達し得るものならざるべからずと信じて疑はざりき。プラトーンは此の問題を採り來りて深く知識論に入り十分の意識を以てプロータゴラスに對したり。

かくの如く其の師の敎學の大主眼は是れ即ちプラトーンが攻究の出立點なるが之れより打ち立ちて哲學の大組織を成就せんが爲め彼れは更に眼をソークラテース以前の諸家の思想に放てり。在來の希臘哲學の肝要なる思想は凡べて彼れが眼界に入り來たれり。彼れは此等諸の思想を攝取してソークラテースに於いては見るべからざりし大組織を成し在來の諸說とは大いに其の面目を異にしたる新哲學を打ち立てたり。在來の學說中やゝプラトーンの大組織と肩を比べ得べきものは時代に於いても彼れに接近したるデーモクリトスのアトム論あるのみ。

〔五〕ソークラテースは哲學の研究の精神方法に於いて新生面を發揮したれども未だこれを特に研究法としては說かざりき。プラトーンに至りては研究法の論理上の手續きは其の師に於けるよりも更に明らかに自覺せられたり。されど前にも云へる如く彼れの著作は大抵對話篇にして論述する事柄を嚴密に區畫せざるが故に其の哲學組織の部分順序等に就きては彼れ自ら明示する所あらず。唯其の所說の全躰を見、また後にアリストテレースに至りて更に明らかになれる所の區別より見ればプラトーンの哲學は之れをディアレクテク、物理論、倫理論の三部分より成れりと見て可なるべし。但し此の三部分はプラトーンが哲學の組織に於いて皆同等の價値を有せるにあらず、後にも述べんとする如く物理論は他の二部分に對して寧ろ附屬物たるの位置に在り。プラトーンは數學を貴びたれどもそは唯これを哲學研究の準備と爲したるにて哲學の一部と見たるにはあらず。彼れはまた音樂及び躰操を以て吾人が心身の修養に缺くべからざるものと視たり以上はプラトーン學の大躰の趣向なり。

〔六〕 請ふ先づディアレクティックよりしべん。プラトーンが知識論の主眼はプロータゴラヌに對してソークラテースの所謂概念的知識の有り得べくまた達し得べきものなることを說かんとするに在り。之れを說かんとしたる究極の根據はもとより其の師に於けると同じく倫理道德上の要求に在り。而して其の要求に應する眞知識の秩序的に形づくる方法是れ即ち彼れが所謂ディアレクティック(διαλεκτικὴ μέθοδος)にして語を換ふれば事物の遍通不易なる眞相を看取して概念を形づくるの方法これなり。其の方法としてプラトーンはソークラテースの既に用ゐたりし歸納的研究法(即ち個々の事物を蒐集比較して其の眞性を看取するの概念を形つくると)に加へて更にまた已に得たる概念を確むるの方法をも說けり、則ち得たる概念より出で來るべき事柄を論じ出たしそを已に確實として知られたる事柄と照らし合はせ兩者の相合するによりて更に其の概念を確むると是れなり。前なるは個々の事物より概念へ上るの方ともいふべく後なるは概念より個々の事物へ下るの方ともいふべし。要するに是れ各種類の事物につき各種の概念を形づくるの方法なるが之れと共にプラトーンが相離さずして又新に明らかに自覺して用ゐたりしは概念と概念との關係を見其の合ふと合はざるとによりて之れを分かち行くの方法是れなり、之れを約言すれば是れ即ち概念の組織を形づくるの方法にして以て如何なる概念が同列に位して自他の差別をなし如何なる概念が上下の關係をなして一が他に屬するかを見んとするなり。例へば植物と動物とは同列の關係あるが故に相互に自他の差別をなして植物は動物にあらず動物は植物にあらず、然れども共に生物に對しては上下の關係をなして植物も生物なり動物も生物なるが如し。

〔七〕 かくの如き概念の組織を形づくる是れ即ち吾人の知識を形づくるなり。斯くの如き知識は事物の遍通不易なる本質(οὐσία)を得るものなればプローータゴラヌの說くが如き念々刻々に變はり行く、五官の感覺とは異なり。プラトーンの論ぜんと欲する所はかくの如き概念的知識が是れ即ち眞知識にして五官の感覺は眞知識にあらずといふことにあり。おもへらく感官上の知覺(αἴσθησις)は變化生滅の世界に懸れる一時々々のものに過ぎず以て遍通不易のもの即ち事物の理法を知るに足らず。俗識(δόξα)亦是れ眞知識に非ず、そは俗識は五官の感覺と異なり

て多少事物につきて考定する所あるものなれども未だ明瞭に其の理を看取せざるものなれば也。ソークラテースが自ら顧みて自家の無知を白狀したるは此等五官の感覺及び俗識の未だ以て眞知識と爲すに足らざるを知りたれば也。眞正の知識を得るもの即ち理智(νόησις)は明瞭に事物の遍通不易なる本性を看取するものならざるべからずと。

斯くしてプラトーンはソークラテースの立場に據りて眞正の知識は事物の遍通不易なる本性を知るに在りと主張するのみならず、また斯かる知識を在り得ざるものと論じたるプロータゴラスの知識論を根柢より覆さんと試みたり。彼れ論じて曰はく若し五官の感覺其の者が知識にして感覺以外に眞知なくば見ゆると在るとは同一ならざるべからず。若し斯の如しとせば知識は畢竟時々刻々の感覺即ち各人に見えたる有樣に止まりて在らゆる論議はすべて主觀的又個人的のものとなり了らん。即ち是非眞否の區別はこゝに全く廢れて時々刻々個人の五官に現はれたる樣の外眞理なるものなきに至るべし。誤謬といふもの實はあるべからず、そは誤謬を正すべき標準が個人の時々刻々の感覺以外に存せざればなり。之れを要するにかくの如く全く個人的又主觀的なる知識論は自殺に終はらざるべからず。何となればかゝる說に從へば吾人は遂に遍通不易の知識を得べからざるがゆゑに斯くの如き知識論も亦た當座の感想たるに止まりて之れを遍通不易の確論萬古不易の眞理なりといふを得ず、萬古不易の眞理と云べきもの無ければ也。また若し五官の個々の感覺のみを以て知識の要素なりとせば通常所謂感官の知覺をだも說明することを能はざるべし。何となれば通常知覺すといふとの中には彼れと是れとの關係を定むるの作用ありて此れをたゞ五官の感覺とのみは見るべからざれば也。又若し事物に遍通常住の相なく唯無常なるもの、流轉變化極まりなきものならば吾人は遂に之れを知ると能はじ、觀取すべきの定相なければ也、觀取せむとせば其の物は夙く既に其の物にあらざればなり。此の故に事物を知識すといふ以上は其の事物に遍通常恒の本性あるとを許さゝるべからず。其の常恒性躰を看取する是れ眞知識なり。

〔八〕件の眞知識を得るは感官以上の働きに依らざるべからず、何となれば五官の感ずる所は常に流轉變化して定まり無きものなれば是れを以ては事物の永恒

の理法を觀取し得べからざれば也。これを觀取するものは感官上の働きならぬ心性作用即ち理智なり。此の理智の對境となる者をばプラトーンはアイドス(εἶδος)と名つけたり、又之れに名づくるにイデア(ἰδέα)と云ふ語をも用ゐたり、又之れをウシア(οὐσία本質又は本躰)又 αὐτό καθ αὐτο(自存、自性)と名つけたり。是れをプラトーンが哲學の骨髓なるイデア論となす。彼れの謂ふイデアは哲學史家の屢〻云へる如く恰もソークラテースの所謂概念をして客觀的に形而上の存在を有せしめたるものと見るべし。而して此の如きイデアを心に觀取するの方法これ研究法としてのディアレクティックなり、イデアの何たるかを論ずるもの是れ形而上學のディアレクティックなり。

〔九〕 プラトーンがイデア論の由來を尋ぬれば四ッの要素ありといふを得べし。(一)ソークラテースの教學及び(二)之れに對するプロータゴラスの知識論(三)エレア學派の實有論及び(四)之れに對するヘーラクライトスの流轉論是れなり。プラトーンはヘーラクライトスが所謂流轉變化の世界を自家の學説に取り入れて之れを吾人の感官に現はれたる世界と見たり。語を換ふればプロータゴラスが知識論に云ふ所を以て此の變化流轉の世界の事なりと見たるなり。彼はまた更に之れに對してエレア派の思想を取り入れてその所謂常住不變なるものを眞實躰と見、而して之れを看取するもの是れ即ちソークラテースの所謂概念的知識なりとせり。之れを要するにプラトーンのイデア論はプロータゴラスの謂ふ感官の知覺とヘーラクライトスの謂ふ變化の世界とを結び、ソークラテースの謂ふ知識とエレア學派の謂ふ實有とを結びたるものなり。後なる結合は前にメガラ學派の試みたる所なれどそはプラトーンに於いて始めて有効なる結果を來たせり。看るべし在來の希臘哲學の諸種の大思想がいかに彼れによりて採擇融化せられたるかを。かくして成れる新組織が是れ即ちプラトーンのイデア論、彼れが哲學の基礎なり。吾人はプラトーンに於いて常住不變なる實躰界(ἰδέαι)と變化流轉の生滅界(γένεσις)との對峙が始めて明かに思ひ浮べられたるを見る也。

〔一〇〕 此常住不變の實躰界これ實有にして生滅の世界是れ非實有なり。而して實有の界はイデアの界なり。右開陳せる所に從うてイデアの何なるかを約言せばイデアは感覺以上の者、形躰ならぬ者、個々物をして一種類を爲さしむるもの

即ちそれに遍通なるもの、統一的のもの、常住不變のものなり、又個物の多なるに對して一なるもの(μόνας)なれどエレア派のいふが如き抽象的の一にあらず、事物の種類の相異なるは相異なるイデアあればなり。而してイデアの相互の關係は前に云へる概念の關係を成り立たしむるの模型なり即ち同列と上下との關係を保ちて同列のイデアは相互の自他の關係を爲し、各〻自からに對しては有、他に對しては非有なり、蓋し各イデアは自存する實有のものなれど同列にある他のイデアにあらざれば也。而して吾人が知識を形づくるに於いて一概念と他の概念の相結ばゝる所以は蓋し下なるイデアは上なるイデアに從屬してそれに統括せらるればなり。故に二個の概念を繫ぎて彼れは此れなりと云ひ得る也、例へば動物又植物は生物なりと云ひ得るが如し。斯の如く同列のものは互に自他の關係を爲し上下のものは下が上に屬しこれに與かるによりて存在するの關係を爲せる是れ即ちイデアの組織にしてかゝる組織を有するイデア界是れ即ち實體の界なり。

〔一一〕 打ち見たる所プラトーンが云ふイデアの相互の關係は論理學者の所謂外延と內包とに於いて概念が互に廣狹上下を爲すの關係の如く上り行くに從ひて外延の廣くなる代りに內包の貧しくなるが如く思はるれど、是れ決して彼れの眞意にあらず。彼れの所謂概念は分析抽象の結果ならずして寧ろ事物の眞性實相を直觀したる者なり。故に其のイデアの階級を上り行くに從ひて其內容の貧しくならざるのみか却りて益〻深く事物の眞相に分け入り却りて益〻多くの事物を成り立たしむる其の實性に到達するなり。生滅界の個々物は唯イデアに與かる所あるによりて僅に其の事相其の存在を有するもの、イデアの全躰を宿せるものにあらず。されば個々物は唯だイデアの影を示すことによりてイデア其の物を吾人の心に思ひ浮べしむるの緣となるのみ。語を換へて之れを言へば個々物は依りて以てイデアを知るべき充分なる原因にあらずして唯だ心理的動機となるのみ。イデアを知るべき知識の眞因は尙ほ之れを他處に求めざるべからず。プラトーン以爲へらく吾人の心性はイデアの知識を本具せる者なり。イデアを知る知識は本來吾人の心性に具はれるものなれども今は忘られていはゝ唯だ心底に潛めるなり、個々物を見るの要は此の忘られて潛み居るイデアの知識を再び思ひ起こす(ἀνάμνησις)の緣を供するに在りと。故にプラトーンに從へば吾人が眞

知識を得るは未だ曾て吾人の具へざりし者を得るに非ずして曾て知れるものを再び思ひ起こすなり。さきにソークラテースの人を敎ふるや他に新らしき知識を注ぎ入るゝにあらず他をして自ら知識を產み出さしむるの手傳ひを爲すのみなりと云へる其の產婆術がプラトーンに於いて奈何に變形して幽玄なる思想となれるかを見よ。

プラトーン思へらく、上述の如く吾人が本然の性はもとイデアを知らざるにあらずしてたゞ今これを忘れたるに過ぎざるがゆゑに吾人の心性には何となくイデアを思ひ起こさんと力むる傾向即ちイデアを慕ひ求むるの心あり。凡そ善美なるものを愛慕する心の吾が人性に存するは此のゆゑなりと。是れプラトーンの有名なるエロース(ἔρως戀愛)論なり。吾人が件のイデアを慕ひ求むる心は下等の狀態に於いては形躰美を愛する心(即ち俗に謂ふ戀愛)として現はるれど、其の最も高尙なる段階に進めば是れ即ち眞善美そのものを觀んと欲する哲學研究の心なり。哲學の起こる吾人に此のエロースあるに基けり。

〔一二〕 プラトーンがイデア論の要は上に述べたるが如し。更に進みて幾何の

イデアありて同列上下の關係をなせるかは彼れ自らもこれを詳說せず。思ふに委細に之れを考へんとせば大なる困難に會はざるを得ざるべし。第一にすべて普通名詞を下し得るところには皆イデアあるか否かの難問に接せざるべからず。一切の事物善惡高下美醜の如何に拘らず、又事物の關係、性質等抽象的概念に至るまでも悉皆それのイデアありや否や。プラトーン初めは凡べて普通名詞を用ゐ得る所には悉くイデアありと考へたりしが如し。之れを例せば糞土には糞土のイデアあり大小の關係には大小といふイデアあり、醜惡の性質には醜惡といふイデアありと考へたりしが如し。されど後には唯だ價値あるもの即ち善美なるもの及び定相ある自然物及び數理的關係(例へば一二の如き)にのみイデアの存在を許したり『シムポジオン』『ファイドーン』『ティマイオス』等)。またアリストテレースの言によればプラトーンの晩年に至りては人間の製作及び否定缺乏を意味するもの及び事物の關係にはイデアを承認せざりきとぞ。

斯くの如くプラトーンのイデアに關する思想の變遷發達したることは明かなる事實なり。其の當初イデアを論ずるや主として之れを論理的關係より見たりし

が後には次第に目的上即ち價値上の關係より觀察することゝなり其のイデア論は益〻理想論として形づくらるゝに至れり。以爲へらく實有なるものは理想なり、善美なる理想これ即ちイデアなりと。是に於いてか彼れは善美ならぬものゝ實躰に於ける存在を承認せざるに至れり、即ち前に論理的と考へたる事物の種類の概念としてよりも寧ろ善美なる理想としてイデアを見るに至れり。ソークラテースの弟子として究極は道德的眼孔を以て世界を眺めたるプラトーンのイデア論が是に至りて理想論となれるは其の當に行くべかりし處へゆけるものと謂ふべし。

〔一三〕 尙ほ他にプラトーンのイデア論をして益理想論又目的論の性質を露はさしめたるは其の論に於いて最も説明を要する點なるイデアと個々物と、即ち實躰界と生滅界との關係なり。プラトーン以爲へらく個々物即ち生滅界は全くイデアを含むものに非ずして唯だイデアの模倣 (μίμησις) なり、唯イデアに似よれるのみにして如實のものにあらず。イデアは原型 (παράδειγμα) にして感覺界の個物はそが影像 (εἴδωλον) なり。故に生滅界は實有の世界に對すれば非實有の世界なり、實物に對してはそれが影の如き世界なり、非實有の世界にして尙ほ幾多事物の相を現はすは唯其が覺束なくも多少イデアに與かり (μετέχειν) 居れるがゆゑなり。而して個々物の常に生滅流轉して極まりなきは其の恒久にイデアを宿さゝるによる、イデアが或はそれに來たり或はそれを去るによる。イデアの來たりて個々物に宿れば其の物よく其の事相を現はしイデア去りゆけばすなはち其の物其の相を沒す。斯くして個物の界は無常なり。

〔一四〕 かくの如く説かばイデアを以て現象界の原因 (αἰτία) と見做さゝる可からず。然れども件の原因てふ意味はプラトーンに於いては目的 (τέλος) と同一なり。惟へらく個々物を生ずるの原因は善美なる目的にあり。善美なる理想是れ即ち萬物の極致、此の極致是れ其の目的、此の目的是れ即ちイデアにして現象界の諸物は其の目的の故を以て生じ又滅する也。イデア其の物は活働變化の中に在らず常住不變の性を具ふれど唯た其が善美なる目的たるの故を以て個々物の界に其の相を現すなり。されど其れが個々物の上に現ずるや唯一時そが覺束なき影を宿せるのみ、圓滿に其が眞相を宿すこと能はざるを以て個々物は常に變化流

轉の中に漂ふなりと。是に於いてか吾人は曾つてアナクサゴラスにほの見えたる目的說がプラトーンに於いて最もよく其形を成せるを見る也。

かく眞實存在するものは善なる者に外ならずといふの論據よりプラトーンはイデア組織の頂上に善と云ふイデアを置きて是れを神明とも名つけたり。又これを萬象を顯照する太陽に譬へたり。プラトーンが此の如く善てふイデアをイデア界の頂上に置き之れを以て萬象の究極原因となせるは是れをソークラテースの思想に結び附くれは其の由來更に明かなるへし。ソークラテースが事物を觀察するや專ら道德論の立場にありてしたるが故に其の着眼の點はおのづから其の事物をまかあらしむる所以の職分に在りき。思へらく畫工の畫工たる所は能く畫くことに在り、治者の治者たる所は能く民を治むることに在り、之れと等しく手足の手足たり眼耳の眼耳たる所は皆それ〳〵の職分を盡くす所に在りと。斯かゝる見樣を一切の有機界に押し擴げんは難きことにあらず、而して實にプラトーンは其の目的觀を持しかゝる眼孔を以て一切の物を見たり。一切の物のあるは皆その各〻に其の在るによろしき地あればなり、而して各〻に於いて善き所あるは全躰に於いて善き所のある在りて之れに統括せらるればなり、即ち個々の目的は全躰の目的によりて定めらる。此の故に全躰の究極原因としてそをまかあらしむるものは善といふとなり。斯くの如くプラトーンはソークラテースが專ら人事の研究に用ひたりし思想を打ち擴げて宇宙全躰に及ぼせるによりソークラテースの目的論は彼れに至りて形而上學としての目的論となり前者の求めたる善といふものが全實在の究極とせられたるなり。

斯くしてイデアの上下の關係は論理的なるよりも寧ろ目的上の關係となりぬ。而して事物存在の眞因は其が極致たる、其が理想たる目的に在りとせらる。通常所謂事物の生因(形躰に現はれたる個々物間の生起上の關係)は寧ろ其が生起の緣たるに過ぎず手續に過ぎず。是に於いて古來理想論の一大模型と見らるゝプラトーンの哲學は成り上がれり。

〔一五〕こゝに問ふべきはイデアが何故に個々物界に覺束なく其の痕跡を宿すに止まるか、畢竟個々物の存在するの理由は如何と云ふとなり。若し實有なるものがイデアのみならんには如何で其の外に個々物の界はあるぞ。假令ひ實現す

べき目的が理想界にあればとて之れを實現せんとする個物界は何故に存在するぞ。個物界存在の理由は上來の論を以ては未だ說き得たりといふべからず。

是の故にプラトーンは實有なるイデアに對して非有（μὴ ὄν）を持ち來たれり。もへらく個々物が唯イデアの覺束なき影を寫すに止まるは非有に妨げらるればなり、換言すれば個物界はイデア（有）と非有との結合によりて成れりと。

プラトーンがこゝにいはゆる非有の何なるかに就いては哲學史家其の解釋に困しむ。ツェラーは之れを解してエレア派の所謂非有即ち空間（虛空）を意味せるものとなせり。空間は是れ形なくして為かも凡ての形を取り得るもの、物躰が其の形を現じ得るの處なり。プラトーンが『フィレーボス』に於いて二元說（即ち定限なき、從ひて形なきもの（ἀπειρον）と、これに形を與へて個々の形躰を成さしむる者（πέρας）即ち數理的關係と）を說ける所はまさしくピタゴラス派の說を取れるもの、而してかく彼れの說が漸々ピタゴラス派の說に近つき來たれる所にては其の所謂非有は次第に其の派の所謂アパイロン（無定限）と同じきものとなり從ひて虛空と同一のものとなるの傾向を有せりと視るを得べし。エレア學派に謂ふ非有並びにピタゴラス學派に謂ふアパイロンと、プラトーンの謂ふ非有とは親密なる關係を有せるものなるや疑なからん。尙プラトーンは其の謂ふ非有と虛空とを明かに同一視したりとまでは云ひ難しとするも、非有は兎に角定相なき者即ち有（イデア）の反對にして從ひてイデアにつきて云ひ得る事の反對を云ひ得る（即ち消極的に說明し得る）に過ぎずと考へたりしならん。プラトーンが非有の何なるかを說くとの明かならざりしは其が論據の當然の結果なりと云ふを得べし。定相なき非有は明瞭に形容し得べきものにあらず、何となれば彼れに從へば明瞭なる知識の對境となる所のものはイデアのみなるを以てそが反對なる非有は明瞭なる知識の對境となす可からず、從ひて消極的說明を用ふるに止めざる可からざれば也。

ピタゴラス學派の說を攝取し來たるに從ひてプラトーンは益〻數理的關係を容れ其の媒介に依りてイデアが形躰に現ずることを爲すやうに說くに至れり。もへらく數理的關係は有と非有との間に介して空間に於ける形躰を有する個物界を現すと。

（一六）プラトーン晩年に及びては益〻ピタゴラス派の所說を入れイデアと該派

の所謂數との關係をしていよ〳〵親密ならしめたり。彼れは遂に該派の所謂太一と彼れの謂へる善の(イデア)とを同一視し、更に該派の謂ふ奇偶即ち定不定の對峙と彼れの謂ふ有(イデア)非有の對待とを同じきものゝやうに說くに至れり。こゝに於ては彼れがイデア論は其の本來の面目を改めてピタゴラス派の數論に化せられたりといふも不可なし。

〔一七〕 プラートンはイデアを實有としこれに對したる他のもの(τὸ ἕτερον)を非有と名つけたれども其の非有も有に對して在るものと見ざる可らざるが故に畢竟するに彼れの說は二元論となれりと云ふ批評は免れざるべし。イデアは個々物の界に全くは實現されずと說けるはイデアの存在を妨ぐるものゝイデア以外に存ずることを示し又イデアを以て個物界に現れむとする活力あるものゝ如くに考へざる可からざることを示さずや。プラートーンはイデアそれ自身を活動力と見ず、又そを原因と名つくるも畢竟目的といふ意味にての原因に外ならずと說けども、そが動力的原因たるの方面を持ち來たらずして能く生滅界の存在する所以を說き得べしや。全く此の方面を持ち來たらずしてはイデアの去來といふとも遂に無意義なるものとならん。對話篇『ソフィイスト』に於いては實際此の問題を提起してイデアを動力的原因と見ざる可からざることをほのめかしあり、即ちこゝにイデアを實躰(ὄντως ὄν)と見るのみならず其の實躰を動力あるもの(δύναμις)と見ざるべからずといふ論の緒を開きあるなり(但しこれはプラートン自家の思想を表出せるものなるか否かに就きては史家其の意見を異にす)。

かくの如くプラトーンのイデア論は現象界を說くに及びて多くの困難に逢ふことを免れず。若し此の現象界を以て實在するものにあらずとし、其の恰も實在するが如く見ゆるは吾人が感官の見樣の不完全なるによるとせば一應プラトーンの說に於ける困難を取り除き得るが如く思はる。而してプラトーンはまさしく現象界を以て全く吾人の主觀に存する現象に外ならずと視たりと說く哲學史家もなきにあらず。プラトーンが語のかゝる意味に解せらるゝ節もなきにはあらず、又彼れがプロータゴラスの知識論を生滅界の域內に許容せるを見ればデーモクリトスが同じくプロータゴラスの思想を用ゐて物躰の感官的性質の主觀的說明を試みたる如くに主觀的說明に一歩を踏み入るゝはプラトーンに取りて全く

縁遠きとにはあらざりしならん。然れどもその如き主觀上の不完全なる感官的知覺の存ずる所以を尋ぬれば遂にプラトーンの云へる如き有、非有の對峙を持ち來たらざるを得ざるべし。又彼れは十分に明かなる意識を以て主觀的説明を用ゐたりとも見えざるなり。

〔一八〕プラトーンの謂ふイデア論は更に説明を要すべき點少なからざれど要するに感官以上の實有界と感覺界との兩界を明かに區別せるは是れ彼れが哲學の樞軸にしてまた哲學史上に一大潮流を開始せるもの也。而して彼れの哲學に對して正反對の立脚地を占めたる者と見るべきはデーモクリトスなり。デーモクリトスの説ける所は明瞭なる機械的唯物論なり。プラトーン學は希臘哲學に於いて初めて明かに物躰以上のものゝ存在を説きてそを實有の界とし却りて形躰の界を實有ならぬものとせり而して其は目的説なり理想論なり。彼れの學説はまたかくデーモクリトスのと兩々相對して西洋哲學思想の二大潮流の源頭に立てる者なるが、其が學説の間にまたその趣の一致せる所あるを見るは奇ならずや。先づプロータゴラスの説に對する關係を檢すれば二者ともに彼れが知識論を取り入れたる趣に相比すべきものあるを見る。デーモクリトスは之れを掘取して吾人の五官上に現はるゝ感覺をば全く主觀的なりと見て曰はく眞正の知識は感官を以て觀る可からざるアトムを知るに存す、一切の物はアトムを以て成し、而してアトムは唯だ空間を充たして形に於いて相異なるもの即ち形(*idea*)が其の本質本性を成せるものにして是れ眞に實有なるものなりと。かくて彼れは感官的知覺と理性的知識とを判かち、前者は物の實相を示さず、これを示すは唯だ後者のみなりとせり。看るべしデーモクリトスは唯物論者にしてまた理性論者なるを。彼れのアトム論は一種の純理哲學なり。プラトーンも同じくプロータゴラスの知識學を掘取してその所謂感覺界を實有ならぬ生滅界のものとし此れを實有なるイデア界と別かてるは前に述べしが如し。デーモクリトスの謂ふアトムは空間に存在するもの、プラトーンの謂ふイデアは物躰ならぬもの然れども二者ともに、かたちといふ語を以て其の特性を言ひ表せるは奇ならずやプラトーンの多く用ゐたるアイドス(*eidos*)といふ語はもと視るといふ詞より來たり凡べて視ゆるもの、殊にかたちを意味し從て若干の事物が一定の象なる具へて一種類を成せるに名つけらるる又彼れが時しに用ゐたるイデア(*idea*)といふ意義に用ゐらるる以にアイドス又はイデアは相を醜して可なる性又は種といふ意味を有して一物のみを意味し從て

るべし。且又デーモクリトスが虛空と形を具へたるアトムとの二者を以て個物界の生起を説明せるはプラトーンが非有と定相を具へたるイデアとを以て生滅界の現存を説けるに似たり。

物理論

〔一九〕上にも云へる如くイデアと非有とが相合して生滅變化の世界の成立する所是れプラトーンの哲學に於いて最も解し難き所なり。されば彼れが自然界の哲學を述べたるものと見るべき對話篇『ティマイオス』には多く譬喩を以て其の物理の論を開展せり。かく彼れが物理哲學に於いて譬喩を用ゐしは彼れに取りて必ずしも咎むべきとにはあらざるべし。そは彼に從へば明瞭なる知識の對境となるべきものは唯だイデア界のみにして生滅變化の自然界に就きては吾人は唯だ覺束なき知識即ち臆說(πίστις δόξης)(是れは俗識即ちの一種なり)を形つくり得るのみ、畢竟自然界に對しては吾人は明瞭なる學理的知識を得べからず、自然界の研究は唯だ自然的知識に達し得るのみ遍通必然の知識に到達すべからず、自然界の一面は定相なき非有なればなり。

〔二〇〕プラトーンが『ティマイオス』に説ける所は何處まで譬喩にして何處より然らざるかは辨別し易からず。曰はく造物主(デーミウルゴス、δημιουργός)ありて彼れ一方にイデア即ち萬物の模型を取り他方に定相なき非有を取りて最初に「萬有の靈」を造りたり。此の萬有の靈は諸物の生氣、精神の本にして凡てのものを形づくる活動力なり。此の靈先づ地水火風の四元を形つくり天躰を形つくり其の他生あるものに至るまであらゆる萬物を形つくれり。此の靈宇宙に瀰漫して何處にも秩序と道理との本元なり。世界が圓滿なる形をなして圓かに回轉するは此の靈のあればなり。世界の外圍は恒星の天にして五個の遊星と太陽及び月とが其の下に位し此等皆相伴ひて地球の周圍を繞る。地球は球形をなして靜に世界の中央に位す。

〔二一〕プラトーンが天文の説に於ては明かにピタゴラス學派の影響を見る。又物理の論に於いてこれを見る。彼れが形躰の構造を説くや萬有の靈が數理的關係に從ひて働くと云へる又四元素が平面を以て組成さるゝことを説ける、是れ明かにピタゴラス學派の説に取れる所ある也。彼れ以爲へらく地水火風の四元素

は皆平面の相重なりて成れるもの、唯だ其の平面の形と大さと其の相重なる數とによりて四種の區別は生ずと。是れ即ち凡べての物學的および化學的性質の差別を幾何學上の差別に歸せんとせるものなり。火は三角形の四面躰、地は正方形の六面躰、空氣(風)は等邊三角形の八面躰、火は等形三角形の二十面躰なりと說ける是れまた當時ピタゴラス學徒の唱へたる所なりと知らる。

〔二二〕 尙ほプラトーンは自然界の有生氣的及び有意識的現象を說いて曰はく、生物殊に人間に於て更に能く萬有の靈の働を看る、人間の精神は此の靈の宿れるもの、然れども此の靈は是れ已に純粹のイデアにあらずして非有に關はる所あるが如く人間の精神も亦た一面イデアに與かれると共に他面に於いては形骸に結ばれる所ありと。是れプラトーンが心理說の根本思想なり。然れども彼れが心理說は其の自然界の論に根據すといはんよりも寧ろ其の知識論及び倫理說に基けりと謂ふべし。啻に心理說のみならず其が自然界の論全躰が(ヂンデルバンドの云へる如く)其の哲學の他の部分と相等しき位置を有せずして寧ろ其の附屬物たるが如き觀あり。ヂンデルバンドが之れをパルメニデースの假設的物理論に比したるも全く理りなきことに非ず。蓋しプラトーンが哲學の動機は物理的研究に在らずして寧ろソークラテースを繼承したる知識及び倫理の研究に存するがゆゑにそが知識論の結果として成り上がれるイデア論及びそが學說全躰の究極の目的ともいふべき倫理說は彼れが哲學の骨髓を成せるものなりと謂うて可ならん。彼れが哲學の價値は到底そが物理論の方面に存せざるなり。

倫理說

〔二三〕 プラトーンに從へば吾人の靈魂は生以前より存し死後に於いても亦た滅するとなし、現世の生活は此の靈魂の肉躰に宿れるなり。蓋し彼れが靈魂の過去存在を說けるは其の由來そが知識論にあり。彼れ云へらくイデアの知識は吾人に取りて全く新しきものを得るにあらずして吾人の本來有せしを再び想ひ起こすにありと。彼れが吾人の靈魂は現身に宿る以前に肉躰に蔽はれざる狀態にありて純粹の理智を以て眼のあたりイデアを觀じ居たるなりと說けるは件の知識論より出でたるなり。また彼れが死後に於ける靈魂の存在を說けるもイデアを尋ひ求むると吾人の心性を根據とせり。おもへらく吾人は現世に在りて全く

イデアを觀じて滿足するに至るを必すべからず、故に吾人が心性を全からしめんには未來の存在なかるべからずと。即ち死後に至るまで理想を慕ひ求むることの休まざる心性の要求是れプラトーンが靈魂死後の存在を說ける根據なり。而して生以前及び死以後に於ける靈魂存在の說はまた素より彼れが道德論上の動機に基ける所あり。蓋し彼れは輪廻轉生と善惡應報とを相結びて以爲へらく靈魂前世に於いて過ちあれば現世に墮落して肉身に宿る吾人若し現世に於いて理想を追慕し善行を積まば死後には更に高等なる存在に入るを得べし、若し惡業を積み陋劣なる生活を爲さば未來に於いて更に甚だしく墮落すべしと。プラトーンは現世に於いて罪惡を犯せし者は來世に於いて禽獸界に墮落すべしと說きて仔細に罪惡の種類と墮落すべき境界の種類とを列擧せりしが、これには固より譬喩を混じて說けりしならん。

吾人の靈魂が何故に墮落して肉躰に宿れるかの理由に就きてはプラトーンの說明一定せず。約めて云へば吾人の靈魂は素より純粹のイデアならずして已に多少非有に與かる所あり從ひて物界即ち感官界に引かさるゝの傾向あるが故にその傾きの強きものが墮落して肉身に宿れりとの說明最も重きを爲せるが如く思はる。

〔二四〕吾人の靈魂が肉躰に宿れる狀態に於いては二つの方面あり。一は理想界に向かふもの他は肉身に繫がれて身躰の生氣となるもの是れなり。是の故にプラトーンは吾人の精神に於いて其の部分を區別せり。但し或對話篇『ポリタイア』、『ファイドロス』及び『フィドーン』等に於ては精神の部分といふも同一靈魂の働きにて畢竟一心に於ける種々の作用に外ならずと說くに止まれども『ティマイオス』に至りては一轉して尊き分部と卑しき部分との相分離し得べきことを說けり即ち精神の部分を明かに部分(μέρη)として說くに至れり。以爲へらく尊き部分は肉躰を離れて存在し得るもの即ち純粹の理性(λογιστικόν)にしてイデアを觀ずるものなり。他は吾人の靈魂が肉身に繫り居るの故を以て存するものにして其の中更に上下の區別あり。下なるは物欲(ἐπιθυμητικόν)にして上なるは氣概(θυμοειδές)なり。氣概は恰かも理性と物欲との中間に立てども物欲と共に肉躰に屬し肉躰を

離れて存するのに非ずと。

〔二五〕 かくの如く吾人の現世に在るや吾が精神的作用に兩面を具して一は理想界に向かひ他は肉躰に繫がる。是に於いてプラトーンの倫理説に二つの方面を生ず。一は解脱の方面即ち肉身及び肉身に屬するものゝ羈絆を脱して只管に理想界に上るの方面にしてこれにはおのづから厭世的傾向の存するを見る。プラトーンが哲學の一面に形骸を卑しみて解脱を求むる傾きの存在することは明かなり。然れども其の道德論は此の解脱的方面のみを以て成るにあらずまた希臘思想の特質なる美術的趣味を帶べり。此の他方面より見れば彼れの道德論は吾人の享け得たる諸能(即ち吾人の性)を全うしそを宜しきに從ひて發達せしめ吾人の生活に優美なる調和を現ずるを要すとす。即ち彼れの思想よりすれば一見ひたぶるに形骸を脱することを求むるが如くなれどまた必ずしもさか説くを要せず、そは肉身を棄てずして却て吾人の生活にイデアの現ぜんことを力むべしと説くの餘地あればなり。一言に云へは形骸を脱してイデアを求むるの方面と共に又能く形骸に於けるの生活にイデアを實現せしめむと力むるの方面を存するなり。而して何れの方面に於いてもプラトーンの立場は主知説なり。以爲へらく吾人の知見明かにして初めて解脱を成し得べく、理性主裁となり宜しきに從ひて他を導くによりて初めて吾が現世の生活に優美なる調和を來たすを得べしと。即ち此主知説に於いてもプラトーンはソークラテースの弟子なり。

〔二六〕 吾人の幸福は有德なる生活によりて始めて全うせらるべしと説ける所是れ亦たプラトーンがソークラテースの思想を繼承したる所なり。説いて曰く有德なる生活は吾人が靈性を全くするに在り唯快樂を求むることにあらず。快樂を以て吾人が生活の支配者となすべからず。何となれば快樂は定まりなきもの、或は有り或は無く、其の度を過ごせば却て苦痛を來たすものなればなり。又肉躰の快樂は多く苦痛と相離るゝ能はず蓋し先づ缺乏の苦痛ありそが除去さるゝことに始めて快感を感ずる場合多し。これを要するに快樂以外に吾人の生活を支配するものなかるべからず。何ぞや。知見即ち是れなり。凡そ事物の過不及を酌量して秩序を保ち美しき調和を來たすは唯だ知見これを能くす。吾人が心の諸性能は知見に導かれて初めて圓滿に活動するを得るなり。靈魂の健かに働

くことと是れ即ち德なりと。但しプラトーンは快樂が吾人の幸福の一要素を爲すことを否まず、たゞ幸福の要素の主なるものは知見なり快樂にあらずと說けるなり。

〔二七〕吾人が精神の諸性能が知見の指導に從ひ圓滿に働くことによりて前に云へる靈魂の三部分は各〻特殊なる德を具へ來たる。凡てを支配する知見はもとより理性の作用なり。理性がその觀取するイデアに從うて他を支配するは智(σοφία)の德なり。理性に從うて氣概が其の所を守るは勇(ἀνδρεία)なり。物欲は理性に從うて其の所を守るは節制又は克己(σωφροσύνη)の德なり。言を換へて云へば節制は身躰を養ふことに於ける德、勇は理性の命令に徇して奮起勇往するの德なり。而してプラトーンは右の三者が各〻其の所を得て適宜に活働する全躰に公正(δικαιοσύνη)の德現はると說けり。德は報いのために行ふ者にあらず德それ自身が其の報酬なり。此の四大德の說が西洋に於いて後世に至るまで久しく倫理學上の定論と見做されたるは恰も五常又は四德の說の儒家に於けりしが如し。プラトーンは尙ほ說いて曰はく個人の德を修むるは唯だ孤立せる個人としては其の實行を期することゝ頗る難し、是れ國家の必要なる所以なりと。蓋しプラトーンの道德論は其の國家論と相離れたるものにあらざる也。

〔二八〕プラトーン以爲へらく國家は其の目的に於いて道德的なるものなり、其が眞正の目的は國家を組織する個人を敎育して有德なる生活を爲さしむるに在り。國家その物が有德なるに至りて初めて凡ての個人をして有德ならしむることを得べし。國家の道德的生活は恰も個人の道德的生活を大にせる如きものなり。故に智者の階級を以て國家組織の最上部となし、次きに智者の定めたる所に準據してそが實行に任ずる役人及び武人の階級あり最下に農工商等職業を營むものゝ階級あり。國家は此の三階級によりて組織せらる。立法の權を握り治平の策を講じて國家を統御するものは第一階級なる治者にして、其の指定に從ひうち法律の實行を計り、ほか外患を防ぐは第二階級なる文武官吏の職分なり、而して生產の事に從ひ其の業に安んじて社會に其の財を供する者は第三階級なる農工商なり。統治權を有する者は知見を具へ諸の事理に通曉せる者ならざるべからず、プラトーンの語を假れば彼等は哲學者ならざるべからず。哲人王位に在りて

其の國始めて治まるべし。プラトーンが理想的國家は最優者が他を支配するの國家なり。彼れは右云ふ各階級の特殊の德を其の倫理說に結びて曰はく治者に要する特殊の德は智なり(心性能中理性の德に當たる)、役人及び武人の德は勇にあり即ち國家のために其の職に徇するに在り(氣概の德に當たる)、農工商の德は節制、即ち各〻其の業を守りて界限を超えざるに在り(物欲の德に當たる)と。

〔二九〕 プラトーンは其の國家論に基きて大に敎育を重んじ、國家が國家のために敎育を施すべきことを說けり。然れども彼れの謂ふ敎育は上なる二階級に止まりて農工商の最下級に及ぶものに非ず。說いて曰はく上なる二階級に屬するものは幼少より國家の學校に入りて精神及び身躰の修養鍛錬に從事せざるべからず。躰育のためには躰操を勵み精神を養ふには、先づ德を立つるに益ある神話、詩歌、音樂、數學等を學ばしめ漸次哲學に入らしむべし。此の二階級は譬へば一大家族の如きものにして各人の私產を有するを許さず。結婚も各人の自由に任すべからず須からく國家をして配偶を選定せしむべし。子生まるれば夙くより父母の家を去らしめ國家の學校に入れて敎ふべし。かくて業を了へ哲理に通じたるものは實地の經驗を經たる後齡五十に及びて初めて治者の階級に入ることを得。而して治權を有する者は一定の年限を以て交替すべしと。プラトーンが理想的國家は大にスパルタの政躰に倣へる所あり。彼れは國家に有用なる才を得むがために國民の母たる婦女子の敎育をも重んじたりき。かくの如く個人が國家といふ團躰に合躰して其の全躰の道德的生活を實現するは是れプラートンの所謂國家主義にして是れ即ち其の有名なる對話篇『ポリタイア』に於いて描きたりし理想的國家なり。

當時希臘の社會は已に頽敗の否運に向かひて民心の結合古への如くならず個人的、自主的傾向おひ〳〵に見えそめたり。此の狀勢の中にありてプラトーンの國家論は個人が全躰の爲めに合躰し盡瘁する所の理想的國家を時人の眼前に揭んとしたるものなり。彼れは決して實行すべからずと見たる空想を描きたりしにはあらず。彼れみづからは徹頭徹尾眞面目にて此の理想的國家を說きしなり。蓋しプラトーンの所謂國家は希臘當年の國家にして決して今日云ふが如き尨大なるものにあらず、一市府即ち國家なりしことを忘るべからず。

〔三〇〕國家は尚ほ國民の依るべく用ふべき宗教及び美術をも定めざるべからず。但しプラトーンは大なる價値を美術に置かざりき。彼れに從へば美術は模倣に外ならず、現象界の個々物を模寫せるものなり。而して個々物はイデヤの模倣なるが故に美術は模倣の模倣なり。故に美術は事物の實相を去ること頗る遠きものなりと。例へば机の畫圖は唯其の机を一方面より見たる樣を寫せるのみ實の机を去ること遠し。美の本躰はイデア界に在り、是れ理想美にして吾人が現象界に見る所は唯其の覺束なき模寫に過ぎず。斯くプラトーンは純理哲學上謂ふ所の事物の實相に照らして美術の價値を定めんとしたると共に又道德論の立脚地より考へたるが故に吾人の精神を高むるに力ある音樂を以て美術中の最も有用なるものとせり。

宗教につきてはプラトーンの眼界に在りしものは希臘の國教なり。以爲へらく第三階級に屬する農工商の教育はおもに希臘在來の宗教を以てすべしと。然れども彼れは大に古來所傳の神話中德を亂すの傾向あるものを排斥し從ひて此くの如き神話を歌ふ詩人を國家より放逐すべしと說けり。

〔三一〕プラトーンが老後の著作なる『ノモイ』(法律)に於いて彼れが國家論は其のイデア論と共に大に改造せられ成るべく實際に近きものとせられたると共にまた頗る折衷的のものとなり、君主獨裁政治、貴族政治、共和政治等の諸要素を其の中に混じ入れたり。但し此の對話篇に說ける所は整然たる組織を成せるものにあらず。此の篇恐らくは未定稿のものなりしならん。

プラトーンの門弟

〔三二〕プラトーンが子弟を集めたるギムナジオンの名に因みて彼れが學派をアカデミーと名つく。而してアカデミーの初期(即ちプラトーンの死後凡そ百年間許りの間)を古アカデミーと名つく、此の間此の派の學者は師說以外に新に開拓せる所なく又其の師說を繼承せりと云ふも重もに彼れが晩年の思想即ちピタゴラス學派の影響を受けたるものを紹げるなり。彼等が多少獨立に研究の歩武を進めたるはプラトーンが學說中最も微弱なる物理說の方面に在り。彼れが哲學の精神とも云ふべきイデア論及び倫理說は古アカデミーの學者によりて更に開發せられたる所なく、寧ろ彼等の着眼點は主として自然界の說明にありしなり。

〔三三〕 プラトーンの死せしや其の遺言によりてアカデミーの首座を占めたりしは其の甥スポイシッポス(Σπεύσιππος)なり。スポイシッポスのアカデミーに長たるや同門なるクセノクラテース(Ξενοκράτης)及びアリストテレース相携へて雅典府を去れり。其の後クセノクラテースがスポイシッポスに次ぎてアカデミーの首領となるや(時に三百九十九年)同じくプラトーンの門下なるヘーラクライデース(Ἡρακλείδης)は雅典を去り其の故郷ポントスに歸りて自ら學校を設立せり。

〔三四〕 プラトーンの死後其の重なる弟子の去就を以ても窺ひ得る如く其の門下に多少の分裂を生じたりしが如し。アリストテレースは後遂に別に一大學派を開くに至れり。尚ほプラトーンの學統を引ける古アカデミーの學者は上に云へる如く自然哲學の講究を以て其の思索の主要の部分となせりしが、これに關し二つの相異なれる潮流の出現せるを見る。一はスポイシッポスの取れる所、一はクセノクラテースの守れる所なり。前者はおもへらく善美なるもの完全なるものを以て感官界即ち不完全なるものゝ生起する原因とは見るべからず、完全なるものは寧ろ不完全なるものゝ到達するによりて成就さるべき極致なり、即ち存在の順序より云へは不完全なるもの先にして完全なるもの後に來たると。一言に云へばスポイシッポスはプラトーンの謂へる理想界と感官界との關係を進化的の立場に在りて説明せむとしたるものと謂ふを得べし。而して之れに對して云へばクセノクラテースは發出説の立場を取れるものゝ如く、完全なる善より始めて漸次階段をなして不完全なるものに降りゆくことを説けり、故に「萬有の靈」より降りて個々の物體の界に至るまで其の間に幾多の靈を置き、隨うて其の所説は頗る宗教的彩色を帶び來たれり。スポイシッポスが「一」と「多」とを以て「數」の原素となしゝと共に又一切事物の根元と見做し且萬有の靈と(ピタゴラス學徒のいふ)中央火とを同一視したりと思はる、又クセノクラテースがヌウスと「一」とを同一視し「一」と不定なる二とよりして數出で而して其の數の取りも直さずイデアなるとを説けるは是れ兩者の共にプラトーンの晩年の思想に從ひピタゴラス學派の説を混和せんとしたりしを示せるものなり。

プラトーンの學派と後のピタゴラス學派とは漸々相接近して其の思想大に相混和するに至れり。這般一面プラトーン學派の風あり一面ピタゴラス學徒の風あ

る學者間に於いて數學と天文學とは著るき進歩をなしたり。親しくプラトーンに師事せしとあるオイドクソス(Εὔδοξος)又フィリポス(Φίλιππος)の如きも數學及び天文學に精しかりき。地球が其の軸により自轉するの説を唱へ出でたるはテオフラストスの傳ふる所に從へばシラクウザイの人ヒケタスなり。地球の自轉すると共に太陽を廻轉するといふ説を唱へたるはサモス人アリスタルコス、また此の説に證明を附したるはエリトレ人セロイコスなりといふ

〔三五〕 クセノクラテース以後に於いても古アカデミーの傳統は其の首座となれるもの相承けて其の學脈を傳へたり。凡そ希臘哲學史上に特更に一學派と名つけらるゝものはミレートスに起りしものを始めとして單に相同じき學説を懷けりしものに漠然名つけたるの名稱に止まらずして一首領を中心として相結合して其の説を相繼承せる團躰の形つくられたりしが如し。殊にピタゴラス學派は宗教的結合の趣をも具へたる特別の團躰なりしことさきに其の條下に云へりし所の如くなるが、又他學派中にも希臘哲學史上末期のものに至りては道德上の實際的修養を以て主要の目的となしたり。プラトーン學派の如き亦初より決して哲學的研究と實際的生活とを相分離せしめざりきと思はる。

プラトーンはアカデマイアの園にムゥザ(文藝美術の女神)の宮を設けて、之れを祭り又後には其が學徒其の開祖の像を建てゝ祭典を擧行せり。他の學派に於いても亦同じく祭典を設けて其の學祖を記念せり。

第十五章　アリストテレース (ἀριστοτέλης)

其の性行及び著作

〔一〕ソークラテースの弟子にプラトーンあり、プラトーンの門下にアリストテレースあり、此の思想界の三偉人が相踵ぎて現出せしは希臘學術史上に於ける一壯觀なり。プラトーンに於いて希臘哲學在來の主要なる思想がいかに陶冶融合せられたるかは前に述べたるが如し。又た上述せる所によりてプラトーンが得意の所は普く自然界の現象を觀察してそを精細に研究するとにあらで寧ろ他に在るとを看るを得べし。アリストテレースは此の點に於て大に其の師と其の面目を異にせり。彼れは自然界に關する夥多の事を採集し科學的研究に於いて一大歩を進め、後世更に研究せらるゝに至りたる種類の科學は概ね彼れの手により て其の地盤を置かれ、其が原初の形を與へられきと云ふも過言にあらじ。プラトーンとアリストテレースとは其の學相に於いて趣を異にし其の長ずる所亦た一ならざれど、兎に角希臘學術に於ける大綜合は後者に在りて更に一歩を進めたりといふを得べく、また彼れの哲學を以て希臘學術の頂上と云はんも失當ならざるべし。

今云へる如くプラトーンとアリストテレースとは事物を思索する趣に於いて相異なる所あり。プラトーンは理想の高地に居て經驗界なる個々の事物を看下すが如くアリストテレースは經驗界の個々物より出立し漸次に歩を進めて理想の高きに上らんとするがことき趣あり。其の學風に於いてかゝる差別はあれど其が根本思想に於いては二者共に一なる所あり、蓋し其の思想は共にソークラテースの教學より湧出せりしものなればなり。プラトーンもアリストスレースも共に目的説の立場にあり。故にデーモクリトス等が物理的研究の結果はアリストテレースの哲學に攝取されたりとはいふものから其の大躰の學相に於いては彼れはプラトーンと同じ思想の潮流に屬せり。希臘の思想界に件の三偉人が相踵ぎて現はれたるによりて其の學相は之れに對するデーモクリトスの機械的世界觀を壓倒し其の世界觀に對して正當に與ふべき價値を附與せざりし趣あり。即ち希臘哲學に於いては其の中心と見るべき大潮流は目的説にありて機械説は寧ろ其の傍流に過きざるが如き位置を取るに至れり。

〔二〕 アリストテレースは西紀前三百八十四年トラキアの一市府スタギーラ(希臘人の殖民地)に生る。父をニコマコスといひマケドニア王アミンタスの侍醫なりき。其の家世々醫を業とせしの故を以てアリストテレースは恐くは幼少より醫學及び他の自然科學の方面に其が注意を傾けたりしなるべく、且つ其の生地のデーモクリトス等の出でたる土地に遠からねばおのづから物理的知識を得るの便宜をも有せしならん。其が兩親の歿後はアタルノイス人プクセノス彼れを取りて敎育せり。十八歳にして亞典府に來りプラトーンの門に入り爾後二十年間其の師の歿するに至るまで其の門下に在りき。彼れは其の師の門下にありし時より已に嶄然頭角を現はし光彩ある文を以てものせる著作に名を得て殆んど一方の旗頭たるの位地を取り、修辭辯舌法を說きてはイソクラテースの壘を摩せり。プラトーンの死後クセノクラーテスと共に雅典府を去り同門の學友なりしアタルノイスの主權者ヘルミアスの許に行き、ヘルミアス、ペルシヤ人の詭計に陷りて亡びし後其の緣者ピュイティアスを娶り、ミュイティレーヂーに移れり。三百四十二年マケドニア王フィリップに召されて當時十三歳なりし太子アレクサンドルの師傅となれり。其の後三百卅四年(又は其の前年)アリストテレースは其の學友にして後に其の學派の有用の才となりしテオフラストスと共に雅典府に來たり自ら學校を府の東方の廓外なるリュイカイオン Λύκειον といふキムナジオンに開き、其の奬勵したる學術研究の範圍の廣きと及び其の秩序あることに於いて其の勢力はをさ〳〵アカデミーをも凌駕せん程に至れり。彼れは其の門下に集り來たれる同志の輩を導くや彼等をして共に俱に材料を聚め各、獨立の研究に從事せしめて彼れ其の全體を監督せりしが如し。彼れが組織せる學說の廣大なりしことも一はかゝる敎導の結果なりけんと考へらる。リュイカイオンには並樹を以て蔽ひたる路 περίπατον あり其處にアリストテレースは篤志の門弟をつどへて歩みながら學理を談じたりしより彼れの學派はペリパテーティクてふ名稱を受くるに至れり。(此の名稱の起原に就いては異說あり或は云ふアリストテレースが歩みながら弟子を敎へたるに起因せりと或は曰ふ作の並樹ある散歩に適したる路よりして其名を得たりと)。アリストテレースは自から財産を有せりしが上にマケドニアの朝廷の補助を得て大に學術研究の便益を與へられ多くの書籍を集め又殊に自然科學の方面に於て數多の材料を蒐集するの道を得たりし如し。其の後彼れの其の甥カルリステヂ

ースの事に關してアレクサンドルに對する交情の冷えたりしは疑ひを要せざる事實ならん。但し彼れのアレクサンドルに對すの關係に就きては古來幾多の傳說あれど、そはおほむね後のアリストテレース學派の論敵が揑造したるものに外ならじ。アレクサンドルの死後彼れは其のマケドニアの朝廷に親密なりしの故を以て政治上の憎怨より(表面上は敬神の道を欠けりとて)訴へられしかば雅典府を遁れてカルキスに至り三百三十二年少しくデモステネースの死するに先だちてこゝに歿せり。彼れが著述等によりて案ずるに其の性行の氣高かりしことは疑ふを要せず、其の博識と獨創の才とを兼備せる點に於いては實に古今其の儔に乏し。

〔三〕 アリストテーレスの著述は頗る浩瀚也。但し古へより傳はれる彼が著作の目錄の中には其が眞著ならぬも固より多からん。彼れが著作の中に類集とも稱すべきもの(即ち自然科學、歷史、古事、文學等各〻類に從ひてそれ〴〵に材料を集めたるもの)ありしと見ゆるが此等は必ずしも皆其の親しくものしたるにはあらで寧ろ多くは同志共同の結果と見るべきものならん、此の種の著述は今は殆んと皆傳はらず。此の類集を除けばアリストテレースの著作は二種に分かつことを得べし。第一種は一般讀者の爲めに公にせしものにて多くは對話の躰裁を用ゐまたプラトーンの敎義に結びたるもの多かりしが如し。此れ等多くは彼れが尙プラトーンが門下に在りし時の作と見て可ならん。彼れが文章の雄麗なることに於いてシセロが彼れをデーモクリトス及びプラトーン等に比したるも主として此等通俗を旨とせる著作に就きてのことなべし。此の種の著作今は完全に傳はれるものなし。第二種は特に學校に於て門弟を敎ふる爲めにものせるものにて今日迄保存せられたるはほおむね此の種に屬す。故に今吾人の有するものはアリストテレースが浩瀚なる著述の一部分に過ぎざれども彼れが哲學を窺ふに於て肝要なるものは概ね保存せられたりと考へらる。惟ふに此等はもと彼れが其の學生に對する講述の手控を基礎となしそを修飾して敎科用の書となさんとしたりしものならん、而して未だ其の全部の完成を告ぐるに及ばずして彼れの逝けりしが故に其の缺損せる個處をば門下生等が其の筆記によりて補ひし處もありと思はる。此の種の著述は論述の躰裁略ぼ一定し用語をも明確にせんと力めたり

と見えてよく科學的著書の面目を備へたり。先づ初に論究すべき問題を明かにし、次に其の問題の解釋として掲げられたる在來の說を批評し更に局部々々につきて精細なる研究に涉り廣く事實を見渡して終りに全躰をおほふ所の原理に達せんと力むる、是れアリアトテレースが著書の大躰の結構也。此等の著作はプラトーンの對話篇とは大に其の面目を異にして寧ろ近世に於ける學的術講述の躰裁を成し其の論ずる所の科目に從ひて明かに區劃せり。

〔四〕 アリストテレースが著書の今日に傳はれるものを擧ぐれば、カテゴリーの論(κατηγορίαι これは少くも其の一部分はアリストテレースの自ら作れる所にあらざるが如し)、解釋論(περὶ ἑρμηνείας これは命題を論したるものなるが或史家は其のアリストテレースの自作なるとを疑へり)、第一アナリュティカ(ἀναλυτικά πρότερα これは所謂三段論法の論なり)、第二アナリュティカ(ἀναλυτικά ὕστερα これは證明法の論)、トピカ(τοπικά これは蓋然的論證の法を說けるもの)、ソフィスト駁論法(περὶ σοφιστικῶν ἐλέγχων これはソフィスト風の駁論を檢査して其の似而非推論なることを明かにしたるもの)以上をアリストテーレースの論理上の著作とす、後世これ等を合してオルガノン(機關 ὄργανον)と稱す蓋し學術研究の方法を論ずるものなれば也。

アリストテレースは純理哲學(又は理躰論又は形而上學)即ち一切の實在物の原理を論ずるものを「第一哲學」(πρώτη φιλοσοφία)と名つけたり、今現子するメタフィジカは恐くはアリストテレースの死後其の遺稿の「第一哲學」に關するものを集めて成れるものならん、今現存するところ十四卷あれど其の或部分にはアリストテレースの筆に成れりと思はれざるものも混入せり、メタフィジカと云ふ語夙くより形而上學と云ふ意味に用ゐらるゝことなりしが、其の名稱の起原はロードス人アンドロニーコスがアリストテレースの著作を蒐集するに方たりアリストテレースが物理の學を授けたる後に「第一哲學」を講ずるを以て正當の順序となしたるに基き之れを物理の論に關する著作の後に置きて(τὰ μετὰ τὰ φυσικά)と名つけたるにあり(此の語物理に關するものゝ後に置かれたるものと謂ふほどの意味なり、此の編纂上の順序を味意せる語が後には事相上の義理を含めて物理以上の論即ち形而上學と云ふ意義を有するかの如く解せられたり)。

物理的科學に關する著作には先づ其の物理論(φυσικὴ ἀκρόασις 又は單に φυσικά と も又 τὰ περὶ φύσεως とも名つく)天躰論(π. οὐρανοῦ)生成及び潰壞を論じたるもの(π. γενέσεως καὶ φθορᾶς)及び氣象論(π. μετεώρων)あり生物に關しては動物彙類(π. τὰ ζῷα ἱστορία)及び此の種の著作に屬するものと見るべき動物の部分を論じたるもの、生殖論動物の行動を論じたるものあり心理に關しては περὶ ψυχῆς 三卷及び此の種に屬すべき小篇數種あり。アリストテレース自らプロブレーマタを作りたりしならんと思はるゝが今ある所は後に蒐集されたるものならん。

アリストテレースの倫理學書として傳はれたるもの三種あり、中に就きてニコマカイア倫理學(ἠθικὰ Νικομάχεια)を以て最もよくアリストテレースの自ら組織せる所を保存せるものと見るが現今學者の定論なりこれはアリストテレースの子ニコマコスの公にせるものならん、其の外一はオイデーマイア倫理學(ἠθικὰ Εὐδήμεια)と云ひオイデーモスの編纂せる所なるか又は彼れの筆寫せる所に據りて編纂せしもの他の一は大倫理學(ἠθικὰ μεγάλα)と名つけ前二者の拔萃によりて成れるものゝ如し右の外政治學の著書(πολιτικά)あり。百五十八市府の制度を叙述したりと言ひ傳へらるゝ著作(πολιτειῶν)は今は大抵失はれたれど雅典府の制度を叙述したるもの(πολιτεία Ἀθηναίων)此頃に至りて發見せられたり、此れは始めて千八百九十一年龍動に於いて出版せられたり。詩論(π. ποιητικῆς)の斷片及び修辭學も現存せり。

現存せるアリストテレースの著作は其の哲學上の意見の大成したる上に於いて著したるものと思はるれば其の著述の順序はプラトーン會話篇に於けるが如く其の哲學の解釋上肝要なるとにあらず。大躰の順序を云へば最初に論理上の著作次に物理上及び心理上のもの、次に倫理上のもの(或は倫理上の著作が自然科學上のものに先だてりしかも知るべからず)メタフィジカの著述が「物理論」に後れたるや明かなり。

〔五〕 アリストテレースは右の如き學科を分かちて研究したれども其の哲學全躰の組織が如何なる部分より成れるかに就きては彼れみづから一定せる說明を下さず。彼れ或は哲學上の問題を分かちて倫理に關するもの(ἠθικά)物理に關するもの(φυσικά)及び論理に關するもの(λογικά)とせる所あり。然れどもまた彼

れは諸般の研究を分かちて或は實踐上のもの（πρακτικῆ）或は製作上のもの（ποιητικῆ）或は純理上のもの（θεωρητικῆ）とせる所あり純理上のものとは凡そ事物の理を究むること其の物を目的とせるもの製作上のものとは技術及び美術上の製作を目的とせるもの、實踐上のものとは吾人の行爲の則るべき規範を掲ぐるを目的とせるものを謂ふ、（アリストテレースは純理上のもの、部に數學、物理學、及び其の謂ふ「第一哲學」即ち純理哲學を置き、實踐上のもの、部に、倫理學、經濟學、及び政治學を置けり、然れども彼れは經濟學を以て修辭學と共に政治學に附屬せる學科とし且廣義にては政治學の下に凡て國家及び倫理に關する研究を總括せり。）斯くの如く一切の學術を三種に分類するを以てアリストテレースみづからが其の哲學に與へたる分類と見做すが通常なるのみならず此の分類法は多くの後世の學者の採用する所となれりしものなるが、茲にアリストテレースの哲學を叙述するには之れを倫理學、純理哲學、物理哲學、及び倫理哲學に大別するを以て便利とす。

論理學

〔六〕 ソフィスト、ソクラテース及びプラトーンに於いて多少其の萠芽を現したるのみなる論理の研究はアリストテレースに到りて始めて一特殊の學科として組織せられ後世久しき間彼れが所作に論理學の模範を仰ぎたり此の彼れが偉大なる所作に於いて希臘學術の研究は其の明瞭なる自識に達したるものと謂ひつべし。蓋しアリストテレースの論理學は凡そ學術の研究に用ふべき方法を論ずるものにして一切哲學の攻究に入らんには先づ最初に究明すべきもの又學術研究の機關として用ふべきものなれば決して知識論と相離れたるものにあらず。後世所謂形式的論理學は其の淵源をアリストテレースの所說に發したるものなれども、彼れが論理學全躰の趣意とする所を以て單に形式的論理學に說く所の如きものと思ふへからす、彼れが眼中に置ける學術研究の目的と相離れざるものなるが故に亦おのつから彼れが哲學全躰の意見と相關はる所あり。論理學の所定に從うて種々の事物を研究するもの是れ諸種の學科にして而して特に其の所定を人々の交際（即ち殊に政治的行爲）に應用して他人を說得するの道を敎ふるものを修辭學とす。

〔七〕 論理學は學術研究の道を明かにせんとするものなるが、全躰學術研究の目的なる學理的知識（ἐπιστήμη）とは何を謂ふぞ。アリストテレース以爲へらく事物の通理即ち通性より考へて其の個性即ち個々なる事柄の然る所以を明かにする

是れ之れを學理的に説明するなりと。是れ彼れが哲學的思索全躰の根柢を爲せる所の思想にして此の點に於いては彼れはソークラテース及びプラトーンの繼承者たることを失はず。斯くの如く彼れに從へば學理的説明に於いては通性を先きとせざる可からざれど、吾人が知識開發の順序より云へば個性を以て治めざるべからず。蓋し吾人の知識を得來たるや先づ個々の事實を經驗するに始まり漸次に上りて通理に至る而して學理的説明は斯くして得たる通理を以て個々物の然る所以を説明するにあり。學理的に説明すといふは通性よりして個性を論證すると同一なり。

〔八〕 かるが故に學術に於ける思想の根本形式は論證(ἀπόδειξις)といふことにあり、而して論證すとは之れを言語に表出したる上に就いて云へば先づ認定されたる立言よりして新立言を論し出だすを謂ふ。シルロギスモス(συλλογισμός 通常三段論法と名つくるもの)是れなり。シルロギスモスに於いて先づ提出せられて論證の根據となる立言是れ前提(πρότασις)にして其の前提は皆命題即ち判定(又は一斷定とも云ふ)を言表したるものなり。一命題は二概念を結ぶによりて成り其の概念が其の命題の兩極(ὅροι)即ち主語及び客語となる。斯く二概念を結びて一判定(ἀπόφανσις)を形つくり始めてこゝに眞僞の別あり。而して判定は或は肯定(即ち主語に示すものは客にて示すものなりと肯じ定めて前者を後者に從屬するものと見る)或は否定語(即ち從屬せざるものと見る)是れ質に於ける別又主語にて示すものゝ何程の部分に就いて肯定又は否定するかによりて全稱特稱及不定の別を生ず(是れ命題の量に於ける別なり(解釋論)には此の別を全稱、特稱、單稱の三種とせり、又命題の種類を分かちて一事物の單に然ることを言表するものと其の必ず然ることを言表するものと其の或は然ることを得ることを言表するものとせり其の外通常の論理學に所謂命題の矛盾對當と反對々當との別及び命題の主語と客語との位置の轉換等皆已にアリストテレースの説ける所の中にあり。)

判定は個性と通性との間に於ける從屬の關係を表はすものなるが斯かる判定を結合して成るシルロギスモスは二前提を根據とし其の双方に通する一媒語(ὅρος μέσος)を以て他の二語を以て表はす概念の間に從屬の關係あるかなきかを認むるものなり。而して媒語の位置によりてシルロギスモスに三種の形(σχήματα)を生ず、其の第一の形を以て本形となす。(媒語が一前提の主語、他前提の客語の位置に在るを第一形、媒語が兩前提の客語たるを第二形、兩前提の主語たるを第三形とす。)

〔九〕 凡そ論證は前提を根據として或立言を演繹するものなれば論理上は其の

立言に先だちて其の前提の承認さるゝを要す而して究極の前提は吾人の直接に承認するもの(ἀξιώματα)ならざる可からず。其等究極前提即ち原理は論證すべからざるものなれども亦吾人がこれを發見し經驗上これを確かむるには個々の事例の詮索に待たざるべからず。而かも經驗は其等原理を示すものにしてそを說明する所以のものにあらず、即ち論理上は先きに來たるべきものなれども心理上吾人がそを想ひ浮かべ來たる順序より云へは個々の事件の經驗を先だてさるべからず。斯くして經驗上の事柄よりして原理を發見しこれを確かむるの道これ即ちアリストテレースの所謂歸納法(ἐπαγωγή)なり。歸納的穿鑿を爲すに當たり一切の事件を遺す所なく眼界の中に入れんは實際爲し能ふべき事ならねば其が穿鑿の法を簡易にせざるべからずと考へアリストテレースは一は吾人の直接に知覺する個々事相、一は世に一般に又は有識者間に承認されたる意見(ἔνδοξα)を採り來たりこれを精細に比較し推考するを要するを要するとせり(ソークラテースの實際爲したる所は即ち是れなり)。斯くの如く全然正確なりとは謂ふべからざるも正確ならんに近き種々の意見を出立點として推考するをアリストテレースはデ

ィアレクティケーと名つけたり。然れとも斯くして得たる所は遂に絶對に確實なりと云ふべからず。之れをして絶對に確實なるものたらしめんには竟に理性の直觀に待たざる可からず。蓋し究極の原理は理性(νοῦς)の認むる所、此の原理よりして必然に論證したるもの是れ學理的說明(ἐπιστήμη)の範圍、必然ならざるとに關するもの是れ臆說(δόξα)なり。說いて此處に至れはアリストテレース論理學は之れを其の知識論及び純理哲學上の思想と相結ぶにあらずば說明すべからざる也。

〔一〇〕歸納的研究の結果として吾人は一種類の事物に其が定義(ὁρισμός)を下し得るに至る蓋し定義は該事物の概念(λόγος)即ち其の事物をしかあらしむる所以の本性(οὐσία)を指摘するもの、換言すれば其の事物よりも一層廣くして其の事物の從屬するものゝ概念に加ふるに其の事物に特殊なるの相を加へて其の事物の概念を成り立たしむるを謂ふ。一層廣き概念は是れ類(γένος)なり之れに殊相(διαφορά)を加へたるもの是れ種(εἶδος)なり。但し一事物に發見せらるべきものに其が本性及び其の本性と必然に關係するもの(例へは三角形といふ概念即ち其の本性よりして其の角度の和か二直角に等し

と云ふこの必然に出で來たる如きの外に全く偶然なるもの(συμβεβηκοσ)あり、これは其の事物の概念より考出すべからざるもの、從うて學理的説明の範圍に入るべからざるものなり。(此等の點アリストテレースが論理思想の其が純理哲學と離しては解すべからざる所なり)。畢竟事物の定義を下すは通性を本として個性が如何にそれに關係するかを示すにあり、而して斯くすることに缺くべからざるは一範圍に於ける一物をも遺さず又種類上の一段階をも飛び越えずして順次に開發しゆく分類法なり。

〔一一〕斯くして定義を下すに至りて成り上がれる諸概念の最高頂上に在るもの(即ち一切他の概念の根據となるもの)をは開きて是れを判定の形に言ひ表せるもの是れ諸學科に於けるの原理なり。諸學科の各範圍に於いてそれ〳〵に其が研究の根據となるべき原理の何なるかはアリストテレースは明かに指定せる所あらず。唯だ彼れは論理上全躰の思想の原理となりて更に證明すべからざる又證明を要せざるものとして矛盾律を掲けたり。又彼れはこれを論理上思想の形式に關するものとする外に純理哲學上の原理として掲けたり。

アリストテレースは尚ほ吾人が事物を言ひ表す仕方を區別して之れを若干の最高概念の中に收めたり、是れ其の所謂十種のカテゴリー(κατηγορίαι)にして吾人が一切の立言は皆此のカテゴリー即ち範疇に表出されたる事物の方面中の或者を言ひ表せるなり。其の十種の範疇に曰はく、(一)實躰(οὐσία 人又は馬といふが如し)、(二)分量(ποσόν 長さ二尺又は三尺といふが如し)、(三)性質(ποιόν 白きといふが如し)、(四)關係(πρός τι 一倍又は半ば又は更に大なりと云ふが如し)、(五)何處(ποῦ 市場に又はリカイオンにと云ふが如し)、(六)何時(ποτέ 昨日又は去年といふが如し)、(七)態度(κεῖσθαι 臥する又は坐するといふが如し)、(八)附屬(ἔχειν 靴をはく又は鎧を着るといふが如し)、(九)能動(ποιεῖν 斷つ又は焚くといふが如し)、(十)所動(πάσχειν 斷たるゝ又は焚かるゝと云ふが如し)。カテゴリー論及びトピカの二書にのみ右十種の悉くを記載しありて凡て其の後の著作にはアリストテレースは態度及び附屬の二つを省けり。

此等範疇の論及び上に所謂學理的説明の最高原理とも見るべき素性及び相性の論に於いては既にアリストテレースが純理哲學の中心に入れるなり。

純理哲學

〔一二〕 アリストテレース亦たソークラテースの思想を繼ぎて事物の定相を看取するものは概念的知識なり遍通不易の通性を知るにあらざれは眞に事物を知れりといふべからずと考へたり。此の點に於いて彼れはプラトーンと異なる所なし。或はプラトーンとアリストテレースとの立脚地を相分かちて恰も正反對を形つくれるが如く思ふ者あれどこは甚しく誤れり。兩者が如何なる共同の見地を有するかは決して看るに難からず。然れどもプラトーンが個々物を離れたるイデアを眞實躰とし、之れに對して個々物の世界を非有と見たる點に於てはアリストテレースは全然其の師と意見を異にせり。是に於いて彼れはプラトーンのイデア論を批評して自家の特殊なる位置を占めたり。彼れがイデア論を難するの趣意に曰はく、若し事物の種類ある毎に別に自存するイデアあらば(即ち通性は個々物を離れて存在するものならば)人間の製作物にも又事物の性質にも又其の關係にも之れなかるべからず。又同一物を見る方面の異なるに從ひて之れを種々なる種類に屬するものと見得べければ同一物を種々のイデアに屬するものと見ざるべからず。又事物の相類する所必ずイデアありとせば現象界の個々物と其のイデアとは相類するが其の兩者の上に更に第三者なるイデアなかるべからず又それと個々物及び其のイデアとの上にイデアなかるべからず斯くして際限あるべからず。且又イデアはそれ自身に其の性躰を保持するに止まりてそれが何故に感官界に於ける生滅變化の現象の起因となるかは解すべからず。またプラトーンは個々物がイデアに與かる(即ちイデアを分有する)所あるより其の存在を保つと說けど其の分有すといふ意義明かならずまた何故にイデアに與かり得るか何故に之れを分有し得るかは解すべからず。イデアは畢竟感官界の個々物の上に更にそれに類するものを添えてそを二重にしたるもの(αἰσθητὰ αἴδια)に外ならず譬へは感官界に於いて觀たるものを天上に引きあけてこれを遍通不變のものと見做したるが如きものに外ならず。事物の本性と其れを本性とする其の事物とを相離すべき理由なし。之れを要するにプラトーンはイデアを個物界より全く離れたるものとなしたるがゆゑにそを個物界に關係せしむると能はざるなりと。是れアリストテレースがプラトーアのイデア論を批評せる大趣意なり。是に於いて彼れはイデアを以て個々物を離れたる超絕躰と見ず個々物に內

在するものと見たり。吾人が知識を成り立たしめんには通性の實在を說くを要すれども其が個物を離れたるの實在を說くを要せず。個物界を離れて諸物の實躰を求むべからざる也。

〔一三〕實躰(οὐσία)といふ觀念はアリストテレースが純理哲學の骨髓を成せるものなり。彼れが見に從へは前述の如く此の實躰は個々物以外に存在するものに非ず一種類のものゝ抽象的概念を實躰視するは非なり。然れども彼れは吾人の感官に現はるゝ個々事物の象其の儘を實躰と視たるにはあらず。彼れが所謂實躰は抽象的のものにもあらず、また唯感官上に存在するものにもあらず個々物に於いて其の個性と相離れざる通性を發見する是れ即ち實躰を發見するなり。彼れが哲學の中心的問題は個物と通性とを相離さずして實在の何たるを解し概念的知識を以て吾人の感官上知覺する諸物を了解せんことにあり。彼れが論理學上の觀念は凡そ此の問題を目途として形つくられたり。又彼れは個物と通性との關係を上述の如くに解したるが故に其の謂ふ實躰はおのつから二義を帶ぶることゝなれり、或は個々物を指して謂ひ或は個々物と離れずして其の本性を形つくるものを指して謂ふ。

〔一四〕アリストテレースは其の所謂實躰を以て事物の個性と相離れざるものとなせるのみならず、また之れを以て變化と離れざるものとしたり。換言すれば實躰は一時に實現するものにあらずして漸次に實現さるゝものなり、是れ變化といひ生滅といふとの在る所以なり。此の事物の生ずるといふこと(λέκνησις)を說かんが爲めアリストテレースは相(εἶδος 又は μορφή)と素(ὕλη)との關係ををけり。以爲へらく相と素とは相離れたる二つの物にあらず、唯素は相とならんとするものにしてその成り上がれるは即ち相なりと。アリストテレースが此の思想は有機躰の生長又は人爲の製作物に準らへて得たるものなるが如し。一器物例へは陶器等には其の形及び大さ等定まりたる相あり。然れとも件の相はかゝる相を取る所の粘土と相離れて存在するものにあらず。粘土を以て未だ器物の相を現さねど將にそを現せむとするものと見れば是れ素なり。而して其の相の實現せらるゝは外より或物を附け加ふるにあらずして素其の物に於いて已に相を開發すべきの性を有するものなり、また其の物がみづから相を現し行くが故に素と云は

るゝなり之れを要するに相は内より開發し行くもの也。されば アリストテレースが所謂相と素との意義は人爲に成れる器物よりも寧ろ自然に生長する有機物になぞらへたる方解し易かるべし。一生物の種子は自ら其の中に或相を取りて成長すべき性を具ふ例へは桃の相は自ら桃となりて發生し行くことに在り。即ち相其のものは素よりして漸次に現はれ來たるなり。變化生長は此處に存す。世に轉化と云ふことあるは畢竟未だ實にせられざる事物の性が實にせらるゝとにあり、未發の狀態に在るの性が既成の性となるに在り。斯くの如くにして發達しゆくもの是れ實在なり、此の發達を離れて實在といふべきものなし。即ちアリストテレースはプラトーンが二界として相別かちたるエレア學派の所說とヘーラクライトスの所說とを攝合して一實在世界に纏めたるなり

〔一五〕以上の見解よりしてアリストテレースは素を潛勢(δύναμις)相を現發(ἐνέργεια)と見たり。即ち素と相とは同一物の將さに成らんとする或は成り能ふと其の成り了るとの關係に外ならず、語を換ふれ一物勢が潛勢の狀態より現勢の狀態に移り行く彼れと此れとの段階を云ふに外ならず。例へば桃の種子は素にして桃の萠芽は相なり、されど桃の萠芽は桃樹の成り上がれるに對すれば素にして成り上かれる桃樹が相なり。斯く一物が其の潛勢の狀態より自ら現勢の狀態に開發し行く所是れ即ち變動(κίνησις)の存する所なり。斯くアリストテレースはプラトーンの唱へたるイデアと非有との二元論を變じて相離れざる(寧ろ一物の發動し行く段階に名づくるに外ならざる)素と相との一元論に改造せり。即ちプラトーンの謂へるイデアはアリストテレースに於いては相となり(相即ちアイドスと云ふ語は是れプラトーンの用ゐたる所のものなり)前者の云へる非有は後者に在りては素となり前者に於いて其の相離れたると異なりて離れざるものとなれり。

〔一六〕アリストテレースは更に詳らに事物の變動し行く所以を分析して之れを四つの事柄に開きたり。是れ即ち有名なる四因の論なり。四因の一に曰はく素材因二に曰はく形相因、三にいはく動力因、四に曰はく目的因是れなり。之れを家屋に譬ふれは材木は素材因なり、家屋の圖案は形相因なり、材木等を取扱ふ工匠等の働きは働力因なり、成り上かれる家は即ち目的因なり。即ちかくの如き家屋の成り上がるは斯くの如き家を造ることを目的をして材木を採集し之れに働力

を用ゐて一定の形を與ふることによる。四因相依りかくの如くにして家を成せど、形相因、働力因、目的因の三つは究竟すれば相の一となるべし。蓋し家屋の形と造り上げらるべき家屋といふ目的とは異なるものに非ず、造り上ぐる働力も亦た要するに造り上げんとする家屋の想念即ち目的によりて起こるものにして是れまた別異なるものに非ず。故に件の四因を約すれば究まる所、相因と素因との二つに歸すべし。假りに便利上四個に分かち得るは專ら人爲の製作物に於いてのみとなり、天然の有機物に於いては其の如く別かち易からず、但だ相素の二因を語るべし。

〔一七〕 アリストテレースの哲學の根本思想は目的說なり。以爲へらく相は目的にして其の目的の實現し來たる所凡ての思想の變動する所以なりと。蓋し此のアリストテレースの目的說は一方に於いてはヘーラクライトスとエレア學派との思想を取り入れまた一方に於いてはソークラテースとプローターゴラスとの思想を取り入れたり。而して其の攝取の方法は頗るプラトーンと異なるものあり。プラトンはエレテ派の謂ふ不變動の實躰界とヘーラクライトスの謂ふ流轉變化の界とを二つに分かちて一つを實有界他を非有界と視たり。アリストテレースは實躰と變動とを相離さずして事物の實象が漸次に實現せられ來たる所に變動ありと見たり。換言すれば實躰其の物が開發するなり、自ら開發することを離れて實躰は存せずと見たり。即ち彼れの哲學は進化哲學なり。またプラトーンはソークラテースの謂ふ智識の界とプローターゴラスの謂ふ感官の界とを二つに截斷したりしが、アリストテレースは之れを截らずして吾人の五官に接する個々物を離れて眞知の對境となる事物の實象なしと見たり、換言すれば五官の感覺そのものは智識にあらざればまた五官に現はるゝ個々事物の象その儘が實躰にあらず、唯五官に現はるゝ個性と相離れすして存在する通性を見ることれ眞智識にして、また個性と相結ばれたる通性即ち事物の實躰なりと考へたり。

〔一八〕 かくの如くアリストテレースの哲學はよく二元論の過失を脱して希臘哲學在來の思想をば巧みに陶治融合したるが如く見ゆ。即ち一元論にてありながら其の中に變動差別の存在する所以を說けり。然れども更に一歩を進めて考ふれば未だ融合の至らずして尙ほ二元論に陷る所あるを免れず。アリストテレ

ースが相と素との關係を說くや二種の說き樣の相錯雜せるものあり。一の說き樣に從へば全く一元的にして事物が潛勢の狀態より現勢の狀態に移り行く段階の見樣によりて相と素との別をなすに過ぎざる如くに說けど、他の言ひ方に從へは相と素とを自ら相對するものゝ如く見て彼れと此れとは相離れたるものにありねど尙ほ素を形つくる因は素の中に存在して素を動かし形つくるものゝやうに說ける所あり。以爲へらく、相は內在的のものなれども素を異にして原働的のもの、素は之れと反して受働的のものなり、前者は形づくるものにして後者は形づくらるゝものなりと。此の關係は器物の譬喩に於いて最もよく現はれ來るを見る。形つくらるゝ粘土の外に、形づくる工人の趣向あり此の二者ありて初めて器物は造り上げらる。之れを有機躰の自然物に譬ふれば相と素とが一つに合するが如く見ゆれど、尙ほ其の相對するものなることは蔽ふべからず。桃の種子は素なりと云へど、どそを形つくるもの其の中に存せざれば素の開發して桃樹の形を取る所以は解ずべからず。知るべし譬喩を有機躰に取る時に於いても形づくるものと形つくらるゝものとの對待を說かざるべからざるを。かくアリストテレースの相素論は一見一元的にてありながら更に細見すればその二元的なる所は蔽ふべからず、寧ろ二元的方面が一元的方面に勝てりといふも不可なからん。

〔一九〕 かく彼れは相素の關係を二元的に考ふる所よりして素が相の實現に對して障礙を呈するが如く說けり。以爲へらく自然物が其の形を成すや皆悉く完全なる形を成さず又其の形の破壞せらるゝに至ることあるは是れ素が全く相に化せられずして相の實現を妨ぐればなり。また素は唯成り能ふべき性にして尙ほ不定なるものなるが故に相に相應したる形を現ずるとの外に定まりなき形をも現ずるとあり。世に偶然の出來事あり自然物に怪異なるものゝ生ずるはこのゆゑなりと。かくしてアリストテレースは素に歸するに凡べて不完全なることと及び偶然なることとの原因を以てせり。而して斯かる故を以て生する概念上定むべからざるもの（συμβεβηκός）即ち全く偶然なるもの（αὐτόματον）に關しては吾人は學理的知識を有すると能はず即ち事物の生起する所以を學理上研究すと云ふも其の單に個々なるの邊は學理を定むべき限りのものにあらず。

かく相の外に素を說いて前者に對して多少の障礙を呈するものとせる所よりし

てアリストテレースは又自然界に於いて善美なる目的に適ひ居る事柄の外に唯機械的に生ずる事柄あるを許せり。蓋し善美なる目的を實現せんが爲めならずして唯機械的に生起する事柄の存する究竟原因を以て素に在りと見たるなり。彼れはこゝにデーモクリトスの世界觀を取り入れたり。デーモクリトスが事物生起の因由を説くや唯其の事物に先在せる狀態のみよりせんとしたり即ち事物の起るは其れに先だちて存在せし狀態の結果たるに外ならずと見たり。プラトーンは之に反して事物の生起を説くに其の當さに成るべき極致の狀態を以てし、かゝる狀態にならんが爲に事物は存在すと説けり。アリストテレースは此の二説を攝取したれども其の世界觀の重きはもとより目的説の方面に在りしなり。

〔二〇〕 アリストテレースは上述せるごとく二元的に説き來たりて事物の段階を論じて曰はく、素の方面の多きほど卑く相のかたに進むに從うて高し天地萬物は皆此の關係を以て高下を爲すと。是に於いて彼れは遂に最下の處に原始の素(πρώτη ὕλη)を置きて之れを純粹の素にして未だ聊かも相を現せざるものと見唯だ受動の方面のみを具へて聊かも原動の方面を有せざるものとしたり。原動力即ち形つくるものは相の方面にあり。然れども個々の事物は素の方面をも具ふるを以て全く原動力のみ方面のみならず受動の方面をも有す、故に其の物以外にそを動すもの即ち原動力となるものなかるべからず。かくして漸次に事物發動の原因を探り求むれば遂に他より動かされず即ち受動の方面なくして唯だ他を動かすものなかるべからず。若し聊かなりとも他に動かさるゝ所あらば更に其上に立ちて之れを動かす原動力なかるべからず。故に事物が變動を現する所以を説明せんとせば一方に於いて純粹なる原始の素を説くを要すると共に他方に於て純粹の相即ち原始の相(πρώτος εἶδος)を説かざるべからず。是れ即ちアリストテレースの所謂原動者(πρῶτον κινοῦν)にして自から動くとなくして他を動かすもの、相の方面のみありて些も素の方面なきもの純粹の現勢にして毫も潛勢の方面なきもの、即ち圓滿に凡べてが實現され居るものなり。而して是れ即ち世界の凡べての事物の生起する所以の第一原因なり。原始の素は固より實在の相あるものにあらず寧ろ一切の實在の可能性即ち凡ての物の現成し得るの性を謂ふに外ならずとはいふものから、斯く一方の極端に相なき純粹の素を説き、他方に

素なき純粋の相を説きて世界の万物が其の間に段階を成すと見るに至りてはアリストテレースの論はプラトーンがイデアと非有とを設けたる如く遂に明かに二元論となり了したりと云ひて不可なかるべし。

〔二一〕 アリストテレースは其の謂ふ原動者即ち純粋の相、純粋の現勢凡ての圓滿に成れるものを神と名つく。彼れはこれにプラトーンが其の謂ふイデアに與へたる所の性質を附せり、プラトーンの謂ふ善のイデアがアリストテレースに於ては其の謂ふ神となれりと云ふべし。蓋し其の謂ふ神は不變永久にして純一なる者なり物の個々に分かるゝは素を含みて未だ圓滿にならざる所あればなり。個々分離の基因は素なり物躰なり)。又形躰あるものは相分かたれて異なる部分を有すれば神は形躰以上のものならざる可からず、神にば聊も素の方面なければなり。即ち神は純一にして圓滿なるもの、形躰以上のもの、換言すれば純粋の智純粋の精神にして、其の知る所は自己以外にあらず、己れ自らを知るの智識(νόησις νόησεως)なり即ち純粋の自觀なり、純なる自觀者にして他に求むる所なく常に圓滿自足なるもの、自から動き他を生ずるに非ず唯萬物の圓滿なる極致として其の生起の原因となるなり。換言すれば自ら動き求むる所ありて万物を生ずるに非ず唯其の存在そのものが万象の原因となり、万象は皆之れに向ひて進み來るなり、譬へば愛せらるゝ者が愛する者を自然に引くが如し。万物は素の狀態より圓滿の極致なる神に向ひて進まんとするなり。此の故にアリストテレースは其の謂ふ神學(θεολογική)を其の純理哲學の頂上となせり。

此のアリストテレースの説に至りて感官以上なる非形體なるプラトーンの謂へるイデアが更に一轉して明かに精神的なる即ち明かに靈智なるものとなれり。已に先きにアナクサゴラスのヌース論にほの見えたる思想はアリストテレースに至り益發揮せられて全く明瞭に靈智者の存在をば萬物の原因また極致として説くことゝなれり。またアリストテレースが此の思想に於ける哲學的一神論の最も明かに形つくられたるものにして已にクセノファネスに於いて現はれたる神學的思想の發達がこゝに至りて極まれるなり。彼れが哲學的一神論は後世の歐羅巴の思想に甚大なる影響を與へたるものまた此の純智を以て神明とせる彼れの哲學に於いて希臘の學術は其が最高理想を謳歌したるものといふべし

（アリストテレースの謂ふ神は純理的思想（θεωρία）にして後世の有神論者の謂ふが如き人格ある有情の神にはあらず）。蓋し彼れが斯く自ら足りて毫も他に求むる所なき純智の自觀を說きてこれを神の樂みとなせるは希臘人の一大理想を語り出せるなり。

〔二二〕 アリストテレースが神は自ら動くことなく唯他の一切の物の極致として他の一切の物のそれに向かひて進み來たるなりと云へるは是れ神を以て萬物以外に在りて超絕的存在を有するものと見たるにて此の點に於いて明かにプラトーンのイデア論を保存せり。即ち超絕的存在を有するものとしてのイデアを排斥して內在的のものとなせるアリストテレースは萬物の圓滿なる極致を說くに至りて遂に超絕的存在を許すことなれり。また彼れは事物の實相そのものが漸次に實現さるといふ進化哲學を說きたれども萬物の第一原因なる神を說くに至りては遂に不變化に自存するものを說くことゝなれり。蓋し彼れは唯動き行く物をのみ說くに止まることを能はずして更に其の動き行くものゝ存在する所以の根原を探り遂にこゝに圓滿なる神を說き出だせるなり。

物理哲學

〔二三〕 前に述ぶるが如く萬物は圓滿なる神を極致とし之れに向かひて進み行く、神は即ち原始の相にして萬物は皆其の相を現せんとするものなり。然れども アリストテレースは時間上天地萬物の生起せる始めありといふにはあらず。相と素とが無始無終なるが如く天地萬物はた無始無終なり。又運動も無始無終なり、そは運動の生滅は唯運動によりてのみ考へらるべければなり。世界はその廣がりに於いては一つの圓かなる形を成す。アリストテレースの與へたる定義に從へば場處（τόπος）は圍繞する物躰と圍繞せらるゝ物躰との界限をいふ、又時間は前後することに於ける運動の數なりと。此の故にアリストテレースは虛空なる場處なしとし又世界以外に場處あるとも否めり。故に又世界以外には時間もなし。凡て運動は物躰が互に其の處を交換するによりて起こる。アリストテレースはデーモクリトス等と說を異にして世界は唯一なりと說けり。

〔二四〕 アリストテレースは天地の成り立ちを說くや常住なる又靈智なるを以て高きもの全きものとせり。圓かなる運動は最も能く常住の相を示す。而して

天は圓かなる運動の在る所、地は直線の運動のある所、彼れはアイテールを以て成り、此れは四元素を以て成る、天界は完全常住の境にして地は不完全無常の境なりと。かく彼れが天地の兩界を二分せる説に於いてピタゴラス學派幷びにプラトーン等に於ける兩界論の面影を認むるを得べし。彼また以爲へらく星は智ある高等なる靈の司どる所のものにして其の靈智の影響は地上に及ぶ。地は球形を成して靜かに世界の中央に在り幾多の球層は其の周圍を廻轉す、此等の球層にはそれ〴〵に月、日其の他五個の遊星附着す、また世界の外圍には恒星の附着せる一つの球層回轉すと。彼れは又た遊星の複雜なる運動を説かんが爲めに其の附着する球層に相連りて幾多の球層のあることを説けり。之れを要するにアリストテレースの天文説は地球を中心とせる幾多の球の回轉を説ける球層説なり。

〔二五〕 地上の萬物は地水火風の四元素を以て成る、而して四元素には相反する二つの運動の傾向あり。地は地心に向かふ運動を有する求心的元素なり、火は地心を離れんとする遠心的運動を有する元素なり。而して水と風とは地と火との中間に在り、但し水は求心的運動多く風は遠心的運動多し。此の故に大地中心となりて位し之れを圍繞して水あり更に之れを圍繞して空氣あり空氣の上に火あり。而して此等の四元素は皆に塲處に於ける運動の傾向を異にするのみならず本來性質上の差別を有する者なり。アリストテレースは性質上の別を以て分量上の差別に歸せしむべからざるものとせる點に於いて原子論者及びプラトーンと其の説を異にせり。四元素の性質の差別は一ッには寒暖一つには乾濕の對待の相混和する割合によりて生し來たる。火は暖にして乾なるもの風は暖にして濕なるもの水は寒にして濕なるもの地は乾にして寒なるものなり。彼れが此の説に於いては初代の物理學者が反對の性質を説ける思想を採用せり。變動(μετα βολή)と云ふとは彼れに從へば委しくは生滅すると云ふとと動くと云ふとを包含す。動くと云ふと(κίνησις)に亦三種あり、增減と移處と性質上の變化(αλλοιωσις)となり。

アリストテレースはまた等質のものと不等質のものとを分かち單純なる物質の相混和することによりて新しき性質の生じ來ることを説かんとせり。彼れが現今の所謂化學的研究に向かひて指を染めたるを見るべし。

〔二六〕 かくしてアリストテレースは變動に分量及び場處の變動と性質の變動とあると、即ち機械的運動(力學上の者)と性質的變動(化學上のもの)とあることを說ける外にまた最も複雜なる變動即ち生物の生長の論を爲せり。(化學上の變動は機械的變動を地盤とし生物の生長は化學上の變動の地盤とす。)彼れに從へば自然界は目的に從ひて活動する一團躰なり、而して其の目的なる活動は無機物に於いて已に其の端緒を現はせども最もよくその發現せらるゝは生物の界なり。生物は其の有する靈魂即ち生氣の種類によりて其の段階を異にす。謂ふ所ろ生物の靈魂は凡べて定形躰を動かし形躰を形つくる原動力となる者を指す。故に彼れは靈魂を名つけて身躰のエンテレカイア (ἐντελέχεια) 即ち形躰(素)を動かし形つくる所の相なりと云へり。最下等なる生物は靈物にして其の靈魂即ち生氣は唯營養と繁殖との作用を有す。次に動物の靈魂は感覺と共に欲情の作用を有し又其の或者は自ら其の躰を移し動かすことを爲す。而して人類に至りては以上の諸能の外に尙ほ理性(事理を考ふるの用をなすもの)を具ふ。下等の段階に於ける生氣は上等のものなくして存在すれども、上なるは下なるものと相離れては存在せず其の存するや下なるものを其の地盤となす。蓋しアリストテレースの謂ふ靈魂は形躰ならねども形躰と離れずしてそを形つくるものとして存するなり、其の活動を現ずべき形躰を離れて自立獨存するものに非ず、而して生物の躰內に於いて件の靈魂と特に相結ばれる物質あり、之れをプノイマ (πνεῦμα) と名つく、而して此のプノイマは動物に於いては特に血液中に存す。故にアリストテレースは靈魂の主なる機關は心臟なりといへり。

アリストテレースの解剖學上の觀察は不等質のもの (ἀνομοιομερῆ) 即ち其の部分の相等しからぬ者例へば手の如き一機關を成せるものと等質のもの (ὁμοιομερῆ) 即ち其の部分が相等しき質を成せるもの例へば肉又は骨の如きものとの區別を以て基礎とせり。彼れは又は物を二大種類に分かち有血動物と無血動物となせり。今日の智識に照らせば彼れの生物學に幼稚なる所あるを見るは固より容易なれど、兎に角生物論を其が哲學組織中の一部分として詳說したるはアリストテレースの偉大なる所なり。

〔二七〕 アリストテレースはまた心理の研究に於いて頗ぶる精しく、後の心理學

のために其の一好模範を掲げたり。以爲へらく吾人の精神は吾人が身躰の相なり、故に精神は身躰と離れずして之れを活動せしめ之れを形成する所以のものなり即ち其のエンテレカイア(ἐντελέχεια)なり。この方面より見れば吾人の精神は下等動物の精神と全く懸け離れたるものにあらず寧ろ共通の趣を具ふ、但し下等動物のに比すればもとより高等なり。先づ其が根本的作用は感覺なり、而して感覺は特殊の感官が特殊の刺激に應じて特殊の對境を知覺するによりて生するものなり。委しくは知覺は知覺さるゝ對境の相が知覺するものに與へらるゝことによりて成就せらる、換言すれば知覺に先たちては外物に潛勢的に存在する性質が知覺によりて理勢のものと成さるゝなり。今謂ふ特殊の感官はそれに應ずる事物それ〴〵の性質を(例へば目は色、耳は聲を)感覺するに止まる。而して凡べて此等の感覺を統合して全き知覺を成しまた諸感官に通する事物の關係即ち其數及び運物の狀態等時空上の關係を看取するには躰中別に具はれる中央機關による。アリストテレースは此の中央機關の位置を心臟におけり。是れ即ち彼れの謂ふ共通知覺官(αἰσθητήριον κοινόν)にして此の中央機關に於いてまた吾人の心作用を自覺する働きあり、即ち外物を知覺するのみならず、其の知覺する働きを知覺する作用あるなり。また嘗て外物の刺激によりて起されたる知覺が外來刺激の去りし後にも尙其の痕迹を留むるにより想念(φαντασία)として存するも亦此の中央機關あるによれり。吾人は此等の想念によりて過去の經驗を記憶するを得委しく云へは意を用ゐずして曾て經驗したるとを想ひ出だす(μνήμη)は感官よりせる印象の遺存すればなり、又故意に記憶を喚ひ起こす(ἀναμνησις)は想念の連結せるものありて其の連絡の順序に從ひて意志の作用に喚起さるればなり。吾人は此等の想念によりて經驗を積み漸次に事物の概念を形つくることゝなる。以上は心の知性の作用を說けるものなり。

此の知性の働きと共に欲求(ὄρεξις)の作用あり欲求の作用は快感不快感に結ばり居るものなり。而して快感不快感は或觀念が我が目的とする所を遂ぐるに相應なるか或は不相應なるかによりて其觀念に結ばり來るものなり。再言すれば一觀念を吾人が目的の組織の中に入れたる結果として或は之れを肯定し或は否定するより目的に適ふものを欲し合はざるを避くるの心を生ずるなり。理性の加

はり來たるによりて想念か知識(ἐντελέχεια)となることく欲求は意志(ἐπιστήμη)となる。

〔二八〕 以上は吾人の身躰と相離れざる精神の作用を說けるものにして其の一部は現今の所謂生理的心理學の一模範とも見るを得へきものなり。彼れが心理論は全躰に於いて一の實驗心理學の形を成せども其の一たび理性の論をなすや其の說は以上述べたる實驗心理學上の研究の外にそが知識論又倫理說をも入れ來たるによりて大に其の趣を異にするととなる。彼れに從へば理性は恰も殊別なる世界に屬するものゝ如く、本來身躰に結ばり居るものならずして、更に一段高等なるもの外より賦與せられしもの、而してそは身躰と共に死せざる不滅のもの神の永恒なるに親しき所あるものなり。然れども此理性は吾人に於いては決して圓滿完全なるもの即ち全く實現せるものにあらずして漸次に其作用を現ぜんとしつゝある所のものなり、而してそは其作用を現ずる所の地盤を下等なる心作用に有すといふよりアリストテレースは理性を二分して受動理性(νοῦς παθητικός)及び原動理性(νοῦς ποιητικός)となせり。受働の理性と名つくるものは前きに說きし知覺、想像概念(論理學の條に謂へる歸納的心作用)の外に非ず但だそれが原動理性の直觀を喚起するの緣となる所を名づくるに外ならざるが如し。此原動理生の直觀は最高の知識なり、能く事物に於ける遍通不易の理想を觀取して疑を容れざる所のもの也。アリストレースはかくの如き知識の因となるものを原動理性と名つけ、緣となるものを受動理性と名つけたるか知し。彼れが受動理性を素とし潛勢とし又拭へる板に譬へたる如きも之を以て原動理生の働きの實現さるゝ場處と見たるならん。永遠に存在する所のものは唯原動理性あるのみ。思ふに此のアリストテレースが理性論はプラトーンの理性論に由來する所あるは明かなり、而して其の知識論上の必要に出でたるとも明かなり。以爲へらく唯感官的知覺に基るせる經驗のみを以て進み行く歸納的研究は其の得る所遂に或然的知識に止まらざるを得ず、遍通必然の知識を得んには別に理性の直觀を要すと。

所謂原動理性は不死不滅なりと云ふるを見れば、アリストテレースは靈魂不滅論を唱へたるもなりと云はんも不可なきが如し。然れども彼れが所謂不滅の靈魂

此の原動理性と云ふ名稱はアリストテレース自ら用たる所にあらず後に其の學派の學者間に始まれり

は個人の身躰に結ばれたる精神にあらずして寧ろ神性と同一なる遍通のものゝ如くに說ける所あるより、彼れが果して死後に於ける個人の存在を認めたるか否かは後世彼れの學を承ずる學者間に大に爭はるゝ問題となれり。彼れは恰も身躰の相として靈魂(τοῦ)を說き、靈魂の相として理性(τοῦ νοῦ)を說けるか如く思はる。然れども彼れが所謂靈魂は身躰を離れて存せざるもの其の所謂理性は身躰並び に靈魂を離れて自存するものなれば、理性が靈魂に對する關係は靈魂が身躰に對する關係とは全く同一なりといふことを得ざる也。畢竟其の謂ふ原理理性が個人的存在に對し及び神に對して如何なる關係を有するかは彼れの說きのこせる所を以ては明かに知ることを得ざるなり。

〔二九〕 理性(νοῦς)の作用に二樣あり、一は純知的のもの(νοῦς θεωρητικός)即ち ἐπιστήμονι として眞理の研究そのものを以て其の目的とし他は行爲的のもの(νοῦς πρακτικός 又は λόγος πρακτικός 又は διανοσαπρακτικοῦ 即ち τὸ λογιστικόν)として其が目的吾人の公私の生活に於いて如何に行動するが宜しきかを明かにするにあり、前者の知識は純理觀(θεωρία)にして後者の働きは技能(τέχνη)を來たす。廣義に解すれは技能は公私の生活に於いて正當の行爲を認定する知慮として働くもの即ち道德に屬するものゝ外に製作(ποιεῖν)に關するものをも含む、美術は製作に屬するものなり。故に廣義もて總括して云へは理性の作用は一方には理智の直觀及び論理的推知を來たし又一方には正當なる行爲及び製作を來たす。

倫理哲學

〔三〇〕 アリストテレース以爲へらく、人間の行爲は其の大なると小なるとを問はず何等かの目的なきはなし。吾人が行爲の支離滅裂ならざるは或最高目的の之れを支配し其の連絡を附するものあればなり。然らば吾人の行を支配すべき究極の目的は何ぞや。曰はくオイダイモニア(εὐδαιμονία)即ち善福是れなり。倫理學はオイダイモニアの何たるを究むるの學なり、其の目的畢竟善といふとの何たるを知るにあれど所謂善は吾人の實際の生活上達し得べきものを意味す。故にアリストテレースはプラトーンの謂へる如き純理哲學上の善は倫理學の關する所にあらずとなせり。

アリストテレースは吾人のオイダイモニアを人性の圓滿なる活動にありとせり。

然らば吾人は如何なる活動を以て吾が職能となすべきか、曰はく合理的活動是れなり。如何とならば吾人の特質は理性にあれば也。合理的活動即ち理性に從へるの作動これを德といふ。德に究理上のもの(διανοητικαὶ ἀρεταί)と性行上のもの(ἠθικαὶ ἀρεταί)とあり。前者は性理の活動が眞理の研究に向へるものを謂ふ、凡そ吾人の心が事理に明かなる是れ亦一種の德なり。後者は吾人の品性及び氣質即ちエートス(ἦθος)に關するものを謂ふ（此のアリストテレースの用語よりして倫理學をエテーイカと云ふことゝなれり。）前者は理性がそれ自身を正しく働かしむるとに現れ後者は理性が下等なる一切の性情を統御するとに現る。

德は吾人の活動を離れて存在するものにあらず。而して吾人の德を成す活動は外形の動作にあらずして精神の働きにあり。吾人の幸福の心的要素となるものは此の精神の活動を全うすることにあり。然れどもアリストテレースは全く外界の貨物即ち若干の財産、衣食住、名譽、健康等を排斥して之れを吾人の幸福に無用なるものとせず、但だこれを以て幸福の中心的要素とせず其の中心的要素なる德の所依として(言ひ換ふれは德が十分其の働を現せんための條件として)吾人の幸福に用あるものとせり。以爲へらく此等の外物なくも有德の者は全く不幸なるにあらず、然れどもそれなくば爲めに十分の善福の實現さるゝことを妨くと。蓋し嚮にキニク學徒は悉く右等の外物を排斥したりしが、アリストテレースは或度までは德行の條件として之れが用を認めたるなり。又彼れは快樂を排斥せず。快樂は完全なる活動の自然の結果にして德の備はるところにおのづから生ずるものなりと見たり。即ち彼れは快樂を以て吾人の幸福の中心的要素なる德の自然の結果として吾人の幸福に缺くべからざるものとせり。之れを要するにアリストテレースは德即ち道理に從へる吾人の精神的活動そのものを以て善福の中心的要素となし而してその德を行ふに要する條件として外物をも、又その德を行ふとの自然の結果として快樂をも、吾人の全き善福を成り立しむるの部分と見たるなり。

〔三一〕道理に從へる活動即ち理性が情欲を統御するとは何に在りて存するか。アリストテレースは以爲らく是れ吾人の性情の働きをして過不及の兩端を避けたる中(μεσότης)を保たしむるところに在りと、即ち彼れに從へは德行は中を得るに

在り。而して中なるものは算數的に測知し得るものにあらす場合に應じて宜しきを得る活動にあり。然らば如何にして宜しきを見、中のある處を定むべき。他なしこれを定むるは知見の明なる者にあり(ソークラテースの教學に根據せるを看よ)。然れども德を成すには唯だ知見のみを以て足れりとすべからず、一には其の地盤としてこれを成すに適せる稟性の存するもの莫かるべからず、又一には常に知見の指導に從うて行うて過らざらんには意志の修練を經ざるべからず。知見に從うて行うことか吾人の堅固なる性格となりて始めて德を修めたりと謂つべし。

〔三二〕 政治論　人間は先つ自然に家族をなし次に村落をなし遂に國家を形つくるに至る、即ち何等かの社會を形つくらざるはなし。蓋し人間は社會的動物にして其の天性として自然に社會を成すものなり(ἄνθρωπος φύσει πολιτικὸν ζῷον)。抑も社會の大目的に相合し相助けて人々の發達を全うするにあり。故に國家の究極目的は(プラトーンの云ひし如く)人民を教育して有德のものとなすに在り。然らは國家の形躰は如何なるへき。さきにプラトーンは一の理想的國家を建てゝ

すべての國家をして皆同しくこれに則らしめんとせり。アリストテレースは廣く現存せる國家を比較研究して國家の形躰に取るべきもの三種ありと說けり。此の點に於ても彼等二人が其の思想の傾向を異にして一は理想の高地に居りて直下に事相を洞觀し、これは事實に根據して一歩また一歩理想の高きに上らんとするの別あるを認むべきなり。アリストテレース以爲へらく唯一種の國家のみか凡べての國、凡べての時、凡べての事情に適合すとはいふべからす。人民の風俗、感情、境遇、時代等の異なるに從ひて國家の形躰にも亦た自ら適不適の差別あり。實際に行はるべくしてまた最とも適當なるべきものは一に君主政躰(βασιλεία)、これは一人が衆に超越して經倫偉大の材を有する時に形つくらるべき國躰なり、二に貴族政躰(ἀριστοκρατία)、これは小數の人々の一階級が最も優れたる時代に採用せらるべき國躰なり、三には共和政躰(πολιτεία)、これは人民一般の知識が發達して自ら支配するを得るに至れる時に適當せる政躰なり。以上の三種は皆時に取りて正當なる政躰なれとも其の各〻がまた腐敗して正當ならざる形となれるものあり、腐敗すれは君主政躰は擅制政治(τυραννίς)となり貴族政躰は唯門地若しくは財

産を以て政權の所在とする寡頭政治(ὀλιγαρχία)となり共和政躰は愚民政治(δεμοκρα-
τία)となる。

斯くアリストテレースは諸種の政躰を列擧したるが尙最良のものとして彼れが描けるは賢良なるものゝ全躰に政權の存する政躰なり。又若し以上掲けたる種種の政躰に於いて通常なる如何なる制度が最良なりやと云はゝ其の重點が中等社會にありてこれが國家生活の基礎を爲すやうなる組織即ちそれなりとせり。

〔三三〕 美術論　古代に在りて最も豐富なる美術論を爲しゝものはアリストテレースなり。但し彼れの論は未だ近世の所謂美學を成せりといふべからず寧ろ專ら美術の論なり。

彼れは先づ美術上美と見るべきものゝ堺限を定めて曰ふ第一其の大さの適當なるを要す大に過ぎ小に過ぐ二つながら美なるものゝ範圍の外に在り次に一の個躰を成して定限を具ふるを要す、區域の漠然たるものは美といふべからず、次に又個々の部分が相關聯して統一あるを要す、關係なきものを挿入するは美術たるを害す、換言すれば釣合、調和、比例等のよく保維せらるゝを要す。以上の三要素は是れ實に希臘、美術の特色を言表せるものなり。

〔三四〕 アリストテレースおもへらく美術は吾人が模倣の性に起これりと。吾人には元來模倣の性あり。故に模倣する事を喜ぶと共に模したる物を見ることを喜ぶ。實物の人目を喜ばせざる者も其の模倣せられて繪畫彫刻となるやよくこれを喜ばしむ。而して模擬の方法はまた一ならざるを以て其の方法の異なるに從ひて數種の美術を生ず。形躰を以て模倣するは彫刻なり、彩色を以て模倣するは繪畫なり、音調を以て模倣するは音樂なり、言語及ひ律呂を以て模倣するは詩歌なり。

〔三五〕 アリストテレースおもへらく詩は歴史に優りて事物の實相を表せりと。後の學者これを解釋する一ならずと雖も多少近世美學者の所謂想化(又は醇化)と云ふことを認めたるならんか。現はさるる事柄により詩歌を上品なる者と下品な者とに分ち敘事詩及び悲劇を前者に屬せしめ、嘲罵の詩及ひ喜劇を後者に屬せしめたり。アリストテレースの詩論の保存せられたる所は劇詩の論(特に悲劇の論)に委し。喜劇の目的は觀者をして面白く可笑しく感ぜしむるに在り即ち嘻笑

の外にあらず。悲劇は看客の恐怖の情と同悲の情とを起こさしむるとによりこれを洗滌し去るを以て目的とす。是れアリストテレースの有名なるカタルシス(κάθαρσις即ち洗滌)の論とす即ち悲劇は偉大なる人物が躓らざる過失に陷り而してそれがため運命は彼れを不幸に沈淪せしむるの樣を描出せざるべからず。觀者は之れを看て一たびは慄然として恐れ又た一たびは其の偉人の不幸に同情すべし然して看客の心に生する結果は其の情の洗滌せられて、瀟洒なるを覺ゆるにあり。

ペリパテーティク學派

〔三六〕 アリストテレースの死後、其の學校の主座を占めしは彼れが親友にして博學なるテオフラストス(アリストテレースより年少なること十二歳)なり。彼れ多年教授に從事し、又多くの著作をなし、アリストテレース學派即所謂ペリパテーティク學派の擴張に與かりて大なる功績ありき。彼れは論理學に於て多少アリストテレースの說に加へたる所あり。例へば假言的論法の三段論法の一種に加へたるなど其の一なり。哲學上大躰の意見に於いてはもとよりアリストテレースの立場を守れりしかども、第一原動力(究極原因)と世界との關係につき又原動理性と受働理性との區別に就きてはアリストテレースの說に困難あることを指摘し疑ひを挾める所あり、また彼れの倫理說はアリストテレースの守持せし所よりも多くの價値を外物に置きたりといふ批評を受くれど、大躰の點に於いては敢て異なる所なし。

テオフラストスの外にアリストテレースの弟子として最も有名なるはロードスの人オイドーモスなり。彼れは論理學に於いてテオフラストスと共に多少其の師の說を改良せんと企てたる所あれども、哲學の要旨に於いてはアリストテレースを離るゝことテオフラストスよりも少なかりき。テオフラストスは究極原因と世界とを相離すと又心理の論に於いては原動理性と受動理性とを相離すとに疑訝を挿みて自然論を取るに傾けりしが、オイデーモスは之れに反して超越論を取り神を以て世界を超越せる存在者となせり。後者の論は神學に傾き又其の道德論は通俗的となれり。上に擧げたる二人の外、初代のアリストテレース學徒の中、其の名を擧ぐべきは音樂の理論を以て有名なるアリストクセーノスなり。彼れ

はもとピタゴラス學徒なりしが後移りてペリパテーティク學徒となれり。故に彼れの著書にはピタゴラス學派の說とアリストテレース學派の說と相混和したる所あり。初代のペリパテーティク學徒の中最も肝要なるは右に擧げたる人々にして其の後此の學派の成り行きに就きては次章に述ふる所あるべし。

第三期　倫理時代

第十六章　倫理時代の大勢

〔一〕希臘哲學の絕頂と稱すべきアリストテレースの時代は政治上より見る時は希臘の已に大に衰頽に傾ける時なりき。他の諸國に於いても屢〻其の例を見る如く希臘に於いて哲學の隆盛は政治文學美術等の隆盛なりし時代に後れたり。アリストテレースの學派の勃興したりし頃は已にアレキサンドル大王起こりて四方を征討し希臘の市府は政治上の獨立を失ひたる時にして此の事は希臘人の生活と思想とに大なる影響を與へたりき。蓋し希臘國民が生活の中心は政治的活動に在りき、各市府各〻其の獨立を維持して各市民等しく政治に參與することは希臘人殊に其の文化の中心なるアテン市民を活動せしめたる大原動力なりしに今や政治上の獨立を失ひてマケドニアの權下に服從するの止むを得ざるに至りぬ。又かく外より大打擊を受くるに先たち希臘の政治は內部に於いて日にましに腐敗を重ねつゝありき。希臘文化の花と呼ばれたりし雅典の歷史は其の好例なり。

〔二〕 かくして希臘の各市府は獨立を失ひたれども其の結果として希臘の文化は却りて外に散布したりき。蓋しアレキサンドルが遠征の結果として東西の交通を增し諸邦民族の混入を來たせるより希臘の文化は之れによりて益〻四方に廣がり、又羅馬帝國の天下を一統するに及びては希臘の文物は羅馬に取り入れられ此れにより傳へられて遂に後世人類の所得となるに至れり。希臘人は其の文化を以て唯自國民にのみ限れるものとして他をば一切野蠻人と見做したりしがこの懸隔とこの狹隘なることとはアレキサンドルの遠征又後には羅馬帝國の統一によりて破られたり。

〔三〕 右の如き事變が希臘の思想界に及ぼしたる影響如何と考ふるに第一に認むべきは個人的傾向の益〻增長せることと是れなり。希臘の國民は已に政治の上の獨立を失ひまた公共的生活の望を失ひたれば個人が各〻自家の安福を求むるに傾くべきは自然の勢なり。また世事の轉變して定まりなき樣を觀じては個人各自の安心を求むるにも外物に依らずして各〻自家の心の中に安立の地を發見せんとする方向にむかひたり。約言すれば希臘人の思想は個人的となると共にまた各〻自家の心中を顧みて世間の如何に轉變するにもかゝはらず變せず動かざる安心立命の地を我が心の中に求めんとせるなり。是れ當時哲學の根本思想なり。かるが故に當時の哲學に於いては理論上の興味大に衰へ主として實際道德の研究に着服するに至りぬ。天地万物の成立或は知識心理の事に關して固より多少推究する所はありたれどもそれすら其の要素となる思想はおほむね在來の希臘哲學に現はれたるものに取れるなり、殊更理論上の大發明大進歩と稱すべきものを發見せず。されど各人が世に處するの道即ち實際道德の事に至りては各學派各一方に偏しながら深く心を此に用ゐたるを見る。是れ此の時代を倫理時代と稱する所以なり。

〔四〕 此の時代に於ける特殊の學派なるストア、エピクロス、懐疑の三派は要するに實際的行爲を其の學の主眼とし各自實際德を修むることによりて安立の地を得べしと信じたり。件の倫理時代はアリストテレース以後なる時代の前期なり。然るに其の後に至りては唯個人が各〻德を修めんと力むることを以て滿足せず道德的理想の眞實成就せられんには更に宗教的境界に入らざるべからざることを

感するに至り宗教的傾向次第に盛なるを致して遂に宗教時代となれり。是れアリストテレース以後なる時代の後期即ち第四期にして倫理時代の末期なり。

〔五〕 此の時代に並び存する學派を擧ぐればプラトーンの學派即ち古アカデミー、ペリパテーティク學派及び此の時代に新たに起これるストア學派、エピクロス學派、懐疑學派、是れなり。古アカデミーとペリパテーティク學派とは其の開祖所說の大躰を維持して時の學派の論爭に與かりて多少の力ありまた當時代の大潮流なる實際的傾向に多少感染する所ありしがしかも此等は當時の思想界を率ゐたるものにはあらず。其の思想界の大潮流を代表し當時の學界の大勢力となれるものは後なる三學派なり。此等の學派はこれ其の時代の特殊なる產物なり。プラトーン學派又殊にアリストテレース學派が廣く諸種の學科を研究せる點に於ては當時の新潮流を代表するストア、懐疑、エピクロスの三學派が實際的問題に專なるが如きとは其の趣を異にせる所あり然れとも當時の道德的生活に實際上大勢力を有したりしは却て此等の三學派が各一方に偏して主角ある倫理說を主張したるかたに在りき。此等の學派は偏僻に失せる所はあれど其の偏僻なるとが却て一種の勢力を有したり。當時は一方より云へは諸種の學派が相競ひ相爭ひたる學派並立の時代ともいふべく、また新なる大潮流の方より云へば倫理時代と稱すべし。

〔六〕 以上述べ來たれる理由より當時の哲學は倫理道德の實際的方面を其の研究の主眼となし、理論上の根本思惟は概ねこれを在來の學說に取りたゝ之れを當時の更に複雜になれる時世は適合せしめ之れを相混和し又多少變形せしむることに力を用ゐたり。當時の學風は云はゝ分科的となりて一科一科の研究には頗る細密になれる所ありまた之れと共に博覽といふ事が當時の一傾向となれり。約言すれば當時の學風には一方には在來の學術の歷史及ひ其の他の故實來歷の穿鑿又其ほか局部的事實の考究を事として博覽を競ふと一方には安心立命の實際問題に着眼することゝの二傾向あり。故に知識の方面より云へば諸種の事物の局部的穿鑿は盛なれど大躰に亘れる萬物の根本理を新に達觀する大見識出でず從ひてまた大理論的組織の見るべきなし、又其の結果として學說の爭に於いて當時に重きをなせるは傑出せる個人よりは寧ろ學派にありき、而して學派の相

對峙する差別も亦た理論上よりは寧ろ倫理道德の實際的問題に關する意見にありき。而してまた實踐哲學の方面に於いても重に社會國家の上に着眼せるプラトーン、アリストテレースの所說と異なりて個人的道德を說くを主眼としき。

〔七〕 ストア學派を講述せん前に一言ペリパテーティク學派と古アカデミーとに就て述べおかん。先きにペリパテーティク學派に於いてテオフラストスの流れ即ち內在論とオイデーモスの流れ即ち超越論との對峙は已にアリストテレースに親炙したる人々の中に起これるとを述べたりき。ストラトーン(西紀前二百八十年より同二百六十九年まで)テオフラストスに次ぎてリカイオンの首座にありし人)に於いてはテオフラストスの內在論の傾向は更に著るくなりて遂に自然的思想に陷れり。ストラートン以爲へらくアリストテレースの所謂純なる相及び唯だの素は二者共に無用なるのみならず不都合なるものなりと乃ち之れを棄てゝ神と世界とを一にし思考と知覺とを一にし天地萬物は凡べて自然の必然作用によりて成るものなりとし、森羅萬象は本來存在する種々の力のなすところ而して其の力の中最も主なるものは寒と暖とにして殊に暖を以て活動的のものとせり。

希臘哲學の最も古きイオニア風の思想が彼れに於いて復活せるを見るへし。この古代の物理思想の復活はアリストテレース以後の希臘哲學の一特色といふべし。廣く諸科學を研究したるペリパテーティク學派の人々に於てはまた局部的研究の傾向を看る、彼等の特に長したりしは歷史的研究(殊に文學及び學術に關するもの)なりき。この局部的鑿索と博覽とを求むる傾向は年をおいて益盛になりしがアリストテレース以後第十一の學頭なりしアンドロニコスーに至りて再び哲學の組織に着眼しアリストテレースが哲學の本意を更に研究し復興せんとせり。彼れの編纂せしアリストテレースの著作が本となりて其の後アリストテレースの眞說を組織的に闡釋せんとするとおい〳〵進み來たり遂に其の學祖の哲學を註釋するとを以て此學派の主要なる職務となすに至れり。アフロディシアス人なるアレキサンドロス(紀元後二百年頃の人)の如き是れ註釋家として最も有名なる者也。

〔八〕 古アカデミーは曾て述べし如く大にピタゴラス學派と接近し彼れは此れに、此れは彼れに影響をおよぼして兩者殆んど相和せんとするに至れり。アカデ

ミーの學徒は重にピタゴラス派の數論に化せられたるプラトーンのイデア論及び其の晩年の思想なる自然哲學に心を注ぎまた分科的局部的の鑒索に心を傾けたりき。又其の道德論は通俗的修身講義の如くなり、且つプラトーンに在りし經世的傾向漸くに失せて個人の修身說を主眼とするに至れり、是れ要するに當時の社會の大勢につれたる變遷なり。古アカデミーは後に至りて懷疑派に轉ずる迄は哲學上特に著るき事業を成せることなく、また其の及ぼせる影響は已に上にも述へたる如く當時の新精神により起こりまた其の新精神を代表せるストア、エピクロス等の學派に比して遙かに其の下に在りき。

第十七章　ストア學派

〔一〕倫理時代に現はれたる諸學說の中哲學として最も大なる組織を成せるはストア學派なり。此の學派はキプロス島人ゼーノーン(西紀前三百四十二年より同二百七十年頃迄(ゼノンの血統は希臘人にはあらざりしなるべし)の創立する所にかゝる。彼れ雅典府に來りてキニク學派なるクラテースに學びて大に之れに心を寄せ、またメガラ學派のスティルポーン、プラトーン學派のクセノクラテース及びポレモーン等に聽きたりしが、後に自立してストア、ポイキレー(彩色したる堂の義)に自家の學派を開き同志の輩を集めたり。是れ此の學派のストアと稱せらるゝ所以なり。

此學派はゼーノーンの創立に懸れと一人が一時に作り上げたるにはあらで數多の歲月を經數多の人により作り上げられたるものなるが故に同じくストア派の學者にても人により時によりて其の所說必ずしも全く同一ならず。斯く人と時とによりて多少の差別はあれど全躰の趣に於いて同一の趣を帶び同一の流れを汲める者と總稱してストア學徒と名づく。學祖ゼノンの次に此の學派の領袖として有名なるはクレアンテース也。彼れは夜は卑賤なる家業を營み晝は道をゼノンに聞けりと傳へらる、其の品行の堅固なることはキニク學派の所謂賢人の理想を傳へたるかの如く見ゆ。彼れは此の點に於いて時人の大なる尊重を受けたれども哲學上の學說に於ては別に深く考へたる所ありとは見えず。次ぎにストアの學說を大成し浩瀚なる著作をなして此の學派を擴張しそを當時の學界の大勢力となしたるはクリシッポス(二百八十年——二百〇六年)なり。

ストア學派の所說は大に當世の需要に應するものなりし故に啻に倫理學說の上

に於いてのみならず實際人心の修養上に與かりて大に力ありき。ストア學は當時に大勢力ある一の學風を成したり。然れども其の主義を擴張して多數の人々を感化せんには此の派最初の所說は餘りに嚴に過ぎて融通し難き所あるを以て其の主角を去りて世間實際の用に適せしむべき必要を感し而して此の必要に從ひて此の學派を更に當世に擴張してストアの名聲を高め羅馬に於けるそが不拔の根據を据えたるをパナイティオス(西紀前二世紀の中頃の人)とす。ストア學派は彼れに於いて一歩を轉じたりと稱せらる。ポシドニオス(西紀前百年頃の人)に至りては折衷的傾向更に著るしくなれり。

羅馬の帝王時代にはストア學は盛に其の首都に行はれ希臘哲學の中羅馬に於いて最も確乎たる根據を得たるはストア學派なり。其の所說の頗る羅馬志士の氣風にかないたるは其の一原因ならん。而してストア學は羅馬の學者間に於いては更に益〻實際的傾向を帶ひ來たり哲學上の組織的又理論的研究よりは寧ろ通俗の道德論を主眼とするに至りまた之れと共に漸く宗教の趣味を加へ來たりぬ。一般思想の潮流が宗教時代に近づきつゝあることは此の學派の變遷にも明かに見るを得るなり。羅馬のストア學徒中にて最も有名なるはセネカ(ネロン帝の師傅紀元前五年頃より紀元後六十五年迄の人)、身奴隸より起こり後にストア學者として時人に敎を垂れたるエピクテートス(紀元後六十年——百二十年頃の人)、及び羅馬ストア學派の華と云はるゝ明君マルクス、アウレリウス、アントニーヌス(紀元後百二十一年——百八十年)なり。

〔二〕 前に述べし如くストア學派は時代によりて變遷あれども其學說を組織することに於いて最も力ありしはクリシッポスなりと云はざるべからず。今こゝには成るべく廣くストア學徒に通じて哲學上其の主要の思想と見るべきものを取るべし。希臘ストア學者の著書多くは失せて今遺存せるは概ね羅馬ストア學者の著作なるを以て其の原初の學說は歷史的著述によりて考ふるの外なし。

ストア學說は其の內部の構造統一を欠ける所あり。彼等は在來の希臘哲學に存せし幾多の思想を取り入れて之れを結びたれども其の結合は充分に成効せざりき。是を以て其の變遷するに從ひて折衷的傾向次第に明かに現はれ來たることとなれり。

ストア學徒は當時廣く用ゐられたる區別に從ひて哲學を三部分に別かてり、論理、物理、倫理是れなり。されど其の主眼とせる所はその第三のもの即ち倫理道德の研究にありき。

〔三〕ストア學派の論理に於いて哲學上注意すべきは眞理の標準の論、換言すれば知識論なり、知識論に於いてストア學徒はキニク學派の學脈を受け、てプラトーン及びアリストテレース等の通性論に反對し通性は眞實存在するものにあらず唯だ吾人が主觀に思ひ設けて言語に言ひ現はせるもののみと考へたり。後世の用語にて云へは彼等は名目論風の說を取れり。其の論に曰はく凡べて吾人の知識は感官を以て個々物を知覺するとによりて成る吾人が心の本來は拭へる板の如し吾人の心中に生ずるは皆外物の印象に外ならずと。見るべしプラトーンの知識論とは全く其の趣を異にして一種の感覺說と稱すべきものなるを。尙ほ曰はくかくの如く知識は感覺に始まり、感官を以て知覺したるとが後に遺りて記憶となり記憶積みて經驗となる而して經驗を基として推論するに至りて初めて遍通的觀念は成る。而して件の觀念の組織的に立せられざるは通俗の知識にして其の組織的は造り上げられたるは即ち學識なり。斯くの如く吾人が諸の事物を經驗することに依りて造り上けらるゝ遍通的觀念の中凡ての人の必然に具有し且つ一致する觀念あり。此等の觀念は各人が擅まに造りて自他の間に一致を期すべからざる觀念とは異なる本然の概念なりと。而して或ストア學者は此等の概念をは吾人の知識殊に道德の上に於ける動かすべからざる根據と見たり。此くの如くストア學徒に從へは吾人の知識は外物より受くる印象によりて成り而して主觀に存する方面に於いては知識は畢竟吾人の觀念の造る所に外ならず。然らはその觀念の眞なるか妄なるかは何によりて定むべき。曰はく眞なる觀念とは其の對境即ち客觀の事物に合せるものをいふ。然らば觀念がその對境に合へるか否かは何によりて知るべき、換言すれば眞理の究極の標準は何そや。曰はく眞なる觀念の眞なることは其の觀念に伴へる直接の證明によりて知らる眞理はそれ自らの眞理なることを知らしめ他の證明を待たさること猶ほ光が他に照らさるゝを待たずして自ら明かなるが如しと。然らばストアの學說に從へば眞妄の究極の標準は畢竟吾人か主觀上自明なりと認むることに在りと云はさるべ

からず。

〔四〕 ストア學派の知識論は其の大躰の組立に於いては經驗說、感覺說なれども道德上の根本思想を說く時は多少理性論の趣を帶べる所なり。而して之れと共に其の物理論にも亦た二つの方面あり、一面は物質論他面は精神論是れなり、ストア學徒は一面に於いては凡べての事物は物質の必然的作用によりて生起すと見、他面に於いては其の自然的に生起することか即ち理性の目的ある働きに外ならずと見たり。其の自然哲學に曰はく凡へて實在するものは物躰なり神と云ひ人間の靈魂といふも物躰以外のものにあらず。然れども所謂物躰に二面あり一面は物質にして一面は精神なり。蓋しストア學徒は物質と精神の活動とを引き離して考へず物質其のものに精神の働きは具はると說けり。而して如何なる物質より萬物は成れるかといふに彼等はヘーラクライトスの學流を汲みてそを火と見たり。火は根本的物素にしてまた根本的精神なり、火は靈妙なる働きを具して萬物皆是れより成れり。かくストア學派の物理說は物心を二分せさる一元論にして正さしく希臘哲學の始めに現はれたるイオニア學派風の物理說の再現せるものといふべし。さきにも云へるか如く希臘哲學の在來の思想の復活する事これアリステレース以後の希臘哲學の一特色なり。

〔五〕 ストア學徒は此の火を神と名つけまた之れを宇宙の理性と見たり。おもへらく萬物に秩序あり、目的あり、意味あるは皆此の神火即ち宇宙の理性 (λόγος) の爲す所なり、此の宇宙の本躰たる火の一部分が吾人の所謂通常の物質となり一部分はそを活動せしむる勢力即精神となる。地水火風と四つに分かたれたる所より云へば火は他のものを活動せしむる勢力また精神たるなり。此くの如く万物は一元より成れとも又遂に萬物が神火となり了することあり而して是れ世界の終極なり。然れどもまた神火に具はる約束に從ひ更に新世界成りかくして循環止むことなしと。かく說ける所より見ればストア學派の自然哲學を名つけて一種の萬有神敎と稱するも妨げなかるべし。ヘーラクライトスが萬物不斷に流轉しながら其の中に變らざる道(法則)あるを設けるか如くストア學徒もまた一元論を唱へて宇宙は一元の働きなりとし其一元は一面物質なれど他面道理を具へ目的を具へたる精神なりと說き、宇宙の一致と調和と美とを說きまた天地万物に通

する法則が凡てを支配して遺漏あることなきを說くに力を用ゐたり。宇宙の大法といふことはストア學派に於いて忘るべからざる主要の觀念なり。蓋しロゴスの論は此の學派に於いて甚だ肝要のものたる也。

〔六〕 地上に於いて最も高等なるものは人間なり、人間の靈魂は宇宙の神火の一部分を受けたるものに外ならず、人間に於いて最も尊き理性は宇宙の理性(言ひ換ふれば神)の宿れるものといふも可なり。個人の靈魂が死後も尙ほ存在するか否かに就きてストア學派に一定の論なし、或は凡ての人の靈魂は死後になほ存すと云ひ或は賢者の靈魂のみ死後に存すと說く等の異說あり。

〔七〕 さきにも云へる如くストア學派の重きを置けるは倫理の論にして論理、及ひ物理の論は之れに對しては第二等の價値を有するのみ。ストア派の道德論に於ける根本思想は宇宙を支配する道即ち神の理法といふ觀念にして彼等は其の理法を知りて之れに從ふが人間の務むべき所なりと說けり。此派の格言に曰はく自然(φύσις)に從ひて生活せよと。茲に謂ふ自然は即ち理性の謂ひにして廣くは自然界に通ずる道狹くは人間の性なり(人性の特殊なる所は其の理性に在り)。故にストア派の說く所に從へば性に從ふと云ふは天命(神即はち宇宙の理性)に從ふと云ふと同意義なり(吾人をして中庸に說ける所を思ひ出ださしむ)。而して性と云ひ道と云ひ神と云ひ自然といふも究極する所道理を具へて働くもの即ち理性といふことに歸す。理性に從ふが理性を具ふる人間の自然の性なり、自衞の性は凡へて物のおのずから具ふる所、吾人は此の自然の性に從ふべし而して人間の自衞の性は理性を守るに在り、理性を守持するに與かりて利あるもののみ眞に吾人に取りて價値あるものなり。往きにソフスト時代に自然に從へといふ思想を觀たりしか其自然といふ觀念がストア學派にはソークラテースの道德論の影響によりて理性と云ふ觀念と契合せり。蓋し此の學徒はソークラテースに從うて有德の生活は知見の指揮に從ふ生活に外ならずと說きたり。

〔八〕 ストア學派の道德論はキニク學派の脈を引ける所多し。以爲へらく善しと云はるべきものは德のみ、惡しと云はるべきものは不德のみ、他のものは凡べて善ならず惡ならざるものなり、而して德は理性に從ひて生活するに在り、富貴貧賤快樂、苦痛、疾病、生死等は皆善くもなく惡しくもなき無記のもの(ἀδιάφορα)なり。此

等無記のものに價値をおきて心を動かさるゝ是れ即ち不德の根元なり。故に理生に從へる生活即ち有德の生活は消極的に云へは煩惱を脫したる生活なり、而してストア學徒の有德の生活を說くや重もにこれを消極的方面より見たり。吾人の道德は些も外物及ひ外界の出來事に動かされざる狀態即ち不動心(ἀπάθεια)を得るに在り。

〔九〕ストア學派の倫理說は理性と物欲とを相對せしむる二元論にして其が哲學上の一元論と相合し難し。若し理性が凡てに通ずる自然の道ならば凡へての物はおのつからに理性に從ふ筈なり、吾人の性もまた理性ならば吾人はおのつから理性に從ふべき筈なれば此の見地よりする時は何故に之れと相容れざる物欲の存するかは解し難し。かくの如くストアの學說には二個の思想の未だ十分結合せざるものあるを見る。

ストア學徒はかくの如く理性を宇宙の道と見吾人はこれを規範として之れに從ふべきものなりとしたる所より吾人の現に在る樣と當に在るべき樣との對峙著しくなり義務てふ觀念は希臘の倫理思想の中に就きストア學派に在りて最も明になりまた道德の法則てふ觀念も甚だ力あるものとなれり。而して吾人を導きて此の法則に從はしむるは知見の働なりとなし有德の生活は知見によりて成り立ち不德の原因は無知に歸すと說けり。是れ正しくソークラテースの學派を受けたる者廣く云へば希臘の倫理思想の根本の趣を傳へたる所也。ストア學派はかくの如く知見に重きを置くと共に又吾人の意志に重きを置けり、曰はく外物に價値をおくと置かざるとは吾人の意志のそを欲すると欲せざるとによる、何如なるものを善しとするかは意志の自由に在り、意志の斷定は吾人が心の其の物に惹かさるゝか否かを定むもの、貧富、貴賤、生死の如き吾人の意志の持やうによりて之れを無記のものと見ることを得。

ストア學派の道德を說くや一方に於いて意志の自由を主張すると共に又天地萬物は皆宇宙の必然法によりて支配せらるゝことを說き此の二個の思想は充分に調和せず。然れとも此の事を姑く外におきて考ふれば其の意志の力に重きを置きまた爲人に重きをおきたる所はストア學派の道德論に於いて注意すべき點なり。

〔一〇〕 德不德の根本差別は外形に現はれたる動作にあらずして爲人にあり心根に在り。故に其の心根が道に合ひ理性に從へば德はおのつから行はれ其の心根が道に合はざる時は一として德の具はるべき理なく其の人の行ふ所凡べて不德となる故に德と不德との間には段階なし、一德眞に修まると云はれんには凡ての行爲の根本たる心根が理性に合はざるべからず、心根にして理性に合せんか、事に應じ物に應じ行ふ所凡べて德行として現はれ來たるべし。一の不德を爲すといふは其の心根が理性に合はざるを證するものにしてかくの如き心根よりする時は事毎に不德なるべし。故に人間は有德なるか不德なるかの二つに分かれて其の中間を容れず。即ち人間には二種類ありて賢なるか愚なるかの二つに歸す、聖賢は凡べての德を具へ凡べての事に於いて宜しきを得、行ふ所悉く道に合ひ、圓滿の德を具足す。然れども人間の多數は愚人なり愚人は即ち不善人なり。

〔一一〕 ストア學徒は德の種類を掲けて之れを審にすることを力めたり。其の中こゝに最も注意すべきは其の公共心を尊ひしことなり。アリストテレース以後は希臘に於ける倫理思想の大勢は靡然として個人的傾向を帶び來たりたれど、ストア學派は他にまさりて尙社會的方面を維持せるものなりき。故に彼等は國家に對する義務及家族に於ける道德を重んじたり、此點に於てストア學派の道德說はキニク學徒の道德說と異なれり。後に殊に羅馬のストア學徒が明に博愛の德を說くに至りて希臘の道德思想が一種の新光彩を放てるを看るべし。ストア學派はまた理性を遍通の法則と見たるが故に民族、血統人種の如何にかゝはらず理性に從ふ者即賢人は此等の區別を脫し、一國家の臣民として生活する以上に同じく理性に從ふ人間といふ關係に於いて廣き團躰の一員として生活するの段階に進める者と見たり。是れ所謂ストア學派の世界主義なり。之れを當世に於ける政治上の關係より見れば羅馬が凡ての人種を網羅して大帝國を建設せる偉大の事業がストア學派の哲學的道德說に現はれたりと謂ふべし。

〔一二〕 前にも云へる如くストア學說の廣く行はれ、また其の學徒が其の所說を廣く世人に服膺せしめんとするに從ひて其の學說殊に道德論の主角を去るの必要を感じたり。彼等は先つ無記の物の論に於いては多少假借する所ある事となり、無記の物をは狹義に所謂無記のものと或條件の下に於いては多少價値を置き

て然るべきものとの二つに分かてり。例へば健康位地名譽の如きは道德を害せざる限りそを求むべき多少の價あるものと見るに至れり。またストア學派の理想的人間即ち聖賢の不動心を說くや初めは外界の變動の爲めに全く喜怒哀樂の情を動かさゞる者の如く極めて嚴かに說きたれとも其の實際に通じ難きより聖賢と雖も多少外物の變動によりて其情の動かさゞるにはあらず、唯其の情に任せずして直に之れを制御するの自在力ある所即ち聖賢の特色なりと說くに至れり。且つ此の派の學徒は初めは其の理想とせる聖賢の實際世間に存する事を確認し例へば「ソクラテス、アンティステネス、ディオゲネスの如きは即ち其人なりとしまた各人勉めて止まずんば何人も遂にかゝる聖賢の地位に達することを得るものなるを信して疑はざりしが、後に至りては世間果して、かくの如き圓滿なる理想の人(聖人)あるか吾人の孱弱なる果して能くかくの如き地位に達し得べき者なるかを疑ふに至れり。」是に於いて彼等は初めに人間には賢人と愚人との二階級あるのみと考へたるを改めて尙其の中間は漸次に進歩し得る者また進歩しつゝある者の階級を置き、且つ愚人と雖も之れを見てたゞ濟度し難き者、共に語るに足らざる者として卑下するに代へて之に對するに憐愍の情を以てするに至りぬ。殊に羅馬のストア學徒に至りて其益然るを致したりき。且彼等に至りては宗敎的傾向益〻著るく、吾人の弱きこと罪あること、自力のみにて全く善業を成就するの難き事、從ひて神明の冥助を要する事等の思想漸々に起これるを見る。

〔一三〕 かくの如く羅馬時代に至りては宗敎的傾向益〻著るかりしが本來ストア學派は宇宙の理性是れ神なりと說く萬有神敎にして宗敎的方面を具ふるものなりき。彼等は天地の道に從ひ天命に安んずるを以て宗敎の極意となし心の淸きこと是れ即ち神敬の道なりとし、眞正の宗敎は哲學及び道德と二ならざるものと見たり。そは知識の發達せる人々に於けるの宗敎なるが通俗の宗敎に對してもストア學徒は敢て攻擊の位地に立たず寧ろ其の中の種々の傳記を譬喩と解して其の中に高等なる眞理を發見せんとせり。

〔一四〕 ストア學派の根本思想は外物に依賴せずして各人自家の心中に安心立命の地を得んとするにあり、これ當時の人心の向ふ所を示せるものなり。而してストア學派は件の安心立命の地をば各自の有德なると即ち德を修むるとに得へ

き滿足に求めたり。以爲へらく德は各人の理性に存し意志に存して外物の變動に拘はらざるもの他人の奪ふべからざるものなり。他人は我が身躰を傷け生命を奪ふことを得べきも些も理性(即ち我が眞個の價値)を傷くること能はず、我が價値を害ふものは我れ自らの意志のみ他物の爲す所に非ず。吾人は吾が理性を守ることに動かざる滿足を覺することを得。若し道を失ふことなくば吾人は常に安靜なるを得死と雖も吾が累をなすに足らず。約言すれば我れ若し己れの主人たるを得ば凡てのものゝ主人たるを得べしと。是れストア學者が安心立命の地也。

斯くの如く生死を輕んずる所より、ストア學徒は吾人が世に存する理由を失ふ時は隨意に自殺するを以て正當なりとし又之れを以て各人の貴重なる權となし吾人が存らへて他物に制せられんよりは寧ろ靜に世を此に辭すべしと考へたり。此のこゝろよりして此の派の開祖ゾェノンの如きクレアンテスの如きは自殺して死しきと傳へらる。中には意志の力を信ずることの厚き自ら我が氣息を止めて死せし人もありきといふ。ストア學徒はやゝ奇僻に陷り常道を外るゝの嫌ありたれど兎に角當代の道德的生活に一大勢力を與へ一大活氣を添へたることに於いて其の功績の偉大なりしとは蔽ふ可からず。羅馬の名將政治家又明君と云はるゝ人々の此の學說を奉せるもの少ならざりき。

第十八章　エピクロス學派

〔一〕ストア學派と同時代の產物にして、究竟する所同一の問題を解釋し同一なる時勢の需要に應せんとして出でしかも其の學相に於いてストア學派の正反對に立てるものをエピクロス學派とす。此の學派を創めたるエピクロスは雅典府人の子、西曆紀元前三百四十二(又は一)年にサモス島に生まれ、後雅典府に在りて敎授を始め、其の庭園に同志を集めて其の學派を開けり。其の人物溫厚深く人に愛敬せられたり。彼れの說きし哲學は實用を專らとし常人に解し易く、學術上多くの修練なきものも其の學派に入るを得しかば集まり來たるもの夥しく其の勢頗る盛なりき。婦女子も亦其の團躰に入りて道を聽けり。彼れ紀元前二百七十年に逝りぬ、著述せし所頗る多かりしが其の今日に存する者甚だ少なし。

エピクロス學派は大にストア學派と異なりて、其の哲學の組織は已に其の學祖に於いて完備し、學徒は專ら之れを傳ふるに止まり其の學說の彼等によりて變更さ

れ發達さるゝ所なかりき。

此學派の人々の中有名なる者を擧ぐれば、エピクロスの親友なるメトロドーロス又降りては有名なる羅馬の詩人ルークレシウス(紀元前七十年頃の人)等なり。ルクレシウスは其の有名なる述學の詩にエピクロス學派の世界觀を解說せり。此の學派も紀元後三百年頃迄繼續したり。

〔二〕ストア學派がキニク學派の脈を引けるが如くエピクロス學派はキレーテ學派に得たる所あり。キレーテ學派の最初の說はをさなき粗笨なる快樂說にして、眼前の歡樂を主眼としたれども、其の快樂說を生涯の主義として揭くる時には己にアリスイッテポスに見えたる如く多少快樂の選擇を說かざるべからず、其の學派の後に至るに從ひてます〳〵思慮を用ゐて快樂苦痛を比較選擇するの必要を感し遂には轉して厭世的傾向を帶ぶるに至れりき。而してエピクロスの說く所は熟慮靜思して吾人が生涯の幸福(快樂といふ意味にて)を得るを目的とせよといふにありて、古代の快樂說中最も磨き上げたる學說なり。彼れが學說の全く實用的なるとはストア學派にも優れり。彼の學徒は哲學を以て唯個人が各〻樂しき生涯を遂ぐる所以の方便を見出だすものとのみしたり。即ち哲學は彼等に於いて遂に處世の方便に過ぎざるものとなれり。

〔三〕かくの如くエピクロスは天地萬象の究理の學を以てそれ自身には價値なきものとしたりしが、吾人の此の世に住みて安樂なる生活を爲すの妨げとなるべき多くの妄想迷信ありてこれが爲めに無益なる煩悶苦痛をなし失望し失敗することと多きが故に物理の學は此等の妄想を驅逐するの益ありと考へたり。エピクロスは自家の意見に合ふ物理說をデーモクリトスが元子論に發見せり。以爲へらく物理上より看れば世には神怪不思議の在るべき筈なく、また感官以上のものの存在を認むる必要なし。凡べて存するものは虛空と虛空の中に散在しまた運動する元子あるのみと凡べての森羅萬象は元子の皆集散離合するによりて成ると。彼れの元子論は畢竟するにデーモクリトスの說を襲へるものに外ならず。唯エピクロスは元子の形の種類は數に於いて限りありと考へ又原子は本來上より下に直下するものなれども其の中少しく左右に外ぐるものあるを以て元子間に衝突を起こし遂に渦旋運動を生し多數の世界を形成し而して其の世界は或は

壞れ或は成り其成壞休む時なしと說けり。其謂ふ物質元子の運動は目的ありて起こるものに非ず。故にストア學は一面唯物論にてありながら他面は尙ほ精神論にして且つ目的說なりしがエピクロスの學は純乎たる唯物的元子論にして目的說を容れず。

〔四〕吾人の靈魂は火氣にして甚だ動き易き元子なり而して吾人の死するや件の原子は離散するが故に死後の生活なるものなし。此の故に吾人は死後地獄に墮ちんといふが如き恐れを懷くを要せず。但しエピクロスは神々の存在を許せど其の所謂神は人間の如き形を具有し唯人躰よりも精美なる不死のものにして、世界と世界との間に住み自ら足りて毫も他に求むる所なき者なり。此等の神々は吾人の世界に對して少しも心を用ふることなく少しも吾人に求むる所なきを以て吾人は彼等を恐れまた彼等に媚びるの必要なし。吾人は須らくすべて此等の迷信的恐懼を去るべし。

〔五〕知覺は外物の影像(εἴδωλα)が感官より入りて靈魂の原子に接し其處に運動を起こすことによりて生ず。想像も亦同じく外より影像の來たるによりて生起す。記憶は曾て起こりし靈魂原子の運動の再起するによりて生ず。意志は靈魂に起こされたる運動が身躰に傳はる所に起こる。此くの如くエピクロスは凡べての心作用を全く物質の上より考へたるにも似ず、固く意志の自由を主張せり。(これは其の元子論に直下動運より隨意に左右に外ぐる力の元子に具れりと云へるに聯絡せしめて考ふるを得べし)。エピクロスがデーモクリトスの世界觀を毀ひたるはそれが自家の人生觀を說くに適せるが故にして敢て究理上の方面に重きを置けるにあらず。是れ彼れが唯物的元子論を取りながら道德論上の必要よりして意志の力に重きを置き其の自由を主張したりし所以ならん。

〔六〕かゝる物理說を取れる所より其の知識論即眞理の標準論(此の學派にてはカノニックと名つく)もおのつから感覺說なり。以爲へらく凡へて吾人の觀念は皆感官の感覺より來たるを以て眞理の標準は畢竟するに五官の知覺に訴へざるべからずと。此の派の感覺的經驗論は其の唯物論と同じくストア學派の知識論に存せる所のものよりも更に單純又著明なるなり。

〔七〕エピクロス學派に於ては其の物理論及び知識論は前にも云へる如く道德

論の附屬物なり。而して彼等の說が物理論上原子論なる如く道德論に於いては個人的快樂說なり。以爲らく個人は各〻獨立のものにして自家の快樂を得るを目的とす、我が快樂以外に善しと云はるべきものなし。されど吾人は眼前の快樂をのみ觀るべからず或快樂は却て多くの苦痛を招致するの恐れあるを以て吾人は快樂を較量選擇せざるべからず、而してそをなすものは即知見(φρόνησις)なり。故に知見は德の根本なり、種々の德は知見が種々の場合に應じて働けるものに外ならず。

〔八〕快樂には欲求を充たすの働(即運動)によりて起こる(κατὰ κίνησιν)動的快樂あり。然れども是れに比して更に値價あるは苦痛なくして安靜なる狀態の快樂なり。如何にして之れを得べきか。これを得むには欲望を燃さず心を騷がさず、寧ろ寡欲にして足ることを知るべし。エピクロスは吾人の需要を三種類に大別して曰く、一は自然に具はりて生活するに欠くべからざるもの也。二は、自然に具はりたるものなれど止むを得ざる場合には欠くことを得るもの、これを滿たすは吾人の幸福を增す所以にして敢て之れを壓抑するを要せず。三は吾人の故(わざ)と造り設けたるものにして足ることを知るの安きを得んには之れを棄てざるべからずと。ソフィスト等が已に說けりし自然と人爲との對峙が穩やかなる形を取りてこゝに存するを見るべし。(尙ほこれをストア學に所謂自然に從ふ生活と比較せよ)。

かくの如くエピクロスは敢て積極的快樂を取ることを排斥せずこれを以て吾人が幸福の一部分となせど、其の重きをおける所は個々の歡樂を盡くす所にあらずして寧ろ生涯を通じたる安靜なる狀態にあり。かゝる安靜なる生活を送らんには心を外物に繫ぐべからず、外物の如何に變動するにもかゝはらず、我が心がその上に卓絕して自らの中に破るべからざる滿足を覺ゆるやうにすべしと。かくの如く外物に對する慾望に攪擾せられざる狀態是れその所謂アタラクシア(ἀταραξία)即ち心の平靜なるの謂にして、ストア學派の謂ふ不動心に應するもの也。

〔九〕エピクロスが精神(意志の力)に重きを置くとの大なる縱令身躰に苦痛はありとも我が心の持やうにて泰然自若たるを得と說くあたりは恰もストア派の說に髣髴たり。エピクロス學派の理想的賢人はストア學派の理想的賢人に似て其

の欲望を制するとの全く自在なる者なり。エピクロスの有名なる語に曰はく我れに麵包と水とあらば幸福に於いて天帝に讓らずと。之を要するにエピクロス派の學相は一面ストア派の正反對に立てどそが人生の理想を描いて安靜なる生活を送らんには外物の欲望に束縛さる可からざるとを說くに至ては甚しく相接近せり。吾人は壽命にも執着することあるべからず。エピクロス學徒も隨意に自殺することを可とせり。說きて曰はく死は毫も恐るべきものに非ず。吾人が恐るべき死に逢ふとありと思ふは迷妄なり、我れの生き居る間は死來たらず死すれば我れ居らず我れと遂に相あふべき時なきなりと。

〔一〇〕エピクロス學派の所說は全然個人的にして、當代の個人的傾向を最も明瞭に代表せる者なり。以爲へらく社會は人類が互に危難を避け各自平安なる生活を營まんが爲めに組織せるもの、即ち人類が自利を計るの思慮よりして造り出だせるものに外ならず。賢者は成るべく國務に與りて累を我が身に蒙むることをなさずと。かく國家に於ける職務に服することを避くるのみならず、エピクロスは家族の生活にも疑ひを挾み、婚姻は却て係累を多くするの恐あればむしろ之れを避けんとを勸めたり。かくエピクロス學徒は國家及び家族の團結を輕んじたる代りに特に朋友の交情に重きを置けり。

各自優美に自家の安靜なる生活を求むることがエピクロス學派の眼目とする所なり。是を以て此派の理想的賢人はストア派の理想的賢人の如く偏屈ならざる代りに義務の念を欠き個人が遍通の法則に對する嚴格なる念慮を欠けり。此のエピクロス學派の個人的、自利的快樂說に於いて當時の希臘羅馬の社會の狀勢を親ふべし。

第十九章　懷疑學派及び折衷說

ピルローン學徒

〔一〕キニク學派の脈がストア學派に傳はり、キレーチ學派の脈がエピクロス學派に傳はりたるがごとく、キレーチ學派及びキニク學派が其の起原に於いて親密の關係を有するソフィストの流れが懷疑學派に於いてアリストテレース以後の哲學に傳はれるを看る。アリストテレース以後の哲學に於いて懷疑說を主張したる最も古きものはピルローン學徒なり。エリス人ピルローン(Πύρρων)はアナク

サルコスと共にアレクサンドル王の遠征に從ひて東方に行きしことあり。彼れが如何なる人に師事せしかは明かならざれどもエリス、メガラ學派の說を聞きしことあるらしく考へらる、而して其の懷疑說はソフィストの流れに連絡する所ありと見て可なかるべし。紀元前二百七十五年乃至二百七十年頃に九十歲ほどの高齡を以て歿せりしが如し、彼れが書を著したることを知らず其の說の後人に知らるるは其弟子なるフリオス人ティモーン(Timon紀元前二百四十一年以後に死せり)によれり。ティモーンは書を著すこと多かりきといふ。ピルローンの徒を懷疑學徒とはいふものから其執る所懷疑說にして天地と人生とに關する知識(攷究)を拒否せしなれば他の四大學派(プラトーン、アリストテレース、ストア及びエピクロスの學徒)が團躰を結びて講學に從事したりとはおのづから其の趣を異にせり。

〔二〕 ピルローンの懷疑說は畢竟要するに吾人の知覺の一切關係的なることを以て其の根據となせりしが如し(是れ已にプロータゴラスの說に出でたるもの)。以爲へらく、吾人が事物を知覺するといふも眞實知覺する所は事物そのものゝ狀態にあらずして唯だ其の事物が其の場〳〵に吾人の對する關係に於いて吾人に現はるゝの樣のみ、故に凡べての場合に通じ凡べての人に普遍不易なる眞理といふが如きものあること能はず。吾人の感官といひ理性と云ひ共に個人の主觀の上に止まるものにして吾人は何事をも「然り」と斷言すること能はず、唯々吾人に「さか見ゆ」と云ひ得るのみ。故に吾人の正當に爲すべきことは凡べて判斷を止むること(ἐπέχειν)是れなり。凡ての世說といひ風儀といふものも畢竟するに世人が自ら造り設けたるもの(θέσει)本來自然に一定したる不變不易のものにあらず。如何なる斷定に對しても能く吾人は其の反對を主張することを得べしと。

〔三〕 ティーモンに從へは吾人が幸福なる生活を送らんには須らく三つの事を明かにすべし。一に事物が如何に成り立ち居るかを明にすること、二に、吾人がいかに其の物事に處せざるべからざるかを明かにすること、三に、之れに處して如何なる利益を得るかを明かにすること是れなり。然るに吾人は右に述べしが如く事物其物の成立を知ること能はされば凡ての判斷を事物に對して固執するは誤れり、故に事物を斷定して是と云ひ非といふは共に正當の根據を有するものに非ず故に事物に對して吾人の處すべき道は是非の判斷を止むるにあり。是非の判斷

を止むれば如何なる事柄の起こるとも吾人はそれに對して無頓着なることを得、換言すれば事物を善くも惡しくもなき即ち無記のもの（ἀδιάφορα）と見ることを得、是に於いて吾人の心は平靜にして外物の變遷に依りて攪擾せらるゝことなきに至るべく、此の心の平靜を得ることに於いて初めて吾人は眞正の幸福に達するを得べしと。かくの如く懷疑學派の旨とする所は理論上に於いてもまた實際上に於いても共に是非の判斷の止むるに在り。其の取る所はストア並びにエピクロス學派とは大に其の趣を異にすとはいふものから其の吾人が生活の目的として到達せんとする所に於いていかに相同じき所あるかを見るべし。此等の學說は凡べて當時の人心が、外界の變動に動かされずして各自安靜ならんことを求めたるに應ぜむとしたりしものなるを知るべし。

新アカデミー

〔四〕懷疑說が一大勢力として當時の學界に認めらるゝに至れるはアカデミーが中途に一轉して此說を主張するに至れりし後のことなり。アカデミーをして懷疑說に轉ぜしめたる人をアルケッラオス（西紀元前三百十一年に生まれ二百四十一年或は四十年に死す）とす。彼れは著書を遺さゞりしを以て吾人が其の說に就きて知り得る所甚だ不充分なり。彼れはストア學派を攻擊して其が確實なる知識を得べしと說けるを駁し、吾人の觀念の眞否を定むるの標準なしと論じたり。彼れに從へば吾人は感官を以ても又思考力を以ても事物を眞實に知識することを能はず、故に吾人の正當に取るべき道に判斷を止むるに在り。

哲學史家の中アルケッラオスの懷疑說を唱へたりし目的は陽には此說を唱へ而して之れを方便として眞實はプラトンの哲學を說かんとするに在り（云はゞ懷疑說は其が權說にしてプラトーンの哲學があくまでも其の實說なり）と解釋せるものもあれど此の解釋には充分の根據なし。惟ふに當時は學派の軋轢の盛なりし時代にして各〻旗幟を樹てゝ相降らず、プラトーン學徒が當時大に勢力を增し來たりしストア學派に向かつて駁擊を試みるやストア學の智識論の感覺說（プラトーンの說に反對せるもの）を懷疑的方面より打破することは其の最も取り易き道なりき。是に於いてか彼等は切りに知覺の關係的なることを主張したるの極、遂に彼等みつからプラトーン學の立場を離れて懷疑說を主張するに至れるものな

らんとおぼし。

〔五〕新アカデミーの懐疑説を擴張することに於いてアルケシラオスよりも更に力ありしはカルネアデースなり(西紀前二百十四年か三年にキレネに生れ百十九年にて死せり)。彼れは雅典府より他の學者と共に有名なる使者として羅馬に行きしとあり、其の學識と雄辯とを以て當時に鳴れり、著書を遺さず。哲學史家は通常アルケシラオスの指導によりて轉したるアカデミーを第二のアカデミーと名つけ後ちカルネアデース起こりてよりのを第三のアカデミーと名つく。或は第三のアカデミーを新アカデミーと名つけ、之れを古アカデミーとに對して第二のアカデミーを中アカデミーとも名つく。されどアルケシラオスの指導の下に在りしアカデミーも、其の後カルネアデースの下に在りしアカデミーも共に懐疑説を主張せしを以て二者を總稱して新アカデミーと名つけ、これをなほプラトーンの學説を維持したりし時代のもの即ち古アカデミーと相分かつの名稱とするかた頗しからざらん。

〔六〕カルネアデースも亦烈しくストア學派を攻撃し、其の力の多部分は此の攻撃に用ゐたりしが如く見ゆ。以爲へらくストア學派が以て眞理の究極の標準となす所の如きは畢竟するに個人の主觀的信念に憑るもの、決して遍通不變なる能はず。吾人の觀念は畢竟主觀上のもの、事物の實相、不易の眞理といふ如きものは到底吾人の知識し得る所にあらずと。

〔七〕然れどもカルネアデースは若し吾人が些かも思ひ設くる所なく、聊かも判別をなすことなくしては吾が行爲の起こる所以の解すべからざるとを認めたり。以爲へらく吾人の行ふにあたり、或る定まれる行爲に出づるは吾人に多少選擇する所ありて一觀念よりも他の觀念に重きを置くに起因すること勿論なれども、行爲を來たすものは明瞭なる觀念なることを必要とせず、吾人は必ずしも眞理を知れるがゆゑに之れに從ひて行ふにあらず、唯或は然らんと思ひ設くるほどのことあらば行爲に出つるに妨ぐる所なしと。こは已にアルケシラオスの論じ出でたる所なれどカルネアデースは更に詳しく或然の差等を定むることに論を運ばしたり。曰はく事物を見てそを或は然らんと思ふに數多の差等あれど之れを大別すれば三段に分くることを得べし。最下等なるは各觀念が獨立に唯そかあるら

しと思はるゝもの、次ぎなるは一の觀念が他の觀念の圍躰に屬しそれと矛盾することなくしてそれに容れらるゝもの、最高なる或然の度は一圍躰を成せる觀念の各〻が互に相保持し互に根據となるもの、是れなり。此くの如く事物の必然の相は知るべからざるも其の或然の度を看る時は吾人の行爲することに於いて敢て差支ふることなく、また吾人の實際爲し得る所はかばかりの事に過ぎず、而して或然の度に從ひて吾人の實際に行ふべき事柄に就いてカルネアデースの說きし所は古アカデミーの修身說と甚だしき差別なかりき。

カルネアデースの說には論理上精微なるふしなきにしもあらず、然れども其の說ける如き懷疑說の根據の上に如何にして或然の眞理を立て得るか、懷疑說の根據より正當に論じ來たらば能く或然の差等を定めて一が他よりも眞實らしといふ判斷さへも爲し得ざるに非ずやといふ疑問を揭け出だしこれを精考することを爲さゝりしが如し。

〔七〕アカデミーは後また懷疑說を離れて折衷的傾向を帶ひ來たり、而して件の傾向はラリッサ人フィローン(羅馬に於いてシセロの師となれることあり西紀前八十年頃に死にき)に至りて著るくなれり。而して更に明かにアカデミーを懷疑說より折衷說に移せしはフィローンを繼きしアンティオコスなり(西紀前六十八年に沒せり)。フィローン及びアンティオコス時代のアカデミーをば第四及び第五アカデミーとも名つく。

後の懷疑學徒

〔八〕アカデミーが懷疑說を離れたる後又懷疑說を主張したる人の中、アイネシデーモスを以て最も肝要なる者となす。彼れの流れを酌める者としてはアグリッパ、セクストス、エムピリコスの名を揭ぐべし。此等を稱して後の懷疑學徒といふ。此學徒は自ら其學脈を新アカデミーに受けず寧ろピルローンに引けりと唱へたれども其の新アカデミーの影響を受けたる所あるは蔽ふべからず。アイネシデーモス等の主張せる所は畢竟ピルローン等の已に唱へし所に異ならず。曰はく、吾人は事物の實相を知ること能はず、如何なる斷定に對しても同等の理由を以て其の正反對を主張することを得、吾人は一切知識を得ること能はざるが故に凡べての判斷を停止せざるべからず、無知を主張することをすらも止めざるべから

ず。斯く凡べての判斷を止め固執を離れ、自家の無知をさへも固執せざるに至り初めて心の安靜なるを得べし。然れども吾人が世に處して行爲を止むること能はざる時は唯世間從來の習慣と各人が其の時の感想欲望に從ひて行ふべしと。

アイチヲデーモス在世の時代は明かならざれども略ぼ西紀前一世紀の半ころの人と見て可ならん。所謂ピルローンの十句義(τρόποι)なるものは彼れの唱へ出でし所ならん。十句義は懷疑派が主唱の要點を十ケ條に云ひ現はせり、然れども其の分別と順序とはむしろ亂雜に失したり。其の主意とする所は畢竟するに吾人の感官を以て知覺する所は關係的のものなるか故に、吾人は事物の實相を知ること能はずといふに歸す。

アグリッパ(其の時代を明かにせず)はアイチヲデーモスの十句義を五句に約めたり。其の主意は三點に歸着す、一、人々の意見の相異なること、二、吾人の知覺の關係的なること、三論證の出來ざること、是れなり。論證の出來ざる所以を說いて曰はく論旨の前提を證するには尙ほそれが論據となすべき前提を要して遂に限りなく前提を要するか、將た其の斷案を以てそが前提となす所の循環の論となるか、將又證據せられざる前提を以て出立するかの外なければはなりと。尙ほ後には此の五句をも二句に約せる者あり、曰はく、若し確實なる知識あらばそは直接に確實なるか將た間接に確實なるかの一なるへし然るに吾人の觀念は凡べて關係的なるが故に直接に知識の確實なることを知るべからず、また第二の間接に確實なる知識は直接に確實なる知識を前提とせざるべからざるが故に是れ亦遂に成立することは能はずと。

セクストス、エムピリコス(西紀後二百年頃の人)は病理上疾病の原因を論ずることは能はずとし唯治療上の經驗にのみ依賴せざるべからずと唱ふる一派の醫家なり。彼れ亦獨斷的哲學者を駁擊するの書を遺しき。懷疑說は當時此等の經驗派と稱せらるゝ醫家の間に行はれたりきと考へらる、而して因果といふ觀念に批評を試みて其が困難の點を指摘することも多少彼等の成したる所ならんと考へらる。

折衷說

〔九〕右述ぶる懷疑的傾向の外に紀元前第一世紀頃には折衷的傾向の頭を擡げ來たれるあり。プラトーン、アリストテレース、ストア、エピクロスの四大學派か各〻其

中心を雅典府に(一はアカデミアに、一はリカイオンに、一はストアに、一はエピクロスの庭園に)有して紀元前三世紀及び二世紀頃には烈しく軌轢したりしが其結果として他と相調和するの傾向を生じ來たれるは自然なり。ストア派に在りてはパナイティオス及びポシドニオスに於いて此の折衷的傾向を生じてプラートン學派及殊にアリストテレース學派の説を加味するに至れるとは上に述べし所なり。ペリパテーティク學派に於いても亦ストア學派の萬有神説と調和せんとする傾向を生ぜるを見る。たゞ此の如き折衷的傾向に緣なかりしはエピクロス學派なり。又その傾向の最も盛なりしはプラートン學派なり。フィローン及びアンティオコス出でゝ新アカデミーの懐疑説より離れて折衷説に移れるは已に説けるが如し。アンティオコスの如きはプラトーン哲學とアリストテレース哲學とは畢竟同一の主意を異なる言ひ方に表はしたるものに外ならずとまで唱ふるに至りき。

〔一〇〕 希臘學術の初めて羅馬に入りたる當時に於ては守舊家は之れを見て羅馬の國風を紊るものと爲し、西紀前百六十一年には當時の有司が哲學者及び修辭家を羅馬より放逐するの議を決したりし程なりしが希臘學術浸入の大勢は遂に支ふること能はず、後には却て羅馬青年の教育を全うせんには希臘學術の中心なる雅典、ロードス、若しくはアレキサンドリアに行きて學ぶことを必要とするまでに至れり。然れとも羅馬の學者は概ね希臘學派の理論上の差別に重を置くことをせず何れの學派に拘らず唯最も容易の常識を以て了解し易くまた實際の行爲に適するものを選べり。故に羅馬學者の大躰の傾向は實際的なると共に折衷的にして學理上に於いては概ね希臘人の糟粕を嘗むるに過ぎざりき。羅馬のストア學も亦學理に於いて希臘往時ストア學説の如くに圭角あるものにはあらざりき。

羅馬の折衷學者の中最も傑出したるはシセロ(紀元前百〇六年——四十三年)なり。彼れの著述により吾人は古代の哲學に關して知識を得ること少なからず。希臘の哲學思想を拉丁語に移したるの功績は最ともシセロに在りと云はざるべからず。彼れの友ヴルロ(紀元前百十六年——二十七年)も亦折衷學者の一人として見らるべき者なり。クインティウス、セクスティウス父子の一派も亦此の部類に屬するものと見るべきならん。

第四期　宗教時代

第二十章　新プラトーン學派の先驅

〔一〕アリストテレス以後の希臘哲學の前期に倫理の研究を主眼として此の世に於いて吾人が各〻道德を修むることによりて安心立命の地を得べしと考へたりしが、前にも云へる如く各自が外界を離れ獨立して我が心中に閉ち籠もり己れを顧みて安心の地を求めんとするにつれて古代の希臘思想の特質たりし優美なる精神上の調和を失ふに至りき。蓋し心身の諸能を優美に發達せしむることは希臘人の理想にしてまた彼等はそを實行し得べしと信じ其の中に和解し難き爭ひの存することを感ぜざりき。然るに各自次第に深く我が精神的生活を顧るに至りて益〻其の理想とする所と現實の狀態との分離を自覺し、我れ自らの中に相反するもの即靈肉の爭ひあるを感ずるに至りぬ。換言すれば自心の中に一方には理想の高きに向かひて上らんとするものあり一方には己れの卑きを束縛するものあるを自覺してこゝに稚き優美なる調和は破れたり。蓋し希臘固有の思想は概ねうぶなる調和を維持せりしが、たゞ其の思想の偉大なる發表者の中、後の宗教的感

想を豫想せる所あるはプラートンの哲學也。是れプラトーンが希臘人にして希臘人を超越せる所ありと云はるゝ所以也。プラトーンは其の哲學に於て吾人に吾形骸の束縛を脱して高く理想境に上らんとする心のあるとを云ひ現せり。倫理時代より宗教時代に移りてはます〳〵外物の頼むに足らざることを覺りて深く各人内部の精神的生活を顧るに至り我が實行の理想に合し難きを自覺し來たり、形骸の束縛に起因する物欲劣情を脱して純粹なる心靈的生活に入らんと力むるのこゝろ盛なるに至りぬ。是に至りては倫理時代の立場なる世間的道德を修めて安心立命し得べしとなしたるとは異なり頗る出世間的趣味を帶び來たれり。是れ希臘の哲學思想が所謂宗教時代に入れるなり。件の宗教的傾向益〻進むに從ひて個人が自力を以て我が形骸の束縛を脱し難きを感じ、遂に人間以上の冥助を必要とするに至りぬ。是れ先きにストア學派の變遷を敘したる所に述べしが如し、ストア學派その者が其の末期に至りては件の宗教的時代に入れる也。

〔二〕アリストテレース以後の哲學の後期と前期との區別はプラトーンの哲學に對する關係を以ても見るとを得、元來アリストテレース以後の哲學の一特色は

在來の哲學思想の再現せることに存すれども、前期に於いて再起したるは主として物界研究時代及びソフィスト時代の思想にしてプラトーンの形而上論に對しては寧ろ反對の傾向を取れりき。之れと異なりて後期に復興して當代の思想の骨子を成せるはプラトーンの哲學なり。是れ前節にも云へる如くプラトーン學が此の時代の思想の根柢を成すに最も適當したればなり。

プラトーンの哲學が當時の哲學の骨子を成せりしが、其の宗教的思想の向かふ所は遙かにプラトーン以外に出でたり。プラトーンに在りてはなほ吾人の理性が吾が生活全躰を支配して吾人に滿足を與へ得るを確信したれど、此の時代に至りては個人の自力にかほどの信仰を措くと能はずなりしのみならず、吾人の達すべき最高の狀態は意識を超絶せる所に在りとし一旦豁然として吾人の通常の意識作用以上の狀態に入ることによりて吾人の望むべき極致に達するを得と考へたり。意識以上に之れを超絶したる狀態ありとしそを求むることはプラトーンの哲學を始め他の在來の希臘固有の思想には見るを得ざりし所なり。

是に於いて當時の哲學は神秘的となり宗教的となりしことに於いて大に印度の半は宗教半は哲學といふべき思想と相類似するに至れり。啻に之れと類似せるのみならず、當時に在りて相互の影響の存せし事實は否まれざるべし。蓋しアレクサンドルの遠征以後印度との通交は其の思想の西方に流入することを致せしなちん。

此の宗教的哲學の問題を一言に云ひ表はせば、吾人が墮落して形骸に繫がれ居る狀態を脱して吾人の本源なる絶對者に歸ることに於いて全き安心を得んとするに在りき。是れ即ち不善不美、不完全なる狀態より吾人の救はれ出でんことを求むる救濟の問題なり。

〔三〕 此宗教時代の思想は西紀前第一世紀頃に始まりきと見て可ならん。羅馬帝國が諸種の人民を其の統治の下に集めたると共に諸種の風俗習慣入り亂れ、從ひて諸種の宗教相觸れ相交り宗教上の新現象を誘起し來たれり。時代の精神は一般の人民をして靡然として宗教に傾かしめたり。新宗教として後に大勢力を振ひ遂に羅馬の社會をおほふに至りし基督教も當時の勃々として抑へ難き宗教的精神より生まれ出でたるものに外ならず。當時諸種の宗教のみならず東西諸

種の思想の市場ともいふべきは埃及なるアレクサンドリヤなりき。後期の哲學思想は此處を中心とせり。

かくの如く東西の思想が入り亂れて其の中に發生したる宗教時代の新産物は分かちて二類となすを得。一は希臘哲學思想が東方の宗教思想に近つきたるものにして、其の最好代表者は新ピタゴラス學徒及ひ宗教的プラトーン學徒と稱せらるゝものなり。一は東方の、殊に猶太の宗教思想に希臘思想を加味したるものなり。希臘思想といふ中にも哲學的方面ならずして寧ろピラゴタス盟社などに存せる禮拜及ひそれに附隨せる觀念と猶太教との結合より生じたるものにはエッサイ宗の如きあり。哲學史上吾人の注意すべき價値あるは希臘の哲學思想(主としてプラトーンの哲學)を取りて猶太の宗教思想に神學的組織を與へんと試みたるものにして、其の最大なる代表者はフィローンなり。以上列擧せるものを總括して後に出現する宗教時代の哲學上の最大産物なる新プラトーン學派の前驅と名つけて可ならん。

それらプラトーン學派の先驅の中に就き先づ希臘の哲學思想を基として東方の宗教思想に近よれるものより叙述せん。

新ピタゴラス學徒

〔四〕 嚮に古アカデミーを叙せる條下にプラトーン學派とピタゴラス學派とは大に相近つきて遂に相混ずるほどに至れるとを云へり。ピタゴラス學派が哲學上の學派として何時頃迄繼續せしかは明かに知り難けれども其の禮拜(宗教的方面)は恐らくは其の一學派として消滅せし後にも繼續したりしならん。今宗教時代に於いて先つ大に復興せるはピタゴラス盟社に在りし禮拜なり。當時いたくピタゴラスを尊崇して其の教を傳唱すと稱へたる人々を哲學史家は名つけて新ピタゴラス學徒といふ。彼等は畢竟當時の宗教的要求よりしてピタゴラスといふ古代の一宗教的人物を以て其の本尊としたりしもの、實は往時のピタゴラス學徒とは大に其の面目を異にしたり。彼等はピタゴラスの名を假りて種々の著作を爲せり、後世傳ふる所のピタゴラス學派の書籍は概ね此の新ピタゴラス學徒の手に成れるものなり。

哲學上より云へば彼等の思想は昔のピタゴラス學派の說とプラトーン學派の思

想とを混合せるが如きものにして、また其の外にストア學派及びペリパテーティク學派より取れる所あり。故に哲學上より云へば彼等には明瞭に形成せられたる說あるにあらず寧ろ折衷的なりきといふべし。此等の學徒の中其の名を擧ぐべきはモデラートス、ティアナ人アポルロニオス、及び其の後にはニコマコス等なり。中に就き最も有名なるはアポルロニオスなり、彼れは西曆紀元第一世紀の半頃の人にて當時の宗敎家として多くの人の尊敬を得、奇跡を行ふの能ありとまで信せられたりき。此くの如き宗敎的人物は當時(即ち後の大宗敎となれる基督敎の開祖イエス、キリストの起これる時)には珍らしからさりし也。

〔五〕 此等の新ピタゴラス學徒の說は判然一定せりと云ふこと能はざれども、概ね往時のピタゴラス學派の數論に於ける語を用ひて一と二とを萬物の本元と見而して一をペリパテーティク學派の所謂相となし二を其の所謂素となしたり。而して又彼等の或者は一を神と見或者は神を以て一と二との對峙以上のもの即ち其の對峙の出つる根元と見たり。かくの如き思想の差別はあれども概して彼等の說には神と之れに對する物質との二元の論を見ることを得べし。彼等はまた概ねピタゴラス學徒の所謂數とプラトーン學徒の所謂イデアとを同一視し、而して數を以て頗る秘密的なるもの、妙力を具ふるものと見たり。彼等の說に於ける特殊の點として哲學上注意すべきはプラトーン學派の所謂イデア即ち萬物の模範となるものを神の有する觀念と見たることとなり。プラトーンはイデアを其の物を以て實體としたりしが新ピタゴラス學徒はイデアを神の心に存する觀念となし、神は其の觀念を模範として萬物を造れりと唱へたり。是に至りては彼等は明かに神を靈なるもの精神的のものと見たるなり。而してかくの如く神を心靈と視るに至れるはアリストテレースが神學の結果なりといふも不可なからん。彼等又以爲らく神と人との間に多くの鬼神あり又星には其れに住する神々ありと。

〔六〕 彼等の說に於いて最も注意すべきは哲理よりも寧ろ實際的宗敎思想に在り彼等は神を純なる靈と見て高尙なる一神敎を主張せんとせり。彼等は以爲へらく吾人は神を敬せざる可らず、而して神を敬する所以は淸淨なる生活を送るに在りと。彼等の人生を觀るやまた其の根據を二元論に置けり、即ち靈と肉とを相對せしめ、靈が肉によりて縛られ汚さるゝが罪惡の原因なりと考へたり。彼等は

靈肉の爭ひを自覺するに至れるなり。彼等は清き生活を以て專ら肉に屬するものを去るに在りとし、肉食、妻帶、飲酒及び誓言等を禁じまた個人の私產を有することをも排斥せり。彼等にかくの如き修行を爲し凡べて吾人の肉に屬するものを抑壓して純潔なる靈の生活を送るを以て吾人の當さに力むべき所なりと見たれどまた之れを爲すには唯個人の自力にのみ依賴せず禮拜によりて神明の冥助を請ふを要すとし特別なる神明の啓示がピタゴラス又アポルロニオスの如き人に於いて人間に傳へらるると考へたり。彼等は近く神明に接することによりて奇跡を行ひ豫言を爲すの力をも得べしと云へり。要するに彼等に於いて哲學の要義は宗教と化し、哲學者は寧ろ祭司と化したるなり。

宗教的プラトーン學徒

〔七〕上に名つけて新ピタゴラス學徒といへるものは別に判然たる一學派を成せるに非ず寧ろ相似通ひたる思想を有せるもの〻彼處此處に呼應したりしをば後の史家が假りに總稱してしかは名づけしなり。されは新ピタゴラス學徒と稱すべきもの〻堺限は決して明かなるにあらず、彼等に類似せるもの他に尙ほ多し。こゝに宗教的プラトーン學徒と名つくるものも亦大に之れに類似せるものにして彼此の間に判然たる區畫を立て難し。此等のプラトーン學徒中には上の新ピタゴラス學徒がプラトーン學派に感染したりし如くピタゴラス學派に影響されたる者多し。

宗教的プラトーン學徒の中最も肝要なるは有名なる史家プルタルコス(紀元後第一世紀の人)なり。彼れはストア學派の唯物論に反對し、またエピクロス學派の無神論に反對して神の靈なることを主張するに力めたり。彼れはまた神に對して物質なるものを措き而して神が物質を取りて世界を造れりと考へたり。以爲へらく物質には本來惡しき靈の宿り居れるかゆゑに造化の作用を受くるも尙ほ全く善ならず、して常に醜惡なるもの〻此の世に存するの原因たりと。即ちプルタルコスは明かに宗教的哲學の思想に於いて二元論の立場を取れるなり。また彼れは神を以て世界の外に在るものと考へたるが故に神と世界との間に媒介を爲すものとして鬼神を置けり。また以爲へらく諸種の人民が諸種の異なる神を崇拜するも實は異なる名稱を以て同一の神を呼ふに過きず。吾人

は甚だ孱弱にして自力のみによりて目的を達すること能はざるが故に神の直接の啓示と冥助とに依らざるべからずと。

上に云へる如き鬼神の説を取り用ゐて多神教を立て以て當時漸々勢力を得んとせる基督教の烈しき反對者となりしケルソスも亦右掲くる部類の一人に數へらるべし。

フィローンの哲學

〔八〕 前條に述へたるは希臘哲學思想の東方の宗教思想に近よれるものゝ代表者なるが、猶太の宗教思想に希臘哲學を混和したるアレクサンドリア府のフィローンの哲學は新プラトーン學派の前驅として最も注目すべきもの也。フィローン(紀元前三十年頃より紀元後五十年頃に至る)は猶太人にして當時猶太の宗教思想とプラトーンの哲學を始めとしアリストテレース學派及びストア學派等の希臘哲學思想とが相混じつゝありしアレクサンドリアに生れたり。

フィローンが哲學の根本又中心は神といふ觀念なり。以爲へらく神は凡べて限りある者と超絶す、故に吾人の想ひ設くる所は以て能く神の何たるかを現はすに足らず、彼れの圓滿なることを現はすべき名なし、彼れは凡べての完全なるものよりも更に完全なるものなり、彼れは名つくべからざるものなり、吾人は唯彼れを有(ὄν)と云ひ得るのみ、吾人は彼れの何たるを形容すること能はず。フィローンは猶太教に謂ふ語を用ゐて神は則ちエホバなりといへり。此くの如く神は凡べてのものを超絶せる絶對者なるかまた之れと共に萬物の淵源なり、萬物は皆神より出でたり。斯くフィローンが哲學の根本には神を超絶的のものと見ると超絶的の神を萬物の淵源と見るとの二つの思想相結合せり。然らば萬物を超絶せる神が如何にして能く萬物の淵源となり得べき乎。フィローンは之れを説かんが爲めに神と萬物との中間に在りて媒介を爲すものをおけり。

〔九〕 フィロンは此の媒介者を名つけて勢力(δυνάμεις)といへり。此等の勢力が神に對する關係に就きては彼れの説く所明瞭ならざれども要するに其の思想はストア學派の説及びプラトーンのイデア論に由來せり。彼れは此等の勢力を名つけて神の觀念則ちイデアとも云ひまた神の僕(λόγος)(是れ猶太教に謂ふ天使てふ觀念を持來たれるもの)とも云へり、而して此等の勢力の全躰を自己の中に統一するもの

をロゴスとす(ストア學派のロゴス論を思ひ合はせよ)而してこのロゴス是れ即ち神と世界との媒介を爲すものなり。フィローンはロゴスを名つけて神の代表者神の使者、神の智慧、造化の機關、世界の模範、神の第一子又は第二の神ともいへり。神は世界を超越せる者なれども、彼れを現はすロゴスを通ほして萬物は造化せらるるなり。されど此のロゴスの心あり意識あるものなるか否かに就きてはフィローンの説く所明瞭ならず。

此のロゴス(即ち神と世界との間に介するもの〻)論はフィローンの説に於いて最も注目すべきものにして、其の宗教時代の問題の解釋を試みんとしたるものなることは尚以下此の時代の思想を叙し行くに從ひて明かになるべし。

〔一〇〕かくの如く神は吾人の言説を絶せるものなれどもロゴスを通ほして萬物に現はる。されどフィローンは此の醜惡なるもの〻の存する世界の由來を説かんには神力に對して尚ほ他のものを説くの必要を感じ、而して彼れはこれを物質と名つけたり。おもへらく神はロゴスにより此の混沌たる物質を取りて世界を造れり。世界は造られし始めあれども滅するの終なし。而して件の物質は凡べて世に存する不善不美なるもの〻淵源なりと。知るべしフィローンも亦神明對物質の二元論に其の立場を置けるものなるを。

〔一一〕人間の靈魂は墮落して肉躰の中に宿れるもの、肉躰は云はゞ靈魂の墓なり。此の肉身を愛するが爲めに吾人に罪惡あり、吾人は肉と共に罪惡の傾向を生得せるなり。故に吾人は肉に屬するものを脱離し情慾を斷ちて純潔なる靈魂の生活を送らざるべからず、須らく物欲に動かされざる狀態に住すべし(ストア學徒の所謂アパタイアを思ひ合はせよ)。かくの如く物欲の羈絆を脱して清淨なる生活を送らんは吾人の獨力もて爲し難き所なれば神明の助力を仰がざるべからず。信神の心は智恵を來たし智恵は德を來たす。

〔一二〕フィローンの道德をいふや其の着眼の點は吾人の社會的行爲にあらず寧ろ出世間的方面にあり。換言すれば彼れは德行を人倫の關係に於いて見るよりも、寧ろ宗教的瞑想の方面に於いてしたり。吾人の精神の最も高等なる狀態は形骸を忘れて直に神明に接したる所に在り。此の狀態は歩を進ひて探り行く推理によらず頓悟によりて得らるべきものなり。これは直接に神明の光に照らさる

る時に於いて吾人の達し得べき狀態也。フィローンは此の狀態をエクスタシス(ἔκστασις)と名つけたり。此の狀態に於いて吾人は意識的思想作用の上に出でゝ神明と契合す。アリストテレースが希臘思想の立場にありて吾人の精神上の究竟樂と見たる理智を以て靜に眞理を觀ずるの狀態はフィローンに在りては宗教的瞑想に進み入りて心身を忘脱するのエクスタシスとなれり。

第二十一章　新プラトーン學派

〔一〕宗教時代に於ける希臘哲學の最も大なる代表者は新プラトーン學派なり。此の學派に於いて希臘哲學思想は其の最後の組織を試みたるなり。新プラトーン學派の主旨とする所は大躰上希臘思想の立場に在りて一の宗教的哲學を形づくらんとするに在り。而して此の學派の哲學は宗教的なると共に神秘的の方面を具へ、此の點に於いていたく印度の思想に似たるのみならず、また實際印度思想の流入し混和せる所ありきと考へらる。元來希臘哲學の起原は寧ろ通俗の宗教と分離することにありき、其の後學術の發達し又全躰の文化の進歩するにつれて宗教はます〳〵其の勢力を教育ある社會に失ふに至りき。こゝに叙述せんとする新プラトーン學派は即ち學者の宗教を組織して件の欠乏を充たさんとせるもの、換言すれば哲學を以て宗教を造らんとせるものなり。蓋し當時思想界の大勢の赴く所昔時の宗教が啻に學者間に於いて勢力を失へりしのみならず、一般人民はた統一せる宗教を欠き、幾多の宗門が羅馬の天下に相輻湊し抵觸して遂に新宗教的現象をも催起し來たりき。新プラトーン學派は啻に學者の宗教のみならず更に進みて一般の人民の宗教を組織せんと欲するに至れり。而して其の取る所は在來の古き宗教の遺物なりしかは、おのづから當時の新宗教として勢力を得つつありし基督教の正面の敵となりき。

プロティーノス

〔二〕新プラトーン學派は其の源をアムモニオス、サッカス(西紀後二百四十二年頃に死にき)となむ呼べる人に發しきと傳へらる。彼れはアレクサンドリアに在りて身を勞働社會に起こし後にプラトーン學派風の教説を唱ふるに至りきといふ。然れども彼れが如何なる教を説き、また如何なる點に於いて新プラトーン學派の祖と云はるべきかは詳ならず。哲學史上彼れは殆ど唯一の名として記憶

さるゝのみ。歴史上正當に新プラトーン學派の祖と云はるべき者は寧ろ曾てアムモニオス、サッカスの教を受けたりきと傳へらるゝプロティーノスなり。プロティーノスは紀元二百四(或は五)年に埃及のリコポリスに生まれ、學術殊に宗教上の研究を爲さんが爲めに東方に漫遊せることあり、後に羅馬に來たりて子弟を集め教授を始めたり。二百六十九(或は七十)年に逝けり。羅馬帝の贊助を得てカムパニアに哲學者の市府を建て之れをプラトノポリスと名つけ哲學者をして茲に沈思冥想の場所を得しめんと企てたれど實行せられずして止みき。プロティーノスの著作は其の弟子ポルフィリオス編輯して之れを後世に傳へたり。プロティーノスはいたくプラトーンを尊敬し自ら其の教義を祖述すと云ひしが實に彼れが哲學の骨子を成せるはプラトーンの思想なりき。是れ此の學派の新プラトーン學派と稱せらるゝ所以なり。プロティーノスはアリストテレース以後の最も大なる思想家にしてまた希臘哲學の最後の偉人なり。

〔三〕 プロティーノスの根本思想は、已にフィローンの哲學にも見えたる如く、媒介者を說くことによりて二元論の困難を救はんとするに至りき。プラトーンもアリストテレースも遂に二元論の立場を脱することゝ能はざりしは曾ても述べしが如し。而して該の二元論に新ピタゴラス學派等の所說にも神明對物質といふ形を取りて傳はれり。プロティーノス以爲へらく萬物の大源より漸々不完全なるもの發出し、其の極端に於いては遂に最も不完全なるもの即ち消極的(絶對の大原に對して消極的)のものとなり了る、是れ即ち物界なり、現象の世界なりと。即ちプロティーノスは發出論を以て二元論の困難を除かんとせる者なり。

〔四〕 萬物の大原(τὸ πρῶτον)は限りなきもの、形なきもの、性質の定むべからざるもの、一言に云へばよろづの物を超絶せる唯一絶對の有(τὸ ἕν)なり、凡べての對峙と差別とを絶せるものなり。故に吾人は物躰又は精神上の性質を附與して之れを形容することを得ず、思想ともいふべからず、意志若しくは活動とも名つくべからず、思想(νόησις)と存在(οὐσία)との對峙、主觀と客觀との對峙を絶せるものなり、故にまた自意識とも名つくべからず、一言にいへば凡べての差別を超絶したる宇宙の根原また究極にして能く萬物の發出する本となるもの、即ち宇宙の原力(πρώτη δύναμις)なり。而してプロティーノスは之れを神と名つけたりプロティーノスの思想に

於いて最も注意すべき所は神を以て萬物を超絶せるものとすると共にまた能く萬物の根原となるものと見たりし所に在り。

〔五〕 神は萬物の大原なり。されど世界萬物は神の意志の力によりて創造せられたるにあらず、また神自らが分離せるにもあらず、また其の一部分が變化したるにもあらず。神は常に一にして變せず、圓滿にして增減する所なし。萬物は皆神より出づれど神は是れが爲めに其の一部分を失ふに非ず。プロティーノスの萬物が神より出づる關係を說くや多くは譬喩を用ゐたり、曰はく一切の物が自然に神の圓滿なる所より溢れ出づるは譬へは光線の太陽より發出するがごとし、神は自ら勞する所思ふ所變化する所なくして萬物はおのづから其の中より流れ出づと。プロティーノスの哲學は即ち發出論なり。

〔六〕 萬物の神より發出するや大凡三段をなす。第一に出づるものはヌウス(νοῦς)なり。ヌウスは萬物の大原(即ち神)より下ること一等なれども、なほ大原の影像にして常に完了せる直觀的思想なり而して其の思想の對境となるものは一は其れ自らにして、一は其の發出し來たりたる大原なり、但し其が大原の直覺は全たく大原　相應せるにあらず。故にヌウスに至りては已に思想の働き(νόησις)と思想の對象(τὸ νοητόν)との對峙を含み差別の根原を具へ居れるなり。次ぎに出で來たるものを精神(ψυχή)とす。プロティーノスは精神に高き方と低き方とを分てり。高き精神は自覺を具へ、凡べての永恒なる理想を有して活働するもの低き精神は形躰に結ばれるもの也。プロティーノスは宇宙全躰を通貫する大精神ありと見、プラトーンの語を用ゐて之れを、世界の「靈」と名つけたり。而して此の世界の靈の低き方面即ち形躰に結はれる方を自然(φύσις)と名つく。宇宙を通貫する精神を根原となせる個々の精神にも亦高き方と低き方とあり人間に於ひて高き方は形躰に結ばれざる靈(アリストテレースの所謂原動的ヌウス)なり。件の靈は永遠不朽にして已に吾人の生前に存し死後にもなほ存在す。人間に於ける低き精神は身躰に結ばれて之れを活動せしむる生氣なり。此の精神界に至るまでは尙ほ形而上のものなり。更に下れば物界、是れ即ち萬物の最も低き段階なり。プロティーノスは物質をもて消極的のものとし、有に對する非有(μὴ ὄν)と見、而して何處迄も一元說を維持せんとせり。以爲へらく物質が萬物の大原より出でゝ其の反對の極

となるは猶光が太陽より發出して其の薄らぎ行くの極み遂に暗黒に終るが如しと。かくしてプロティーノスはプラトーンに存在したる感官界と官感以上の世界との存在する所以を一元的に說かんとせり。

〔七〕凡べて世界に於ける不完全なることと惡しきことは皆物質より來たる、物質は一切の無常なるとの根源なり。物質は定まりたる象を具へざる存在の可能性に外ならず。

凡べて世に於ける善なることは皆理想界より來たる。世界の萬象をして形を取らしむる所以のものは精神の働きなり。世界の靈、及び之れより出でたる多くの星辰の中に住める神「自然」及び多くの鬼神等の働が有形のものに現るゝなり。かく根原に於いて一精神の然らしむる所なるが故に萬物は皆相感應す。天地萬物は一生氣を以て活けるものなり。プロテーノスが自然界の論は物理的ならず。其の主要の見地は萬物の本躰と意義とを以て精神界に存するものとするに在り。彼れは天地萬物が形躰をあらはすも要するに精神の現したるもの、理想の然らしむる所なりと見たりき。

〔八〕プロティーノスは物質を以て衆惡の根原となして、五官の世界を卑しめり、然れども彼れの有せる希臘人の眼は未だ物界を以て全く惡しきものと見るに至らず物質は非有にして理想の發現を妨ぐれども猶ほ理想の物質界に現はるゝによりて天地万象は美麗なり。美を以て理想の感官界に現はれたるものと見たるプロティーノスの美學思想は彼れが哲學に於いて一種の光彩を放てるの點なり、また之れを以て希臘の美學思想の最も進歩したるものといふべし。宇宙に調和秩序の存するは是れ皆ロゴス (λόγος) の現はるゝによる現象界の美は物質を通はしてイデアの耀く光に譬ふべきなり。

〔九〕プロティーノスの道德論は吾人が物質界に繫がれ居る樣より解脫することに其の根本思想を置けり。即ち彼れの萬有論は世界が段階を爲して神より發出することを說き、其の道德論は吾人が再び物質世界の束縛を脫し溯りて神に合一することを說けり。プロティーノスに從へば社會的關係に於ける道德は寧ろ吾人をして理想的狀態に達せしむるの前階に外ならず。吾人が物界に束縛せらるゝ狀態を脫するの段階は、第一に五官の知覺、次きに倫理を以て事物の理を考ふること、

又美なるものを愛するの心、遂に美に發現する理想その者を求めて形骸の束縛を離るゝに至る是なり。吾人は須らく情慾を去り吾人の靈をして純粋の活働を現せしめざる可らず。解脱は衆德の根元なり、吾人は解脱しゆいて遂に我が靈の自らを直觀する所に達せさる可からず、而して是れ即ちヌウスの自觀を吾人に得たるものに外ならず、何となれは我れに於けるものはヌウスにして、我れに於ける眞實躰か自らを觀するなれはなり。吾人はヌウスの自觀を得るのみならず更に進みて遂に萬物の太原たる神に合して、神に充たされ、神の中に沒して自らを忘るゝに至らざるべからず。是れ意識を超越し言語を絶したる名つくべからざる境涯なり、之れをエクスタシスと名つく。かくの如き境涯に達し得るは修行を積める優れたる者ならざるべからず、而して優れたる者と雖ども唯時ありて件の狀態に入り得るのみ。プロティーノスは自らは其の生涯の中數度此の境涯に入りたりとぞ。エクスタシスの狀態に達するには宗教的禮拜の如きも亦多少其の助けを爲すとあるを否まざれどもプロティーノスは未だ多く其の如き禮拜の必要を說かず。但し彼れは通俗の宗教に反對せず寧ろ通俗の宗教的思想を譬喩と解して其の中に眞理を發見せんとしたれど未だ哲學者の自信を失はずして迷信に媚ぶることをなさゝりき。彼れは、神々は寧ろ我れに來たるべし我れより彼等に行くを要せずとまで云へり。

〔一〇〕 プロティーノスの弟子なるポルフィリオスに至りては其の思想は著るく通俗の宗教に接近し、種々の禮拜を必要とし、肉食、妻帶、觀劇等を禁じて成るべく肉躰の慾を捨つべしと敎へたり。而してかくの如く靈肉の爭を意識して肉慾と戰ふには益宗敎的禮拜によりて神助を仰くの必要を感じ來たれり。更に通俗の宗敎に接近し遂に多神敎を組織して之れを當時の宗敎と爲さんと試みたるはヤンブリコスなり。

ヤンブリコス

〔一一〕 彼れはポルフィリオスの弟子にしてシリヤに住めり紀元後三百三十年頃に沒しき。彼れに始まれる新プラトーン學派の傾向をシリヤ派と名つく。彼れは宇宙の太原即ち名つくべからざる太一と多なるものとの媒介をなさんが爲め其の間に第二の一なる者をおき、またプロティノスのヌウスをも二つに分かち、而し

て其の各〻が三つに分かれ、かくして更に分かれ〳〵て凡べての物と諸の神とを生ずと說けり。其の說は畢竟プロティーノスの發出論を更に複雜にせるのみなり。而して又彼れは當時通俗宗敎に說く諸の神を持ち來たりて件の發出の段階に附會したり。卽ち彼れは羅馬帝國に雜在したる種々なる古き宗敎より凡べての神々を取り來たりて之れを一大多神敎につくり上げんとせるなり。彼れはまた禮拜をも取り來たりて或は像を拜し或は呪詛を行ふべきことを說き、また世間道德の上に出世間の道德あることを說けり。

ヤンブリコスに始まれるシリヤ派の思想がユリアン帝の懷抱する所となりしや一時勢力を得て基督敎に對する强敵となれることあり。

〔一二〕 かくヤンブリコスに於いて益〻著明になり來たれる傾向の進み行くに從ひて哲學は寧ろ宗敎の婢僕なるが如き位置に立つに至り隨つて學說上見るべきものなきに至りしが、五世紀より六世紀へかけ雅典府の學校に於いて再びプラトーン及びアリストテレースを研究して希臘の哲學思想を綜合せんとする傾向を生じたり。此の傾向を起こすことに與かりて力ありしは雅典人プルタルコス及びシリアーノスなり、而してシリアーノスの弟子にして又其の繼續者なるプロクロス

は此の傾向の最も重要なる代表者なり。之れを新プラトーン學派の雅典派と名つく。雅典派は新プラトーン學派の最後のものなり。プロクロスは凡べての物の分かれ出づるに三段ありとし第一は自存(μονή)次きは出離(πρόοδος)次きは複歸(στροφή) 卽ち是れなりと說き萬物は凡べて此の三段を經つゝ常に三つに分かれ三つに分かれたるものゝ各〻が更に三段を經ることによりて三つに分かれ、かくの如くにして凡べてが分岐しまた分岐し行くことを說けり。プロクロスは一面論理上の形式を貫くことに長したりしと共にまた奔逸せる宗敎的感情と想像とを以て滿たされたり。故に彼れは數多の鬼神及び天使の存在を說き、所禱呪詛等の効力を說き又禁慾修行を稱揚せんとせり。

〔一三〕 雅典の學校に於いて一時は從來の希臘思想を新プラトーン學派の中に纏めんと企てしかども、畢竟するに希臘哲學の生氣は已に業に盡きて復た新思想の起こるべくも非ざりし也。五百二十九年にユスティニアン帝が命令を發して公

然雅典の學校を閉ぢ哲學者を放逐したる時は唯其れが表面上の滅亡にして、實際は已に其の以前に死せりし也。(雅典の學校の最後の首座を占めし學者をダマスキオスといふ)。茲に至りて希臘の哲學は滅びて基督敎の勝利に歸したり。換言すれば希臘哲學が其の本來の立場を離れ宗敎の地盤に立ち古宗敎の遺物を維持せんとして遂に當事の新勢力なる基督敎の爲めに其の處を奪はるゝに至れるなり。此の時は基督敎は已に公然羅馬帝國の採用する所となれりしなり。こゝに亟れは吾人は既に基督敎的世界觀によりて開かれたる新時代の中にあるなり。次ぎに此の新時代の經過を敍せんが爲めに更に溯りて基督敎會の起原より說き起こさん。

中世哲學史

第二十二章　敎父時代

〔一〕歐洲に在りて通常中世紀の哲學と稱するはスコラ哲學なり。スコラ哲學は基督敎會の敎理を基礎としたるものにして而して其の敎理は、其の敎會の歷史上敎父時代と名つくる時期に於いて略ぼ其の形を成したるものなるを以てスコラ哲學史に入るの前、其の準備として敎父時代の簡略なる歷史を敍述すべし。

〔二〕基督敎はもと猶太敎より起こり其の始めに當たりては些も學術又は哲學上の思想を混ずることなくして單純なる宗敎的感想によりて立ちしなり。其の根本觀念は猶太敎に謂ふ造物主なる獨一神を以て萬民の父と見、而して人間は凡へて兄弟にして神則ち天父に護らるゝものなりと見るにあり。人間は神に愛せらるゝ者なれは彼れを父として敬愛し又互に兄弟として相愛すべき筈なるに、罪惡の心を起こして天父を忘れたり、人間は須らく其の罪惡を悔いて天父に歸るべしといふ是れ即ち基督の說きたる敎の要旨なり。基督はまた當時猶太の祭司及

び學者等が儀式と傳說とに拘泥したるを打破し宗敎の要は外形にあらずして唯だ眞心を以て天父に事ふるに在りとし而して其の身を以て凡て罪ある者疲れたる者重きを負へる者の救濟に任し我れ即ち猶太國民の待望すべかりし救世主(メシヤ)なりと唱へたり。

元來基督の敎はかくの如く單純にして而して其の單純且つ新鮮なる所却ていたく時人の宗敎的渴望に應ずる所ありしなり。基督てふ人物を中心として一新宗敎的運動は創始せられ基督が當時に誤解せられて、遂に磔刑に處せられたる後種種の障碍に遭ひながらも其の敎は漸次四方に廣まるに至れり。而して其の始めに當たりては基督に親炙せる弟子等が其の親しく聽きたる敎を傳へて別に組織立ちたる敎理を造るの必要を感ぜざりしが其の敎の漸次諸方に廣まりて諸種の異敎と相觸るゝに從うて漸次に解釋すべき種々なる問題を生じ來たり、又此の新宗敎を信仰するものゝ奉ずべき宗旨の何たるかを明かに定むるの必要を感じ來たれり。是れ敎理組織の起こりし所以なり。

(三) 敎理組織は使徒パウロに於て已に其の芽萠を發せるを見る。パウロは重に猶太敎の思想を用ゐて基督敎の新敎義を形づくらんとしたりき。おもへらく人類の祖アダムが罪惡を犯したるによりて人類は罪を犯す者となれり是に於いて耶蘇基督此の世に降りて十字架上の苦痛を受け之れによりて人間の罪を贖ひ人間と天父との間に媒して人類を救ふと。是れ所謂パウロ神學の要旨なり。ヨハネ福音書の記者に於いても亦特殊の趣を帶びたる神學組織の發芽せるを見る。所謂ヨハネ神學の根本思想は已に希臘の哲學に現はれ又アレクサンドリヤのフィローンの哲學に於いて主要なるものとなれるロゴスてふ觀念を持ち來たりロゴスと基督とを同一躰ならしめ之れを以て神の子となすにあり。

第二世紀以降敎理の組織は次第に其の歩を進め來たりしか其の組織を立つるに用ゐたる思想は主として之れを希臘哲學に取れり。何れが基督敎會の正統なる敎理にして何れが不正統なるかの區別の標準は基督に親炙したる使徒等により て傳へられたる傳說にあり。然れども其の解釋は決して初より一定せるにあらず、而して主に希臘の思想を借り來たりて敎理的組織を與へ行く中に漸次に異端と正說とを分かちて基督敎會の正統なる敎義を定むるに至れるなり。件の敎理

組織の事業に與かりて力ある人々を教父(Patres Ecclesiae)と名つく。教父時代は教會の歴史に於いて二期に分かる。前期はニカイア會議(西紀元三百二十五年)に至るまでにて之れをニカイア會議以前の時代と名つく。此の時代に於いては基督教會内に種々の傾向現はれ(教義組織の根據は略〻此の時に成れりしかとも)異端と正説との區劃は未た確立せられさりき。ニカイア會議以後幾多の會議に於いて當時起こり來たりし教理上の問題を提出して遂に異端と正説とを決定するに至れり。ニカイア會議以後の時代はほゞ西紀後五世紀頃に至る者と見て可なるへし。但し哲學思想の上より見る時は教理組織の要旨は已にニカイア會議以前の時代に於いて定まれりと云ふことを得。

ニカイア會議以前の時代

〔四〕ニカイア會議以前に於ける基督教會に發したる教理上の傾向を分ちて三種となすことを得。一はグノスティック、一は護法家、一はアレクサンドリアの教校是れなり。グノスティック派の唱へし所は基督教の思想と東邦異教の思想と及希臘哲學風の思想との奇怪なる混和なり。而して其の中にも相異なる傾向ありて或は猶太思想に傾けるあり、パシライテース(百三十年頃の人)カルポクラテース(略ぼ同時代の人)ヴレンティノス(百六十年頃に死す)の如き猶太的傾向の重なるもの、此等をアレクサンドリアのグノスティック學徒といふ、或はシリア等東邦の異教に傾きたるものあり、サトルニオス(ハドリアン帝時代の人)の如き是れなり、其の他にも異なる流派あれとも先づ右等を最も主要なるものとなす。

〔五〕グノスティック宗徒にはかくの如く種々の流派あれと凡そ彼れ等に通じたる主要なる思想は宗教上の信仰(πίστις)をは唯信仰に止めすして更に進めて宗教上の智識(γνῶσις)となさんとするに在り。是れまさしく宗教上の信仰に智識的根據を與へて教理を組織せんとするの要求に出でたるもの、一言にして云へは宗教に哲學的根據を與へんとしたるものに外ならず。去かれともこゝに謂ふ智識即ちグノーシスは通常謂ふ智識に優りて神秘的に眞理を直觀するものなり。此のグノーシスを試ける所よりグノスティックといふ名稱は起これり。彼等は世界を觀るに只管宗教的眼孔を以てし此の世の成り行きを以て善と惡との常に相爭ふものとなし、而して世界歴史の中心を基督の救濟に置きたり。グノスティック宗徒

が歴史的に世界の成り行きを大觀して之れに通じたる永劫の眞意義を見出ださんとしたる點即ち歴史哲學風の思想を起こしたる點に於いて其の所説は在來の希臘哲學に存せざる新しき想を帶びたりと云ひ得べし。彼等はまた善と惡との爭に結び付けて神靈と物質との二元を説き、而して(神即ち萬物の太原)と世界との間に猶太教の謂ふ神即ち造物主(デミウルゴス)及び其の他幾多の鬼神をおけり。此の猶太教の神に與ふる位置に就きてはグノスティックの派を異にするに從ひて異なり。猶太風に傾けるグノスティックはそを万物の太原たる神とは區別すれど尙之れに與ふるに高き位置を以てし、非猶太的グノスティックは之れを物質を造れる者と見て恰も天地の太原に反對するものゝ如く考へたり。此等のグノスティックの所説は畢竟猶太教及び其の他の宗教思想を網羅し盡くして督基教理の中に收めんと試みたるものなり。

グノスティック宗徒は神靈と物質との二元を相對せしめしか、彼等の或者は更に細に吾人に於ける精神及び物躰の方面を分かちて三となせり。一は肉躰(σὰρξ)一は生氣(ψυχή)一は心靈(πνεῦμα)是れなり。グノスティック宗徒は此くの如く物質を卑しみたる所より此の世に降りたる基督は眞實の肉躰を具へたるにあらずして唯だ肉躰を具せるかの如く吾人に見えたるのみなりと唱へたり。斯くの如くグノスティック宗徒は凡べて物質を惡しきものと視またデミウルゴスと萬物の太原とを別かちたるのみならず其の太原より段階をなして世界の發出することを説けり、其の發出を説くの趣は其の流派によりて同一ならざれども凡そ或種類の發出説は彼等に通したるものなり。

プノスティック宗徒の中其の教説の組織の最も見るべきは次ぎに掲くるヴシライデース及ひ殊にヴレンティノスの所説なり。

〔六〕 彼れ等は舊約書の神を以てデミウルゴスとなし之れを吾人の名づくべからず、知り得べからざる天地の太原即ち神と區別せり。此の名づくべからず知るべからざる萬物の太原より永久の勢力二ッづゝ一對をなして發出す。此等の勢力をアイオーネス(αἰῶνες)と名つく。第一に出でたるはヌウスと眞理(ἀλήθεια)にして最後に出てたるは智慧(σοφία)なり。而して此のアイオーネスの全躰は神の圓滿の相(πλήρωμα)を發現せるものなり。

アイオーチスの最下に位する智慧が天地の太原に等しからんとするの忘念を起こし、之れが爲めに混沌たる物を生じたり。是れ即ち迷妄の始なり。此の智慧の迷妄によりて出でたる混沌たるものに秩序と形とを與へんが爲めヌウスと眞理とよりクリストス(基督)は出で來たれり。即ちクリストスはアイオーチス界の救濟者なり。

智慧が宇宙の太原に等しからんとする迷妄を起こせるによりてアイオーチス界より墮落せるアカモート(即ち件の迷妄に起これる意欲)の界をオグドアス(ὀγδοάς)と名つく。此のオグドアス界の救濟者として出で來たる者は救主イエスなり。救主イエスは神明圓滿の相を現ぜるアイオーチス全躰より生れ出でたるものにして彼れが救ふ所のオグドアス界はアイオーチス界と吾人の世界との中間に位するものなり。而して吾人人類の救濟者はマリヤの子イエスなり。彼れはデミウルゴスとアカモートとによりて形つくられ、吾人の世界に降りてアイオーチス界の秘密を人類に傳ふる者なり。此のアイオーチス界の秘密を知る是れ即ちグノスティックの謂はゆる智識なり。

かくの如く天地の太原より階段をなして勞力の發出することを說きたるグノスティックの發出論は後に希臘の哲學に於いて新プラトーン學派によりて更に哲學的表現を得たる思想なり。而して此等の思想は皆要するに墮落したる者と神聖なる太原との間に媒介を措きて彼れが是れに還るの道を說けるものに外ならず。基督敎會がイエス、クリストなる救主の媒介に依り人類が救はれて神に歸ることを得と唱ふるも亦た同一の根本思想に出でたるものなり。又グノスティックが種種の世界に種々の救主あることを說けるは頗る印度の宗敎思想に似かよへる點あるを認めらる。

〔七〕 グノスティックは基督敎會の思想より出立せりといふものから、實は大に基督敎會の信仰より離れたる所あるを以て彼等は早くより異端として攻擊せられたりき。此時に當たり一方は此等グノスティックに對し又猶太敎及び其の他の異敎徒に對して基督敎旨を維持し、一方に於いては羅馬の有司が基督敎徒を迫害したりしに對して基督敎の辯護に力めたるは即ち護法家なり。護法家の中茲に擧くべき肝要なる人物は殉敎者エスティノス(希臘人の血統を引きまた希臘風の敎育を

受けたる人、サマリアに生まれ百六十三(乃至六年羅馬にて死刑に處せらる)及マルクス、アウレリウス帝に上書したる雅典人アテナゴラス又羅馬人の中にてはミヌシウス、フェリックス等なりとす。就中最も吾人の注意を惹くべき者はユスティノスなり。彼れに從へば凡べての眞理は其の說かれたる時代の基督以前に在りとも皆之れを基督敎的と稱すべきなり。何となれば凡べての眞理は皆ロゴスの啓示する所にして、ロゴス即ち基督なればなり。人類は皆多少ロゴスの啓示を受くる所あり、古へに在りては希臘の哲學者ピタゴラス、ソークラテース、プラトーン等の如き皆一は直接にロゴスの啓示を受け又一は摩西及び其の他猶太の豫言者等の敎を知れるによりて眞理を得たる者なり。然れども此等の人々に傳はれるロゴスの啓示は全からず、其の完全に世に現はれたるは基督の敎に在り。基督敎は人類に現はれ來たりたる凡べての眞理を大成したるものなり。ロゴスに發現する、又ロゴスによりて世界を造れる神は世界を超越せるもの而して神より出でたる智慧是れ聖靈なり。ユスティノスは神に對して混沌たる物質を置き之れを以て本來存在せるものとし神は之れを用ゐて世界を造りぬと說けり、即ち其の根本思想の二元論なるを見るべし。蓋しユスティノスは明かに希臘哲學の思想を取りて之れを基督敎會の宗敎思想に混和せんとしたるものなり。

〔八〕イレナイオス(三百二年頃に死せり)及び其の弟子ヒッポリトス等亦た或は護法家の中に加へらる。但し彼等は重にグノスティックの攻擊に其の力を注きたり。テルトリアーノスの如きもまた或は護法家の中に加へらるゝが彼れは哲學的知識を以て宗敎を說かんとする者に反對せり。其の有名なる語に曰はく不條理なるが故に我信す(Credo, qnia absurdnm)と彼れはまた吾人が自然の意志及び思想は皆腐敗せり哲學は異端の母なりと考へたり。然れども彼れの思想は自ら希臘の哲學に得たる所あり。彼れは物躰と精神とを不離者と見るストア學派の論を取れりと考へらる。以爲へらく凡へて在るものは物躰なり神も靈魂もすへて物躰なりと。彼れはまたストア學徒の如く肉情に屬するものと道德とを相對せしめて禁欲主義の道德を主張せり。又アッシリア人タティアーノスの如きもいたく哲學に反對し凡べて希臘の文化を以て惡魔の所爲と考へたりき。

〔九〕上述せるグノスティックの如く基督敎會の精神を離れたる者あり、また基督敎

會の爲めに辯護を爲したる人々にも希臘哲學の思想を受け納れんとしたる人もあれは又之れに反對する人もありしが此の間に在りて最もよく基督教會の教理を組織したる者をアレクサンドリアなる教核の人即ちクレーメンス及び其の繼續者オリゲーノスなりとす。彼れ等は宗教に於ける信仰上の事柄を知識の上に言ひ表はさんとせり。故に此の點に於いてはグノスティックと同じけれとグノスティックが種々の他教より得たる想像を混入して正當なる基督教義とは云ふべからざるものを形づくれるとは異なりて此等アレクサンドリアの教父は力めて基督教會の宗教的意識より離れざらんとせり。而して其の意識を本として基督教會の教義を組織するには希臘哲學の思想に假り而して其の組織したる所は最もよく教會の宗教的實驗に適合せるものなりき。後の基督教會の神學は其の要點に於いて已にオリゲーノスの手に成れりと云ひて可なるべし。

クレーメンスは紀元後二百年頃の人なり。彼れはプラトーン風の思想にストア學派の思想を混和したるものを取り入れて基督教會の教理を形づくらんと企てき。而して彼れが業を繼續して後世の基督教會の爲めに神學の大組織を企圖せるはオリゲーノスなり(百八十五年に生まれ二百五十四年に死す)。彼れは其の學説の爲めに種々の迫害を蒙り遂にアレクサンドリア府より放逐せらるゝに至りき。オリゲーノスは基督教理の標準及び淵源を其の教會の所傳と聖書とに措けり。而も彼れは聖書の解釋に唯字面上の意義を説くものと其の中に籠もれる眞義を闡明する者とありとなし、聖書中歴史上の事實を平叙したる者を唯其の儘に見るは是れ表面上の意義の解釋にして其の眞意義を看破せんには其の中に含む心靈上の旨意に想ひ到らざるべからずとせり。以爲へらく神は純粋なる靈にして唯一なる者不變なる者、万物を超絶する者其の意志によりて世界を創造したる絶對的原因なり、神に對して無始より存在する物質なし物質其の物が神によりて造らる、而して彼れの造化作用は彼れと共に無始無終なる者なり。神は唯一にして不變なるを以て其の世界を造化するや自ら直接に個々物を造るに非ず、萬物は神の發現なるロゴスによりて造らる。ロゴスは其の本躰に於いて父なる神と同一なるものなれど父なる神より出でゝ之れに屬するものなり。即ち子なる神は現れたる神、父なる神は隱れたる神なり。而して聖靈が子なる神に對する關係は、

子なる神が父なる神に對するに同し。

凡そ神に造られたる靈なるものは皆自由なる意志を以て其の本性とす、而して彼等の中其の意志の自由を用ゐ誤りて神を離れたる者あり、是れ即ち罪惡の本源なり。彼等はかく罪惡を犯して墮落したれとも尚ほ神より享けたる神聖を全く失ひたるに非ざるを以て神明によりて再ひ罪を脱すべき能を具ふ。神明の啓示は人類の原始より今に至るまで存在し希臘の哲學者等にも之れを得たる者あれと其の完全に現はれたるは基督に在り。基督はロゴスの化身して人間となりて救世の目的を達せんとする者而して世界歴史の究極は凡べての人靈が救世主の媒介によりて遂に皆神に立ち歸るに在り。吾人の救濟せらるゝ順序は仰信に始まりて知識に至り終に神明に合一するの究竟地に達するなり。

之れを要するに神が萬物の絶對的原因なること、萬物の造られたるは神の意志の働きによること、人間か其の自由なる意志によりて罪惡を犯すに至れること、基督が世界の歴史に於いて吾人を導きて神に復歸せしむるものにして世界の歴史は無意味なるものにあらす善美なる究究地に向かひて進み行くものなること、吾人

は只管形骸を脱離するを要せず現世に於いて肉身に住しながら尚ほ基督教徒として清淨なる生活を送るを得といふこと等の基督教神學に於いて主要なる思想がオリゲーネスによりて明らかに形づくられたり。

ニカイア會議後の時代

〔一〇〕哲學上より見れば基督教理の根本思想は略ぼオリゲーネス等の手により て成立したりと云ふべきも教會の教義としては更に明瞭にするを要するの點少なからず。蓋し基督教會の教理の根柢は神が基督によりて人間を救ふといふことに在りて、此神、基督、人間てふ三者を中心として教義上更に決定すべき問題のあり、此の故を以てニカイア及び其以後の幾多の會議は開かれたり。それら問題は神性論、基督論及び人性論の三大中心に纏めらる。中に就き第一問題は三位一躰説によりて、第二問題は基督を神人と見ることによりて第三なる人性論は生來吾人は罪に染める者なれは自ら己れを救ふの力なく唯だ神の慈悲を以て救はるといふにより決定せられたり。初めなる二問題は基督教會中主として東方即ち希臘教會に於いて論ぜられ第三なる人性論は專ら拉甸教會に於いて定められ

たり。かくして基督教會の教理の定まれるのみならず教會其の物が信仰の對境となりて後遂に羅馬加特力教會の大組織を成すに至れり。

〔一一〕第一問題はニカイア會議に於いてアタナシオスが唱へたる父なる神と子なる神とは其の性相同じからざれど相等し(即ち差別はありながら尙其の神なることに於いては些も差等なし)といふ論に決定し、尙ほ後にコンスタンティノープルの會議に於いて聖靈をも之れに加へて遂に三位一躰說を形づくれり。第二問題はエフェソスの會議及びコンスタンティノープルの會議に於て基督は純然たる神にしてまた全き人なりといふ神人論に決したり。第三問題を取りて之れが解釋を試みたるは教父時代の最後の大思想家なるアウグスティーヌスなり、彼れは哲學史上また優に吾人の注意を惹くに價ひするものなり。

〔一二〕アウグスティーヌスは紀元三百五十四年ヌミィアのタガステに生まれ幼にして敬神の念厚き賢母モニカに養育せられしが青年の頃に及びて種々の迷路に入り當時行はれし諸種の宗旨及び哲學によりて安心立命の地を得んとし、マニカイ宗を奉し後ち新アカデミーの懐疑說を懐き次いで新プラトーン學派の說を取り、かくして幾多の思想を經過して遂に再び基督教の信仰に落ち着きたり。彼れは著作家としてもまた思想家としても一世に卓絕し其の所說には新時代の思想の種子となるべきものを包含せり。四百三十年に歿せり。

〔一三〕アウグスティーヌス以爲へらく人間は救濟を要する者なり、そは罪惡に陷れいばなり、然れども人間は罪惡に染み之に纏縛せられて意志の自由を失ひ今は罪惡を犯さゝるを得ざるの狀態に陷れる者なるを以て自ら救ふことを得ず。さりながら罪惡が眞に罪惡として罰せられんには自由なる意志によりて生じたるものならざる可からず。さらば何處に自由意志は存するか。曰はく意志の自由は原人にあり人類の祖なるアダムが意志の自由を以て罪惡を犯せるにより彼が子孫なる人類は悉皆罪惡を犯すべき性を享くることゝなれり(是れ謂ゆる原罪論なり)。然れども神は正義なると共に慈悲あるものなるが故に其の慈悲心を以て人間を救はんとす、誰人の救はるゝかは是れ全く彼れの定むる所にして人間自力の聊かも關し得る所にあらず、換言せば何人の救はるゝかは人間の自由に定むる能はざる所にして已に豫め神意によりて決定せられたるものなり(是れ謂ゆる豫

定論なり)。

アウグスティーヌス以爲へらく神は正義なるがゆゑに人間の罪を救はんには其の罪に對して賠償の成さるゝを要す、而して基督は人間の爲めに此の賠償を爲した る者なり。故に彼れの媒介に頼らずして救はるべきもの一人としてなし而して教會は基督の救濟の業を繼續するもの即ち彼れの代表者なり。故に地上に於いては教會以外に救濟の道なしと。是に於いてアウグスティーヌスは羅馬教會を盤石の安きに立て其の堅固なる組織によりて世界救濟の業を成就せんとの企圖を描けり。

〔一四〕アウグスティーヌスの思想には教會を中心としたるものと吾人が意識の實證を基礎としたるものとの兩面相纒綿せり。蓋し彼れは一方に於いて吾人は唯教會の規定する所を信ずるによりて救はるべしと考へたると共に又一方には人々直接に己が意識に實證する所を基礎として考へたり、即ち彼れが哲學思想には專ら此の吾人各自の意識に驗する實證を基とせる而して其の教會を中心として考へたるとは、おのづから其の趣を異にせる點あり。彼れは一切の證據の究極を吾人の意識に求め、而して意識に於て「我」の存在の確實なるとを知り、また之れより考へて神の存在することを知ると論せり。是れ即ち近世哲學の始めに於いてデカルトの説ける所を像想せるものなり。此の吾人が意識證明の根據として出立する思想は哲學の歴史に於いては新傾向を含めるものと云はざるべからず。

〔一五〕基督教理の組織はアウグスティーヌスに於いて一段落を告げたりと謂ふべし。而して其の教理を取りて更に之れを哲學的に組織せんとしたるもの是れ所謂スコラ哲學なり。然れどもアウグスティーヌス以後スコラ哲學の起れる迄には大凡そ四百年の間隙あり。是れ歐洲歴史に謂はゆる暗黒時代にして北方の蠻人が羅馬帝國を蹂躙したる後、久しき歳月の間文物其の影を隠したりし時なり。此の文物其の影を隠したりし暗黒時代に於いて野蠻人を教化し且つ希臘羅馬の古代文明の遺物を保存したるものは當時の教會なり。北方の蠻人は當時未だ希臘羅馬の文物を了解することを能はざりしが故に彼等は其の遺物の文學上のものと美術上のものとに論なく悉く之れを破壊して惜しむ所なかりしが此の時に方たりて彼等野蠻人を懐け得しもの唯當時の宗教的勢力ありしのみ。アウグスティ

ーマスの思想によりて基礎を堅大にしなる羅馬教會の大組織、其の大宗教的勢力にして始めて能く彼等蠻人を教化し遂に彼等をして希臘羅馬の文化を了解するに至らしめしなり。希臘羅馬の文化の遺物を傳へて彼等に手渡したるの功績は專ら教會に歸せざるべからず。一言にして云へば此の時に方たり古代の文藝は寺院に其の隱家を發見せるなり。中世紀に在りて文事は勿論産業の事に至るまで凡そ社會の事業に於いて指導者となりしものは羅馬教會の僧侶なり、彼等が當代の知識の倉庫なりしなり。

第二十三章　中世紀哲學總論

〔一〕基督教會の教理は教父時代に於ひて略〻其の形を成し而して教理を形づくらんが爲には主として希臘哲學を用ゐたりしが、哲學と宗教、道理と信仰との關係に就きては未だ明かに決定する所あらず、或は教義は哲學上より考へてまた道理にかなふ者なりとし、或は兩者の必ずしも一ならざるとを主張せるものあり。蓋し倘ほ宗教と哲學、信仰と道理とは唯相並びて存在し未だ其の間の關係の明瞭に定められざりし也。中世紀哲學は更に進みて宗教上の信仰をば哲學上道理あるものとして論ぜすとするものなり、別言すれば其の目的哲學上の究理と宗教上の信仰との一致することを示さんとするに在り。教父時代は之れを教理組織の時代といふべく、中世紀哲學は既に組織せられたる教理を受け繼ぎ道理に合ふものとして之れに哲學的組織を與へんとするものなり。此の事を成就せんとしたる人々是れ所謂スコラ學者而して件の目的を以て成れる當時の教學是れ所謂スコラ哲學なり。

上述せし如く歐洲の文物は一時暗黑時代の裡に沒したりしが、シャルマーニュ帝の頃

より或は朝廷に附屬し或は寺院に附屬したる學林を興こして學者を集め學問に從事せしめたり。當時學者はなべて教會の僧侶にして其の謂ふ學問は專ら教法を講ずるとにおけき而して其れらの學林は其の初め傳教師を養成するの目的を以て興こりしも。此等の學校即ちスコラ(Schola)に集まりて學を講じたりしの故を以て彼等にスコラ學者(Scholastici)といふ名稱あり、彼等は一言にいへば、教會の學者即ち教法師(Doctores Ecclesiae)なりき。

(二) スコラ學者の目的とせる所は教會の信仰の道理にかなへることを示さんとするに在りしが故に彼等の根據とせる假定は(一)宗教上の信仰に於いて吾人は已に確實不易なるものを有し居ること、而して(二)吾人の知識(或は理性或は理解力)は吾人が已に信仰として有するものゝ道理に合へることを示すに過ぎざるものなることと是れなり。故に彼等に從へは吾人は已に信仰として必要なるものを有し、而して吾人をしてそを理解せしむるが哲學の目的なり。故に理性は信仰に對して獨立の位置を有するものに非ず、唯だ信仰の爲にそが道理上の根據を示すに止まるものなり。是れスコラ哲學に於いては理性は信仰に對して婢僕の地位に

在りと云はるゝ所以なり。

然れども謂ふところ吾人か宗教上確實として有するものをば二樣に見ることを得、蓋し或は之れを(一)教會の教理として客觀的に定まれるもの、換言せば教會の傳說として存在するものとも見るを得へく或は之れを(二)各人の心底に宗教上直接に實驗する所のものとも見るを得べし。約言すれば此の二つのものは教會の制度、教理、信仰、傳說として存在するものと各人の主觀に直接に意識し實證するものとにして、是れさきにアウグスティーヌスに於いて相交錯して存在せりしものなり。前者を取りてその道理に合へることを示さんとしたるが是れ嚴密なる意味にいふスコラ哲學にして後者に立脚して專ら各人直接の宗教的經驗に基きて說を立てんとせるものは神秘家なり。蓋し中世紀哲學に於いては嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に神秘家の流れの存在するを認む。中に就きスコラ哲學こそ中世紀思想の主要の部分を成すものなれば、一言に之れを中世紀哲學と稱することあり。

今云へる如く嚴密なる意味に謂ふスコラ哲學の傍に神秘者流の在りし外に尙多

少自然科學めきたる研究に心を用ゐたりし學者もありしが此れは他の流派に比しては極めて微少なるものなりき。併しなから後ちスコラ哲學の衰微し破壞するに至り却つて大に其の頭を擡げ來たり因りて以て學問界の面目を一新するに至れるものは後に述べんとする所を以て知らるゝ如く實に自然界の科學的研究なりき。

〔三〕斯くスコラ哲學の目的は信仰と道理との一致を示さんとするに在るを以て宗教上の信仰が道理に合ふことを證し得たりと考へたる時は是れ正さしくスコラ哲學の最も生氣を有したりし時にして其の兩者の必ずしも相合ふものに非ざるを認め寧ろ全く其の領域を相分かたんとしたる時は是れ即ちスコラ哲學衰頽の時代なりとす。

中世紀哲學は略〻之れを三期に大別するとを得。第一期は第九世紀より第十二世紀に至るまでにして之れを其の發生の時代と稱し得べし。第二期は第十三世紀にして其の全盛の時代なり。第三期は第十四及び十五世紀にして其の衰頽の時代なり。各期の思想に於いて其の基礎となれる特殊なる哲學上の學說あり、而して這般學說は皆希臘の哲學に由來せるものなり。第一期に於ける哲學的基礎はプラトーン學風の實在論、第二期のはアリストテレース學風の實在論、第三期のは唯名論なり。哲學思想の上より言ば實在論と唯名論との爭ひがスコラ哲學の骨子を成せりといふを得べし。而して唯名論の勝を制するに至りて信仰と道理とが相分離するとなれる也。中世紀哲學の經過を希臘哲學のに比すれば恰かも反對の趣を呈せりと云ふことを得べし。希臘哲學はもと學術的研究の通俗的宗教より分離することによりて始まれるものなりしが、其の末路なるプラトーン學派に至りては遂に俗間の宗教に合躰し宗教的思想を離れて哲學なしといふも不可なき有樣となれり。中世紀哲學はもと宗教と哲學とは相一致するものなりと云ふ確信を以て始まれりしが其の末路に及ひては兩者は全く範圍を異にするものなりと云ふに終れり。

〔四〕哲學思想の內容より云はゞ中世哲學は概ね希臘學術の遺物を受け繼ぎたるものにして哲學上其が根本思想に特に新らしきものあるを見ず。啻に然るのみならず中世紀の思想に於いて哲學は宗教に對して寧ろ婢僕の位置に在りて獨